
魔法少女と魔導師

杏子 = 聖女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と魔導師

【Nコード】

N7114T

【作者名】

杏子Ⅱ聖女

【あらすじ】

“円環の理”が生まれる五年前、紅の魔法少女はその世界から姿を消した。五年後、高町 杏子は魔法少女の理を破壊し、絶望に吞まれた少女を救済するために“エース・オブ・エース”を連れて舞い戻ってくる。これは魔導師と魔法少女が紡ぐ物語

プロローグ

プロローグ

「はあ……。はあ……。これは……。ピンチだな」

周囲は船や飛行機の絵が描かれた壁、どこかの国の風景が描かれた壁に包まれた不思議で奇妙な空間。

そんな空間の中で多節槍と呼ばれる槍の一種を振り回す赤い衣装を着た少女と何とも形容できない存在が篠木を削っていた。

「これ以上はあたしのソウルジェムも限界だな」

少女は自分の胸元にある服と同色であるはずの宝石を見つめる。

本来ならルビーのような輝きを放つ宝石も黒く淀んでいた。といっても、9割が黒で残りの1割が赤く光っている状態だ。

「なら、次で決めてやるよ!!」

少女は渾身の力を振り絞り、異形の存在に突進していく。しかし、異形の存在の姿が歪むといつの間にかその異形は少女の背後に回り込んでいた。

「もうその攻撃のパターンは理解した!!」

直進する方向を一気に反転。そして、そのまま異形に突進していく。思わぬ切り返しに異形の存在は為すすべなく、その身体を貫かれた。そして、その異形の存在は跡形もなく消滅してしまった。

異形の存在が居た場所には黒い球体に出っ張りが付いたようなものが二つ。

「はあ……。はあ……。かなり魔力を使っちゃったが、グリーンシールドは二つ手に入ったし、よしとするか。」

少女は二つの球体“グリーンシールド”を掴んだ。少女の衣装はあちこち切り刻まれており、この戦闘の凄さを物語っていた。

「あれ？なんで結界が解けねえんだ？」

いつもとは違う出来事に戸惑う少女。

開け、異界の扉

突然、グリーンシールドが弾け散り、ブラックホールのような超重力の穴が出来上がった。

「う……。うわあああああ!!!!!!」

少女は超重力の前には為す術なく、その黒い黒い穴に吸い込まれて

いった。

この日、赤の魔法少女 佐倉 杏子はこの世界から姿を消した。
“円環の理”が誕生する五年前の出来事であった。

く???く

「ふん……ロストロギア《インキュベーター》ね。少し行ってみたいけど、あの世界って何故か干渉できないんだよね」

無数に浮き上がり空中で開かれる本の数々。その中心には亜栗色の髪をストレートに伸ばした少女がソファーに寝転び、足をパタパタと動かしていた。

「まあ、何の因果か魔法少女がこっちに来ることがあれば、このロストロギアに目をつけられた少女は助けてあげたいな」

少女が指を振ると浮かび上がっていた本はきちんと自動的に本棚に収納された。

壁際に少女が寝転がっているソファー、反対側の壁には整頓されてカテゴリー別に並べられた本がぎっしと詰まった本棚。

そして、壁に取り付けられた服掛けにはハンガーに掛けられた青と

白のスーツと研究者を思わせる白衣。

「ピーー！！ピーー！！」

その時、通信の着信を報せる音が鳴り響いた。少女は空間投影ディスプレイを操作して通信を繋げた。

「高町一等空尉！！すぐにこちらにいらしてください！！」

「ええ、今日は非番のはず」

「高町一等空尉、いえ、高町なのは特別科学官がお探しになっていた“インキュベーター”の契約者と思われる少女がワームホールを通って現れました！！」

「それは本当？ アスタロッテ補佐」

「はい！！」

自分の副官の報告に反応してソファから飛び起きる少女 高町なのは。
なのはは教導官の青と白のスーツではなく、科学者としての白衣を上から羽織った。

「すぐにそっちに行く。上層部にレアスキル解禁の許可を取っておいで。」

「了解しました！！」

なのはがそう返答すると空間投影ディスプレイが消える。

「それにしても、凄い偶然だね」

「そうですね。マスターが探していたインキュベーターの契約者が簡単に見つかると思いますでした」

ひょこつと金色の髪とルビーの瞳を持った20歳ぐらいの女性が顔を出した。

「アクセリオン。私はその子を助けただけだよ？それ以外に理由なんてない。それは貴女が一番よく知ってるでしょ？私と長年一緒に居る貴女なら」

「すいません、失言でした。」

「じゃあ、少し出かけてくるよ。」

「はい。いつてらっしゃいませ、マイマスター」

時空管理局所属通称“最強の魔道騎士”高町 なのははアクセリオンにそう言つと自分の部屋を出て、とある場所に向かった。

自分の希望を叶え、闘う運命を定められた魔法少女

魔法少女とは異なる魔法少女、魔導師。

極めて近く、異なる、二種類の魔法少女。

本史とは異なる道を歩んだ魔導師、高町　なのは。

紅き魔法少女、佐倉　杏子。

この二人の出会いが定められた魔法少女の運命を覆す。

これは魔法少女と魔導師が紡ぐハッピーエンドな物語である。

プロローグ（後書き）

漫画版のまどマギも完結した記念に書いてみました。原作に出てくる魔女が人に戻ったりします。

感想と評価をお待ちしております。でも、批判は止めてください。それから、ときどきグダグダな文章になります。

設定

姓名：高町 杏子

旧姓：佐倉

性別：

年齢：????

髪型：固定されていない。基本的にはポニー。

使用術式：古代ベルカ式、円環式魔法

使用デバイス：グーグンニル

スキル：『ショートジャンプ短距離瞬間移動』

5年前に『旅の魔女』との戦闘後に時空管理局に飛ばされてきて、
なのはと出会う。

その後、なのはたちが使うデメリットの無い魔法に興味を示し、
なのはに魔法を教えてもらう。

1ヶ月後、なのはの娘として高町の姓を名乗ることになる。聖王教会系列のサント・ヒルデ魔法学校に通っており、学校内ではかなりの優等生。

自分で魔法を編み出すのが得意。魔法関係をみるみる吸収していき、
飛び級した。

友達思いで学校では男女問わず人気。

グーグンニル

人格搭載型のインテリジェントデバイス。なのはお手製の杏子専用

デバイス。

展開するとレイジングハートのエクセリオンモードのような突撃槍の形状になる。ちなみに色は黒く濁った赤色（刀身？部分のみ）。

firstモード：ランス（初期形態）

secondモード：ソード

フルドライブ：伸縮自在の十字槍

姓名：高町　なのは

性別：

年齢：???（とある事情で精神年齢は20歳以上）

髪型：基本的に三つ編み。たまに下ろしている。

使用術式：ミッドチルダ式、古代ベルカ式

使用デバイス：レイジングハート・アクセリオン

スキル：『物質改変能力』

入局直後のロストログア回収任務で回収対象のロストログア《エリクシール》を体内に取り込んでしまったことで正史とは違う歴史を歩むこととなった人物。

《エリクシール》と完全融合してしまい、物質すべてを自分の意のままに改変することができる能力に目覚めた。それをきっかけに大規模クーデタ【久遠の落日】が起こった。

教導官であると同時に特別科学官の役職に就いている。

数年前、大けがを負った時に「死にたくない」という一心から自分の身体を改変し、不老不死になる。

名称：レイジングハート・アクセリオン

性別：

年齢：????

容姿：金髪にルビーの瞳。髪型はストレート

レイジングハートがなのはの『物質改変能力』によって擬人化した姿。

家に居るときはこの姿でいることが多く、家事全般を受け持つ。

ロビンフットⅡヴィルヘルム

性別：

年齢：12歳

容姿：金髪碧眼（ISのセシリアを幼くした感じ）

使用術式：ミッドチルダ式

スキル：集束魔法

杏子の一番古い友人。杏子の頼みで杏子と共に飛び級させてもらった。

自称天才科学者。ちなみに、なのはの隠れファンで自室には彼女のポスターがたくさん貼られている。

姓名：アテナⅡブリアーシュ

性別：

年齢：14歳

容姿：青色のショートヘア。中性的な顔立ち。

使用術式：近代ベルカ式

スキル：魔力付与、魔力変換 氷結

サンクト・ヒルデ魔法学校に通う中等部三年。ロビンフットと杏子を気にかける心優しい少女。

男性のような服装を好み、顔立ちも中性的なため、一見男にしか見えない。

守護騎士シグナムにあこがれている。

【用語解説】

【久遠の落日】

管理局本局で起こった大規模のクーデタ。原因は上層部がなのはを危険視し、暗殺しようとしたため。

このクーデタはすぐに鎮圧されるはずだったが、なのはの幅広い人脈のおかげで上層部の敗北に終わった。その際に、管理局が今まで行ってきた裏実験が発覚し、上層部の総入れ替えが行われた。それによりリンディやカリムなどの人物がそのポストに就いた。

【エリクシール】

とある次元世界で発掘された正体不明のロストログア。なのはとの適合率が異常に高かったため、なのはの身体に溶け込んだ。

【物質改変能力】

ありとあらゆる物質すべてを自分の意のままに改変することができるスキル。

「久遠の落日」の後、新上層部の許可が無い限り使用は控えるように言われている。

なのはの人柄ゆえ、緊急事態の時は独自の判断で行使することが許されている。

【ソウルアクセサリー】

なのはの『物質改変能力』によって“ソウルジェム”が改変されたもの。

濁っても魔女化することではなく、疲労感を感じるだけになっている。ただし、指一本動かせないぐらいの疲労。特殊な呪いが施されているので壊れることはない。

【短距離瞬間移動】

「瞬間移動」に該当する術式に通常存在する「フェイズタイム」(

「移動開始/出現」時の他の行動を取ることができない時間)を、

鍛錬や術式調整で「戦闘に使えるレベル」にまで短縮した技術。

習得難易度Sの超高等技能。杏子が真っ先に習得しようとしたスキル

第1話

魔法発祥の地、第1次元世界ミッドチルダ。その首都クラナガンから少し離れたミッドチルダ北部に該当する整備された道を全力疾走してる1人の赤毛の少女が居た。

「だああ！！何でこんな時に寝坊するんだ！？」

畜生！！目覚ましが壊れてなかったら、今頃学校に着いてたのに！！

独り言を愚痴りながら、整備された通路をひたすら疾走する少女。長い赤色の髪が風に靡いて揺れる。

「おっはよ、キョウコ」

「ロビン？お前も遅刻か？」

あたしに声を掛けて来たのは金髪碧眼の少女。
あたしの親友であり、悪友の“ロビンフット”ヴィルヘルム”。

「誰に説明してるの？」

「メタ発言禁止」

「ふん。つか、急がないと鬼教師のながい説教を喰うことなるよ？」

「わかってるよー!!」

両足に行使してる身体強化魔法を二段階ほど強める。
ロビンもスピードをあげる。

「相変わらず、キョウコは速いね。私のコレに着いてこれるなんて。」

「身体強化魔法を行使してるんだ。これくらい当然だ。」

「いやいや。身体強化魔法でも追い付けない代物だよ？コレ」

ロビンが“コレ”と言っているのはロビンが乗っている空中滑走ライドボード。

小型の魔力炉を取り付けてかなりの加速が出せるらしい。

そんなことを話している内にザンクト・ヒルデ魔法学校の校門が見えてきた。

もう朝のHRが始まる時間なのでに閉まっている。

「キョウコ!!このままだと遅刻確定だよ!？」

「わかってるよー!!ロビン、跳ぶぞー!!」

「合点承知」

あたしとロビンの教室は校舎の三階。つまり、最上階だ。
悠長に階段を登って間に合うはずがない。

「ライドボード、魔力炉フル回転!!」

「魔力、全開!!」

両足の裏に貯めた魔力を一気に……開放!!

「I can fly!!」

アタシとロビンは同時に校門を飛び越え、自分の教室の窓縁に足を掛けることに成功する。

「……………」

無事に教室に着いたアタシたちを待ってたのは……………鬼教師こと、
エクステリア「エルヴィス」。

黒い髪と黒い瞳が特徴的な29歳の独身教師。婚期をことごとく逃し、同期の中では最後らしい。容姿良いのだが、性格が原因らしいが……………激しくなっと、ヘブツ!!

「キョウコ、失礼な考えていたな？」

「……………ソナコトナイヨ？」

「ふ……………」

くバチンッ！！く

本日二度目となるエクステリア教諭の得意技、出席簿アタック（+魔力強化）が杏子の脳天に降り下ろされた。

ロビンフットが痛みに悶える杏子をクスクスとほくそ笑んでいると

……

くバチコーン！！く

「あぎいー！」

ざまあwww

「つか、私だけ明らか音が違うんですけど！？」

「キョウコを違ってお前は校則違反の常習犯だ。いくら飛び級した優等生だろうと容赦はせん。」

アタシとロビンは現在中三扱い。本来なら、中一なんだが、飛び級してこの学年だ。

「大体、お前のような素行の悪い奴がよく飛び級できたな。」

「うーん………何でだろ？」

言えるわけねえよな。母さんに頼んでロビンを飛び級させたなんて

……

「まあいい。無断魔法使用の罰は帰りのHRで言い渡す。」

「はい」

「もうHRも終わりだな。今日は特別な連絡はない。チャイムが鳴ったら、解散だ。」

言うべきことを言い終わるとエクステリア教諭はさっさと教室から出ていった。

アタシもロビンもいつまでも立ってる訳にはいかないので取り敢えず自分の席に着いた。

「災難だったね、キョウコ」

「まっただけ。」

席に着くなり隣の席に座るクラスメイトが声を掛けてきた。

“アテナ”ブリアーシュ”。中三に進級してから最初に声を掛けてきた奴だ。

アタシに何かと世話を妬いてくれるから、結構助かってる。母さんの親友である八神 はやての家族で烈火の将と謳われるシグナムに憧れてるらしい。

「でも、キョウコが遅刻なんて珍しいね。何かあったの？」

「いや、目覚ましの電池が切れてただけだ。」

「それはまた……」

アテナは苦笑いを浮かべた。

「で。お前は何をしている?」

「キョウコの髪を弄くってる」

杏子の長いポニーテールの髪はロビンフットの手によってリボンを解かれてストレート状態になっている。ロビンフットはこのように杏子の髪の毛を弄るのが大好きなのだ。このやりはロビンフットと杏子が知り合ってから続けられている。

「それにしてもキョウコの髪ってさらさらだね　何か工夫でもしてるの?」

「別に。髪の手入れなんて母さんがやってくれてるだけだよ」

「いいよね。あの“不屈のエース・オブ・エース”と一緒に居られるなんて。変わってくれない?」

「やなことだ」

こいつは母さんの隠れファンだからな。部屋に飾ってあったポスターが全部母さんのだったときは流石に引いたぞ? まあ、あの人のおかげで今のアタシが居るんだけどな。

知らず知らずのうちに杏子の表情は少し笑っていた。

「キョウコ、貴女ってマザコンだよな」

「なっ!!! うなわけあるか!?!」

「わー、怒った。」

SIDE NANOHA

ミッドチルダの沿岸部にそびえ立つ真っ白な建物。とある事情から実験部隊として活動を始めた少人数エキスパートのより構成される部隊、古代遺失物管理部機動六課。

その機動六課の一角に設置された特別訓練施設、陸戦用空間シミュレーター。その空間の中で訓練を行う4人を遠くから見つめる人物が居た。

「うーん……かなりいい動きができるようになったね」

「そうですね。リニアレールの回収任務がうまくいったのが薬になったみたいですね」

私はこの陸戦用空間シミュレーターと一緒に管理しているシャーリーに声を掛ける。

私の仕事は機動六課に配属された四人のフォワードを最大限まで育

て上げること。四人には新型デバイスも手渡したし……そろそろ次の段階に移ろうかな？

「アクセリオン、明日の教導は杏子にも手伝ってもらおうか？」

「賛成です。杏子にもフォワードにもいい経験になると思います。」

「キョウコって確かなのはさんの義理の娘さんですよ？」

「そうだよ。高町 杏子。私とアクセリオンが直接鍛えたから、かなり強いよ。」

それにしても、杏子の才能にはびっくりしたな。私が教えたことをすぐに吸収して自分に適応してるのか判断して……私もあれほど楽しい教導は初めてだったよ

なのはは杏子に魔法を教えていた頃のことを思い出した。

「明日は土曜日だから、杏子も休みだし……ちょうどいいね。」

明日の教導内容が決まったね 家に帰ったら、杏子にお願いしないと。

そう思いながら、なのはは訓練を続けるフォワード4人に視線を戻した。

第1話（後書き）

まどマギ編に入るのは二話ほど後です。

第2話

第2話 「機動六課へ」

SIDE KYOUKO

ミッドチルダ北部。杏子が通うザンクト・ヒルデ魔法学校とミッドチルダ中央区画のちょうど中間地点ある一軒家。その家から香ばしい匂いが立ち上っていた。

「　　」

鼻歌交じりにキッチンを移動する杏子。今日は土曜日なので学校も休み。

「かんせーい」

杏子が休日を利用して作っていたのはガトーショコラと呼ばれるチョコレートを使った洋菓子である。

杏子は熱々ホカホカのカトーショコラをラップに包んでバスケットに入れる。

「さあ、行こうか。」

《Yes, My Master》

胸元にぶら下がっている龍をモチーフにしたアミュレットに声を掛ける杏子。

エプロンを外し、戸締りを確認した後、意気揚々と外に飛び出す。

「さて、時間は．．．．．あんまり余裕がねえな」

少しお菓子作りに時間を掛け過ぎたか？まあ、六課までそんなに離れてないし、大丈夫だろ。

杏子は靴ひもをしつかりと結びなおすと機動六課に向けて走り出した。

機動六課の隊舎があるのはミッドチルダ中央区画の湾岸部。杏子となのはが住まう高町邸からそう遠いわけでもないが、歩いていくには少し遠い距離だ。

．．．。

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

数分後

「到着。でも、少し疲れたな」

《当たり前です。短距離瞬間移動を多用してここにくる時間を短縮

したんですから》

「もう少し改良が必要だな。この消費魔力じゃあ、すぐに魔力切れだ。」

《ただでさえ、習得難易度Sの【短距離瞬間移動】をどこまで昇華させるつもりですか……》

杏子の相棒、グーゲンニルは呆れたように呟いた。

アタシの魔力はそれほど多くない。いや、AAAクラスの魔力はあるらしいが、母さんはもっと多い。
母さんと同じ戦場に立つにはどれだけ消費魔力を抑えるかがカギだ。
おっと、話がずれたな。

「さてと、母さんを探し出しますか」

杏子は機動六課の敷地内に足を踏み入れた。

……。

……。

……。

……。

……。

時間にしてざっと10分後。

「迷ったな」

機動六課の敷地内で杏子は見事なくらい迷子になっていた。

しまったな。母さんから機動六課の内部地図を貰っておくべきだった。さっきから人も通らねえし……何でだ？

《ちょうどお昼時ですからね。皆さん、食堂に居るんじゃないでしょうか？》

グーグンニルの言い分も一理あるな。ちょうど12時を過ぎた頃だし、食堂の方に向かうか。

「グーグンニル、食堂の位置わかるか？」

《わかるわけないでしょ》

「だよな。」

一難去つてまた一難。母さんに連絡を取るか？……いや、仕事中だったら迷惑だな。

くそっ！！誰が通らねえかな

その時、杏子の前をピンク髪の少女と赤髪の少年が通り過ぎた。その身に纏うのは杏子も何度か見たことがある機動六課の制服だった。

「おい！！そのチビツ子二人！！」

アタシは少し大きな声で二人のチビツ子呼びとめた。

この二人……結構良質な魔力を持ってるな。アタシより少なえが、AAクラスか？

「お前ら、機動六課の人間だよな？」

「はい。どうかしましたか？」

「かあ……高町　なのはを探してるんだが、何処に居るか知らねえか？」

「えっと……確か食堂に居ると思います。よかつたら案内しましょうか？」

「いいのか？」

「はい。ちょうど僕たちも食堂に行こうと思ってたところだったの
で」

「じゃあ、食堂までの道案内を頼む。」

「「はい!」」

杏子は二人のチビツ子の案内の下、食堂に向かっていた。

「お前ら、魔導師か？」

「はい。この機動六課のフォワードです」っと赤髪の方のチビツ子が答える。

となると、アタシが相手をする事になるのはこの二人とあと二人。赤髪の方は接近戦タイプだな。筋肉のつき方がアタシと似てるし。ピンク髪の方は………後衛タイプか？

「きゅくゝる」

バサッ、バサッという音を立てて白い竜が下りてきた。その白い竜はピンク髪のチビツ子の肩に乗った。

「竜………か？」

「はい！！私の竜、フリードリヒです！！」

「きゅくゝる」

「竜なんて見るのは初めてだ。アルザスの飛竜か？」

「はい！！」

こいつはアルザスの竜召喚師か……。となると補助型のフルバック。あのフリードリヒっていう竜の能力がどれほどの物かはわかんねえな。

杏子は二人のチビツ子の会話から二人の戦闘スタイルを推測する。杏子は突進型ではなく、相手のポジションなどを見極めて攻める論理型だ。これはなのはの影響だったりする。

そんな会話をしている間に食堂の前にたどり着いた三人。

「へえ………。広いな。」

実験部隊なのに少し異常じゃねえか？ いや、あのカリムさんの予言が絡んでるらしいし、当然か？

その時、杏子は目的の人物を見つけた。

「母さん!!」

えっ？

食堂内に居た人間の驚きの声を無視して杏子は椅子に座る自分の母親、なのはの下に駆け寄る。

「あつ、杏子。遅かったね」

「ごめんごめん。お菓子作りに少し時間を使いし過ぎちゃって。」

「まあ、いいや。午後の訓練に間に合ってくれたら、よかったからそれよりも杏子のお菓子を食べようか？」

「ああ。」

バスケットから杏子の作ったガトーショコラを取り出す。

「あつ、包丁忘れた」

「大丈夫ですよ。食堂の人に言って貸してもらいます。ついでに取

「マスター、持ってきましたよ。」

「ありがとう、アクセリオン」

なのははアクセリオンから包丁を受け取ると杏子特製ガトーショコラを八等分して、自分と杏子のお皿に盛り付ける。

そして、未だに惚けている四人をほって、食後のデザートのカトーショコラを口に運んだ。

「さすが杏子。チョコレート菓子はもう一人前だね」

「それ以外の洋菓子は母さんの方が上手だけだな」

そう言いながら、フォークでガトーショコラの一部を切り取って自分の口に運ぶ杏子。

.....。

.....。

.....。

.....。

SIDE ANOTHER

昼食と食後のデザートが終了し、午後の訓練のために陸戦用空間シミュレーターに集められたフォワード四人。

「さて、今日の午後の訓練はある人物との模擬戦です。最近、ガジェットとばかり模擬戦してるから、その戦い方が染み付いても困るからね」

「あの……その人物って誰なんですか？」

フォワード陣を取りまとめる司令官役のティアナ＝ランスターが疑問を口にする。

「それは戦闘区域に入ったらわかるよ。向こうはすでに待機してるから、デバイスを展開しないと不意打ちで一気にノックダウンもあり得るから気をつけてね。」

「はむ……母さんもキツイ条件を出してくれるな。4対1で飛行魔法は使用禁止。それ以外はなんでもOKって。」

みたらし団子を食べながら、杏子は太い木の枝の腕でフォワード四人のデータを閲覧していた。

「このティアナって奴が指揮官かな？ポジション的に」

《そうですね。それに幻影魔法を所有してるようですから厄介ですね》

「ああ。データで見ても四人の実力は未知数だからな。」

《マスター、フォワード陣が戦闘区域に入ったようです》

「ようやくか。」

杏子は立ち上がり、啞えていた団子の串を一本の樹に向かって投げた。

その刹那、杏子の衣服は量子変換され、戦闘用の衣服に再構成される。白いフリルをあしらった紅色の衣装。魔法少女としての戦闘服とまったく同じ服装である。

その手には突撃槍のような赤い槍が握られている。

「グーグンニル、相手はどんな布陣だ？」

《一か所に固まってこっちの様子を伺っているようです》

「ふん……なら、こっちから出向いてやるか」

杏子は忍者のように枝から枝へ飛び移り、フォワードたちが居る場所に向かう。

（見つけた！！）

魔法で強化された瞳が遙か遠方にいるフォワードの姿を捕えた。

「せっかくだ。一昨日完成した魔法の実験体になってもらうぜ!!」

杏子の足元に真つ赤な光を放つ古代ベルカ式魔法陣が浮かび上がる。そして、杏子の周囲に杏子の魔力光と同じ色の魔力剣が無数に出現する。

その刹那、杏子の姿はその場から消え、フォワードたちの中心に現れた。

「うそっ!!」「いつの間に!？」

「おせえ!!」「エクスキュション・ソードバレル」!!」

杏子の合図とともに周囲に停滞していた魔力剣が外側に一斉に打ち出される。

スバルは持ち前の障壁の硬さでそれを防御し、ティアナは障壁を張るも突破されてダメージを受けた。

キャロとエリオは間一髪エリオがキャロを抱えて杏子の魔法の射程範囲外に逃亡した。

「今の一撃でけりが付くと思ってたんだがな。予想以上に楽しめそうだ」

杏子はフォワードたちの予想以上の実力に対して楽しそうに笑みを浮かべた。

「はあっ!!」

「おらっ!!」

スバルから打撃と杏子の槍がぶつかり合う。

「シュートっ!!」

ティアナからの射撃魔法が杏子に降り注ぐ。

「グーグンニル!!」

ガコンっ!!という音を立ててカートリッジがロードされる。

「竜月閃!!」

三日月を描くように槍を振り回す。射撃魔法を打ち消し、さらにスバルを退ける。

そして、再び得意技の短距離瞬間移動を使う。

「消えたっ!?!」

「終わりだあ!!」

「ビュンッ!!ゴッ!!」

ティアナの背後に回った杏子が渾身の力を込めて槍を振るう。槍はティアナの横腹にヒットし、そのまま樹に叩きつける。

「ストライク・スターズ!!」

グーグンニルの先端から砲撃が放たれた。砲撃はティアナを飲み込み、ティアナの意識を一撃で奪った。

ティアナ、撃墜。

「はああ!!」

間髪いれずにスバルが襲いかかってくる。杏子はスバルのパンチを槍の柄で受け止める。

「キョウコちゃんって強いんだね。」

「そうでなきゃ、“高町”を名乗ってられるわけねえだろ!!」

杏子はスバルを思いつき蹴り飛ばす。

《Load cartridge》

今度はカートリッジを二回連続でロードする。

「マニユーバA・C・S!!」

グーゲンニルの先端に魔力を凝縮した魔力矛が展開される。スバルは避けれないと悟ったのか障壁を張る。しかし、杏子のマニユーバA・C・Sはなのは直伝の障壁突破魔法。スバルの未熟な障壁を貫通する。

「ストライク・スターズ!!」

くドーンッ!!!

障壁を貫通してからの高威力魔力砲。なのはがよく使うコンボであ

り、かなり便利なので杏子もよく使う。土煙が晴れると漫画のように目をくるくる回したスバルが倒れていた。

「よし。これで二人は倒せたな。あの二人のチビツ子はどうした？」

《杏子が仕掛けた罠に引っかかってましたよ》

「は？」

杏子は思わず絶句した。罠を仕掛けた覚えはあるが、引っかからないと思ってたトラップだったので驚いたのだ。

「とりあえず………気絶した奴らを回収して母さんの所に戻るか」

《そうですね。》

「どうだった？杏子」

気を失っていたティアナとスバルを抱えて戻るとなのはから感想を求められた。

「最初の一撃で決着つかなかったのはびっくりした。でも、アタシに比べたらまだ弱い」

「まあ、杏子は私が長い時間教導してたからね。実力差はどうやつてもでちゃうよ」

「あと、チビツ子二人はどうかと思う。見え見えの罠に引っかかってたし。まあ、全員伸び代はありそうだ」

「そっか」

「暇なときにまた来てもいいか？アタシの腕を腐らせないようにするために」

「いいよ。」

この日より杏子は学校が休みの土日は機動六課の訓練に顔を出すようになった。

第2話（後書き）

グダグダ。さっさとまどマギ編に入りたいな。といっても、あ
と一話で突入しますかね。

第3話

第3話 「ブリーナク」

SIDE KYOUKO

アタシが機動六課に顔を出すようになってから数週間後、大体学校が夏休みに入る少し前。

アタシと母さんはミッドチルダ北部ベルカ自治領にあるとあるベルカの遺跡に来ていた。

何でこんな辺境の地に居るのかというと・・・・・・話は昨日に遡る。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

学校が終わるとすぐにアタシは騎士カリムに呼び出された。

騎士カリムというのは、カリムⅡロシアのこと。レアスキルの【
プロフィール・シュリフテン
預言者の著書】を持つ人物で母さんの知り合い。

「ねえ、キョウコ。三つの約束はまだ一つ残ってたわよね？」

「・・・・・・・・はい。（物凄く嫌な予感がする。）」

アタシと騎士カリムはロビンを飛び級させるためにある契約を交わした。

それは「カリムの依頼を三つだけ引き受ける」という契約だ。中三になってから二つの依頼を受けた。

二つとも古代ベルカ遺跡に眠る遺産を取ってくること。しかも、遺跡で発見した物はアタシに譲るという矛盾した依頼。

母さんにも手伝ってもらって危険を潜り抜けたけど、残ってたのは文化的遺産ばかり。

「実は、新しい古代ベルカの遺跡が見つかったんだけど・・・・・・・・トラップが厳しくて調査隊も奥まで進めないのよ。」

どうやらアタシの嫌な予感は見事に的中してしまったようだ。

「そついうわけでこれが最後の依頼。内容はいつもと同じ。行ってくれるわよね？」

有無を言わせない笑顔でこちらに重圧を掛けてくる騎士カリム。断りたいが、こつちに拒否権など存在しない。

「・・・・・・・・わかりました。」

結局、引き受けるしかないのだ。

.....

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

そついうわけでアタシと母さんは此処に居る。正直、今すぐ帰りたい。

でも、向こうに借りがあるため、無理だ。

「はあ・・・・・・・・。」

「ほらほら元気出して行こう？古代ベルカの遺跡なんだから、“ユニゾンデバイス”が眠ってるかも知れないよ？」

「そうだな。ユニゾンデバイスじゃなくてもロストログアが眠っていることを祈ろう」

「さあ、奥に進むよ？」

「ああ。」

気を取り直してアタシと母さんは遺跡の中に足を進めた。

遺跡の中は日の光が入ってこないため、真っ暗だが、母さんの照明魔法があるおかげで普通に歩ける。

「ここら辺はトラップが解除されてるね。」

「調査隊も最初の方は進めたらしい。でも、最深部にはたどり着けなかったらしい。」

「うん。此処から本番ってことだね」

壁には赤い印が描かれている。これは調査隊が此処から先には進めなかったことを示している。

杏子もなのはもグーグンニルとデバイス状態のレイジングハートを強く握りしめる。

「行くよ!!」

「ああ!!」

二人は同時に駆けだした。

「おっとつ!!」「ほいっと」

両側の壁から弓矢が連続で放たれてくる。だけど、この程度なら弱い障壁ぐらいで十分だ。

弓矢トラップの最中、床が突然開き、落とし穴が作動する。

調査隊なら確かにここで御だ仏だろうが……

「よつと」「危ない危ない」

飛行魔法が使えるアタシたちには関係ない。着地した時に再び弓の洗礼を受けるが、障壁がそれを阻んでくれる。アタシと母さんは弓矢トラップを一気に駆け抜けた。

「あれ?行き止まり?」

「おかしいな。ここまでは一本道のはずなのに……………」

一本道を進んできたのだから、道を間違えたはずがない。だけど、行き止まり。

すると、母さんはぺたぺたと壁を触り始めた。

「何してるんだ？」

「私の故郷の漫画にね、壁の中に一か所だけ違うレンガがあつてそれが扉を開けるスイッチになってるっていう仕掛けがあつただけど……………あつた!!」

なのはの予想通り、横並びに組み立てられたレンガの壁の中に一個だけ縦になっているレンガがはめ込まれていた。なのはは迷わずそのレンガを押した。

くカチツ!!く

何かがはめ込まれる音が聞こえると目の前の壁が音を立てて崩れ落ちた。

「なんつつ古典的な……………」

「この世界の人にとっては難しいんだろうね。魔法なんて微塵も関係ない仕掛けだし」

「だな。」

まあ、とにかくアタシと母さんはさらに奥に進むことに成功した。

だけど、その先はまた行き止まりだった。

杏子たちがたどり着いた部屋は広く、中心に石板があり、部屋の四つの隅には四色の玉がそれぞれ置かれていた。

「『巡りゆく時を辿れ。さすれば、道は開かれん』。ここにも仕掛けがありそうだな。」

「だね。」

この石板がヒントになってるみたいだけど、意味がまったくわかんねえ。

SIDE NANOHA

『巡りゆく時を辿れ。さすれば、道は開かれん』か……。四色の玉の色はそれぞれ緑、白、赤、黒。『巡りゆく時』は四色の玉。それを辿ってことだろうけど……。

「この四色の玉が何を現すんだろ？」

「四つで時って言ったら、思いつくのは四季だな。」

「そうだね。でも、黒が何の季節を現すの？」

「うーん……………」

杏子も考え込む。

四季に関連するのは……………食べ物？いや、それだと白がわからない。

そう言えば、すずかちゃんが何か四季関連で私に教えてくれたような……………」

なのはは自分の過去の記憶を遡って行く。それを聞いたのはなのはとすずかがとある出来事で友達となった時の自由研究の時に……………」

『日本の四季と中国の四神ってそれぞれが対応するようになってるの』

「……！」

そうか！！四神だ！！でも、詳しく四神のことは知らないし……………」

「ねえ、杏子。四神って知ってる？」

「なんだよ唐突に。北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎。四神にはそれぞれ司る方位、季節、そしてその象徴する色がある。」

「その四神が象徴する色ってわかる？」

「わかるけど……ああ、そう言うことか」

どうやら杏子もこの部屋のカラクリに気づいたみたいだね。

「青龍は青、もしくは緑。司る季節は春。朱雀は赤。司る季節は夏。白虎は白。司る季節は秋。玄武は黒。司る季節は冬だ」

「ありがとう」

私は緑、赤、白、黒の順番で球体に触れる。すると、再び奥に続く扉が開いた。

「それにしても、よく四神思想なんて覚えたね」

「少し齧ってたんだよ。」

「そのおかげで助かったよ。さあ、先に進もう」

……。

……。

……。

……。

結構、奥まで来た感じがするんだけど……まだ最深部につ

かないみたいだね。

「少し酸素が薄くなってきたな」

「だね。結構地下深くまで作られてるみたい。」

「今まで潜った遺跡よりもかなり嚴重だし．．．．．一体何が眠ってるんだろうな？」

「さあね！！」

何の仕掛けもないレンガ造りの扉を開ける。その先に待ってたのは．．．．．

「ぎゃおおおおおん！！！！」

岩の身体を持った巨大なドラゴンでした。

「生き物．．．．．じゃないね。人工魔道生命体のようだ」

「この部屋の番人ってわけか！！」

杏子が短距離瞬間移動を使い、グーゲンニルでロックドラゴンの右腕を切り落とす。

同時になのはもレイジングハートでロックドラゴンの胴体を切り落とす。

「何だあつけな．．．．．」

杏子は言い切る前に固まってしまった。なぜなら、ロックドラゴン

はすぐに再生したからだ。

「うわゝ・・・・・・・・再生能力持ちかゝ。粉々に砕くか、コアを破壊するかしないとこれは無理だね」

「なら、アタシがやるよ」

杏子はあるうことかグーグンニルを待機状態に戻す。そして、杏子が代わりに取りだしたのは・・・・・・・・天使のような羽飾りが付いたソウルアクセサリーだった。

杏子はそのソウルアクセサリーを祈るように握りしめる。すると、まるで竜のように巨大な多節槍が姿を現した。

巨大な多節槍は真っ直ぐロックドラゴンに向かっていき、ロックドラゴンを真っ二つに切り裂いた。

コアも破壊され、行使されていた魔法の効力が消えたロックドラゴンはただの土くれになってしまった。

「わざわざ使わなくてもよかったんじゃない？」

「いや、粉々に砕こうとして砲撃撃つたら遺跡全体が崩れる可能性があるし」

「確かにね。」

なのはと杏子はロックドラゴンが守っていた扉を開けた。

その扉の先に広がっていた光景は・・・・・・・・RPGゲームに出てくる宮殿最深部のように通路の両側が奈落の底まで続くようになっており、その先に黒い十字架に小人が張り付けられている光景だった。

「母さん、これって……ユニゾンデバイスだよな？」

「うん。しかも古代ベルカ純正のユニゾンデバイス。」

ユニゾンデバイスとは……

ベルカによって開発されたデバイスで、言うなれば、ミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもの。姿と意志を与えられたデバイスが、状況に合わせ、術者と「融合」し、魔力の管制・補助を行う。この形式では他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができる。しかし、融合適性を持つ者の少なさや術者に合わせた微調整・適合検査の手間、そして何よりデバイスが術者をのっとり、自律行動を始めてしまう「融合事故」の危険性・事故例により、製品化に至らなかった。

「まさか最後の遺跡で大当たりを引くことになるなんてな」

杏子はそう言いながら、眠り続けているユニゾンデバイスに触れる。

「キーンッ！！！！」

「……」

い、一体何が！？

なのはと杏子の足元に古代ベルカ式の魔法陣が展開されていた。

使用者登録、融合適正を確認しました。二人をユニゾンデバイス“ブリューナク”の使用者として設定します。“ブリューナク”の

封印を解除します。

そんな機械音声が聞こえると同時に“ブリューナク”と呼ばれたユニゾンデバイスを封印していた十字架は崩れ落ちた。そして、ブリューナクはゆっくりと瞳を開けた。

「貴女方が私の新しいマスターですか？」

「あ、ああ」

「初めまして。私は“氷界の神姫”ブリューナクと申します。以後お見知りおきを」

そう言いながら、礼儀正しくお辞儀をするブリューナク。

「高町 杏子だ。」「高町 なのはだよ」

「キョウコになのはですね。わかりました。マスター登録はすでに完了してますのでいつでも融合は可能です。」

「わかった。長い付き合いになりそうだし、よろしくな、ブリューナク」

「はい、杏子」

こうして我が高町家に新しい家族ができました。あと、余談ですが、この遺跡に眠ってたのがユニゾンデバイスだと知った騎士カリムは心底悔しそうでした。ざまあ見る、なの

第3話（後書き）

杏子はユニゾンデバイスを手に入れた！！いや、まどマギ編に入る前に空気になりにくそうな戦闘員を追加したただけです。

次回からはようやくまどマギ編。ちなみに、今までは序章。

第4話

S I D E K Y O U K O

「まさか・・・・・・・・もう一度ここに戻ってくることになるなんてな」

アタシが居るのはミッドチルダではなく、特殊管理外世界。アタシの・・・・・・・・生まれた世界。

この次元世界は時空管理局でも干渉できなかった不思議な世界。だけど、アタシのソウルアクセサリーがこの世界への通行書になっていることが判明した。

そして、アタシと母さんは駆動炉を新品の物に交換された次元航行艦アースラでこの世界にやって来た。ある目的を果たすために・・・・

「キョウコ、此处に来たのは観光ではありませんよ」

「わかってるよ、ブリューナク。」

それに此处はアタシの家じゃねえ。今のアタシの家はミッドチルダの高町家だ。

アタシは佐倉 杏子じゃねえ。高町 杏子だ。

「かなり近くに魔女が居るな」

「魔女・・・希望を叶えた魔法少女が絶望し、絶望を振りまくようになった存在。」

「アタシたちはその魔女を救済することだ。さあ、行くぞ。こうしてる間にも魔女が殺されるかも知れねえからな」

「はい。」

杏子たちはソウルアクセサリーの反応を頼りに魔女の搜索を始めた。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

魔女の潜伏場所はすぐに見つかった。魔女が潜伏していたのはなんと病院だった。

「結界に侵入された形跡がある。どうやら先を越されたようだな」

「こちらも急ぎましょう」

「ああ。ブリーナク!!」

「はい!!」

「ユニゾン・イン!!」

杏子とブリューナクが融合し、一つとなる。

杏子のトレードマークの赤い髪は水色になり、瞳の色は金色に近い色に変色した。

「じゃあ、突入するぞ!!」

【いつでも大丈夫です】

「OK!! 開け、魔女の結界よ!!」

十字槍を召喚し、魔女の結界をこじ開ける。ブリューナクとユニゾンしたアタシは魔女の結界に飛び込んだ。

こじ開けた魔女の結界の中は大量のお菓子が散乱する空間だった。この空間の主はさしずめお菓子の魔女っていうことか？

【キョウコ!! あれを見てください!!】

「ん？」

ブリューナクに言われて下を覗くと……金髪縦ロールの奴が魔女の使い魔と戦っていた。

服装からして魔法少女だろうが、後ろに居る一般人はどういうことだ？ 巻き込まれたのか？

【巻き込まれたというより観戦してる、と言ったほうが正しそうですね。】

「ああ。魔女との戦闘を根本的に勘違いしてるようだな」

【それにしても………かわいらしい魔女ですね】

ブリューナクの言うとおり、この結界の主はまるで人形のような魔女だった。

杏子とブリューナクが戦闘を傍観しているとリボンで拘束された魔女が口から何か得体のしれないものを吐き出した。

「ブリューナク!!」

杏子はすぐさま飛び出し、魔法を発動させる。

「【コキュートス・ワールド!!】」

杏子が放り投げた魔力球が破裂すると魔女の世界は一瞬で絶対零度の世界に変った。

魔力変換を持たない杏子だが、ブリューナクとユニゾンしている間だけ「氷結」の魔力変換とレアスキル並みの稀少さを誇る「流水」の魔力変換を使うことができる。しかも、一般の魔力変換持ちよりも強力な物を使うことができる。

閑話休題

「大丈夫か、新米魔法少女？」

凍りついた魔女の頭に腰を下ろしながら、声を掛ける杏子。

「その口ぶりからすると貴女も魔法少女みたいね。グリーンフィードを奪いに来たの？」

「そうだと言ったらどうする？」

「死なない程度に痛めつけるわ。」

おいおい。見かけによらず物騒な発現だな。

「命の恩人に対してその言い草かよ。大体な……………」

得意技の短距離瞬間移動を使って物陰に隠れていたピンク髪の少女を人質に取る。

「まどか！！」「かなめ鹿目さん！！」

「こんな足手まといを抱えたままアタシに勝てると思ってるのか？それに、お前ら魔法少女を正義の味方と勘違いしてないか？魔法少女ってというのは殺し合いの世界に生きる存在だ。」

こいつらはまだインキュベーターと契約していない。ここで引き留めさせるのが、アタシの役目だ。

契約した後、アタシのように後悔しないためにな。

「せいぜい道を間違わないようにするんだな。じゃないと……………
…後悔するぜ」

そう言い残すと杏子は魔女の前に姿を現した。その手には透明な球体が握られていた。

「絶望に飲み込まれし哀れな少女の魂をここに封じる。魂魄封印！
」

杏子が呪文を唱えると透明な球体は桃色に染まった。

「エクセリオン・バスター！！」

グーゲンニルを展開せずに魔法の行使。我ながら随分と上手くなったものだ。

アタシとブリーナクの合体技「コキユートス・ワールド」でカチコチになつてゐる魔女はぼろぼろと崩れ落ちた。

「ほら。」

魔女が落としたグリーンフィードを少女に向かって放り投げる杏子。

「アタシにはグリーンフィードは必要ねえからな。あばよ」

魔女の結界が消えると同時にアースラの転送ポートが作動し、杏子を回収した。

SIDE NANOHA

私が今居るのはこの特殊管理外世界の衛星軌道上に浮かぶ次元航行艦アースラのブリッジ。

クロノくんに頼んで退役寸前のアースラの駆動炉を取り替えてもらって“特務零課”の拠点になってます。

さらに、アースラには最高性能のAIがオモイカモネ積みまれているので自動航行が可能になってます。

「ただいま」

「おかえり。ちゃんと回収してきた？」

「ああ。」

杏子は桃色に染まった球体を取り出した。うん、ちゃんと回収してきたみたいだね

「じゃあ、着いてきて」

「ああ。」

アースラのある一室。この部屋の両端には人の入ったカプセルが置いてある。

このカプセルに入ってる人には魂がない。【久遠の落日】で回収された人造魔導師。

「杏子、魂魄封入球を貸して」

杏子から魔女の魂が入った“魂魄封入球”を受け取ると私と杏子が協力して編み出した神すら超越する魔法を発動させる。

「絶望に吞まれし魔女の魂に新たな希望と人生を与えん。究極技法“魂魄転生”――」

“魂魄転生”は身体を無くした魂魄を魂魄のない身体に定着させる究極技法。ある意味では死者蘇生と言った方が正しいかもしれない。魂魄に刻まれた情報を身体に完全に転写する。

しばらくすると15歳前後の身体は10歳ぐらいまで縮み、金色の髪はピンク色に変った。

「どうやら魂魄の情報に則って身体の遺伝子が書き換えられてるようだね」

「今の間に休んだらどうだ？魂魄転生は母さんの魔力を大量に使うんだから」

「そうだね。そうさせてもらっよ」

私は部屋を出て自分の部屋に戻った。ちなみに、杏子の学校は夏休み中で私の教導の方はクロノくんが引き受けてくれている。この任務の期間は一ヶ月半。

初日で魔女を一人救済できたんだから、よしとしよう。

自分の部屋にたどり着くなり、なのははベッドの上にダイブして意識を手放した。

SIDE ANOTHER

お菓子の魔女と戦っていた金髪縦ロールの少女。その少女はマンシヨンのとある一室で白い狐のような生物と会話していた。

「ねえ、キュウベえ。さっきの子も魔法少女なのよね？」

「そうだよ。名前は佐倉 杏子。でも、五年前に行方知れずになつてから会ったこともないけどね」

「一体どういう子だったの？」

「マミとは正反対の人物だ。魔法は自分のために使うものって言うてるしね」

「……………そう（でも、そんなに悪い子には見えなかったわね）」

杏子は夕暮れの街を一人リンゴを齧りながら散策していた。
アースラに居ても何もすることがなく、手持無沙汰なのでこうしてぶらぶらと時間を潰しているのだ。
ちなみに、アースラにはブリューナクが残っている。

「久しぶりだけど……………大して変わってねえな。ん？アイツは……………」

杏子が視界の端に止めたのはベンチに座って俯いている少女だった。
その少女は魔女との戦いの最中に杏子が入質に取った少女である。

「よお。」

「えっと・・・・・・・・誰ですか？」

「髪の色が変わってるからわかんねえか。高町 杏子だ。お前を人質に取った悪い魔法少女だよ」

杏子がそう名乗ると少女は驚いたような表情を浮かべた。

「座っていいか？」

「えっと・・・・・・・・あの・・・・・・・・どうぞ・・・・・・・・」

杏子は少女の横に座り込む。

「なあ。お前、どうしてあの場に居た？」

「えっと・・・・・・・・その・・・・・・・・色々あつて・・・・・・・・」

「ふゝん・・・・・・・・。正直、アタシはお前が魔法少女になろうがどうでもいい。」

「えっ？でも、グリーンフィードが必要なんじゃない・・・・・・・・」

「アタシはグリーンフィードを必要としないんだよ。魔女になる心配もない・・・・・・・・あつ」

杏子は自分の失言に気づいた。その失言を聞き逃すまどかではなかった。

「どういう・・・・・・・・こと？魔女になる心配がないって」

(あちゃゝ・・・・・・・・やっちまったぜ)

「・・・・・・・・魔法少女のソウルジェムが黒く濁った時、その魔法少女はどうなると思う？」

「わかんない」

「魔法少女が絶望する時、ソウルジェムは・・・・・・・・グリーンフィードへと変わる。つまりは魔女になる。これが魔法少女の末路だ。」

「そんな！！キュウベえはそんなことを一言も」

「あいつの話に耳を傾けるな。あいつは真実をいくつも隠してる。まあ、アタシの仕事はその魔女を救済することなんだけどな」

「魔女を・・・・・・・・救済？」

「ああ。希望を叶えて絶望して他の奴を呪うことしかできないなんて悲しすぎるだろ？あたし達にはそんな奴を救済する術があるんだから、助ける。それだけだ。」

「なんだか・・・・・・・・正義の味方みたい。」

まどかは笑った。

「そう言えば、あんたの名前を聞いてなかったな」

「鹿目 まどかだよ。」

「じゃあ、まどか。アタシの話したことは内緒にしてくれ。母親からあんまり話さないように言われてるんだ。」

「わかった。」

「じゃあな。またどこか会うことになるだろうかな」

杏子は立ち上がり、暗くなった通路の奥に消えていった。この杏子との会話がハッピーエンドへの足がかりになることは二人も予想していなかった。

第4話（後書き）

マミは助けにおきました。私は杏子派なのでどうでもよかったのですが……殺すとマミマミファンの方々から苦情が来そうなので。

第5話

第5話 「シャルロッテ」

SIDE KYOUKO

翌日、杏子は“魂魄転生”の被験者が眠る部屋で本を読んでいた。アースラにはなのはと杏子だけが残っている。ブリューナクは地上に降りて魔女を搜索していた。

もともと魔女には使い魔が成長した者と魔法少女が魔女になった者がいる。前者は魂の欠片しか所有していないので意味がない。

閑話休題

魂魄転生から一日。肉体は魂魄に刻まれた情報を元に再構成され、あとは記憶の定着のみ。

誰かが見ていないといけないのでアタシが此処に残ってる。母さんは魂魄転生の反動でまだ眠ってるが、そろそろ復帰するかな？

「ん・・・・・・・・」

「起きたか？」

やっと一人目が目を覚ました。髪はまどかと同じピンク色だが、瞳

はサファイアのようなだ。

「・・・・・・・・zzzz」

「寝るなよ!!」

「ジョーダンだよ。ところでおねえちゃんはだれ？」

「高町 杏子だ。お前の名前は？」

「シャルロツテ。元お菓子の魔女だよ」

こいつ・・・・・・・・魔女だった時の記憶があるのか？いや、魂が経験した記憶をそのまま肉体に転写するからある方が当然か？

「お前、魔女だった時の記憶が残ってるのか？」

「うん。おぼろげだけどね」

「普通、パニックにならないか？自分が狩られる側になったのに」

「うん・・・・・・・・何でだろ？」

シャルロツテの反応に杏子は盛大にずっこけた。

「それよりさ。おねえちゃんは魔女を救済してるんだよね？」

「ああ。」

どこで知ったのか知らないが、今は突っ込まないでおこう。

「じゃあ、私にも手伝わせてよ」

「……こいつが例外なだけか？そりゃ、最大級の魔女“ワルブルギスの夜”を救済するために誘うつもりだったけど、向こうから言い出すと思わなかったぞ？」

「む。何か失礼なことを考えてるでしょ？」

「ああ、考えてた」

「……普通、隠さないかな」

「それよりも服だな。」

アタシはシャルロッテに小さな球体を渡した。これも母さんが自分の能力で作ったものだ。

母さんは管理局の科学官も兼用してるから、本当に色々なものを作ってる。あ、ちゃんと上層部に許可は取ってるぜ？

「これを握りながら、自分が着ている衣服をイメージしろ」

「自分の服装か……。じゃあ、これでいいや」

球体から光の帯が伸び、シャルロッテの身体を包み込む。光の繭が弾けると見事な衣装を纏ったシャルロッテが居た。

首には赤い水玉模様のマフラーを巻き、少し丈の短いスカートと一体化した長袖の服（色はピンクと黒）。さらに黒いマントとキャスタと呼ばれる黒い帽子を着用している

「わお、イメージ通りの服だ」

「それって魔法少女時代の服か？」

「そうだよ」

まあ、アタシの騎士甲冑も魔法少女時代の物と同じだし人のこと言えないけどな。

「シャルロッテ、今のお前に魔法少女としての力はまったく残っていない。そこで、だ。お前に教えるのは魔法であり、魔法でないものだ。」

「？」

「まあ、習得していく間にこの意味がわかるさ。というわけでついて来い。」

「あいさ」

杏子がシャルロッテを連れてやってきたのは、アースラに設置された訓練スペース。

なのはたちが乗艦していた時よりも広くなっているのは、最先端の空間圧縮技術を使用しているためである。

「さてと……まずアタシたちが使う魔法から説明しないといけないな。アタシたちの身体には“リンカーコア”っていう魔力生成器官が備わっている。」

「ふむふむ」

「まあ、実際に見せてやるよ」

杏子は心を落ち着けて、リンカーコアを外に出す。杏子のリンカーコアは杏子の魔力光と同じ赤い光を放っていた。

「ほえ、綺麗です」

杏子はリンカーコアを戻す。

あんまりリンカーコアを外に出してるのは嫌なんだよな。

「アタシたちの魔法はこのリンカーコアが生み出す魔力を使用していろんな魔法を使う。たとえば……」

杏子は指先から魔力弾を放つ。

「こんなことかな。」

「ほえ」

『杏子、対象の魔女の反応を見つけました!!』

『わかった。すぐに行く。』

「悪いな。新しい魔女が見つかったらしいから、少し行ってくる。
その間暇だろうから……」

くプシュッ

その時、訓練スペースの扉が開き、アクセリオンが入って来た。

「アクセリオン、シャルロッテのことは任した!!」

「わかりました。貴女はブリューナクと合流しなさい。」

「ああ。」

アタシはシャルロッテのことはアクセリオンに任せた。アタシをここまで鍛えてくれた人だから、最適だろ。それよりも急いでブリューナクと合流しないと!!

杏子は地上に降りるためにアースラの転送ポートに向かった。

「まったく……こんないたいけな少女を集団暴行なんて酷くありませんか!!」

ブリューナクに群がる蝶の使い魔。その蝶の使い魔をブリューナクは氷の槍で撃ち抜いて行く。

ブリューナクの目と鼻の先にはこの結界の主「花壇」の魔女が静かに佇んでいる。姿は「薔薇園」の魔女に似ているが、花の部分が色鮮やかになっている。

「フリーズランサー!!」

ブリューナクの周囲に氷の槍が生成され、発射される。

「ブリューナク!!」

「遅いですよ、杏子!!」

「悪い。さつさと蹴りをつけるぞ!!」

アタシは魔女の結界に入る前に構築しておいた『エクスキューション・ソードバレル』を発動させる。

開放された魔力剣は魔女の使い魔を駆逐していく。

「絶望に飲まれし哀れな少女の魂よ、“魂魄封印”!!」

魂魄封入球に「花壇」の魔女の魂を封じる。透明だった魂魄封入球はシャルロッテの時と同じように桃色に染まる。

「そして、眠れ!!」

グーゲンニルを展開し、魔力を纏わせて「花壇」の魔女の抜け殻に向けて投擲する。

アタシが投擲したグーゲンニルは「花壇」の魔女の身体を突き破り、再びアタシの所に戻ってくる。

魔女の結界が解除され、「花壇」の魔女が居た場所にグリーンフィードが落ちる。魂は無いが、ソウルジェムやソウルアクセサリーの浄化機能は残ってるので回収しておく。

「これで二体目だな。」「はい。」

「じゃあ、戻るか。さすがに一日に二体の魔女はキツイからな」

魔法少女の力を使わずに魔女の結界を切り裂くのは結構な魔力を消費する。まだ結界をこじ開ける能力はあるが、強力な魔女だったら、相手できないな。

「そうですね。」

二人の足元にミッドチルダ式の転送魔法陣が出現し、二人が母艦アイスラに帰還しようとした矢先、異変が起こった。

まどかの魔力が消えた？魔女の結界に取り込まれたのか！！

アタシはまどかの魔力パターンを記録しておいた。グーゲンニルのセンサーは優秀だから、対象が結界内に取り込まれない限り途切れることはない。

「ブリューナク、先に戻ってきてくれ。少し用事ができた。魂魄封入球はお前が持つて帰ってくれ」

「わかりました。気を付けてください」

「わかってるって!!」

ブリューナクに魂魄封入球を渡したアタシはまどかの魔力反応が消えた場所に向かった。

飛行魔法を使ってその場に近づくにつれて、アタシのソウルアクセサリーが輝く。この反応からして大元のほうの魔女だな。まったく………ついてるのが、ついてないのか。

「魔力の無駄遣いはできないし、それにグリーフシードもある。久々に使うか!!」

久々に魔法少女の力を使って結界をこじ開ける。

魔女の結界に侵入すると青髪の魔法少女が魔女を討滅する寸前だった。

「絶望に飲み込まれし哀れな少女の魂をここに封じる。魂魄封印!!」

ふう………危なかったぜ。

アタシが魔女の魂を回収するのと青髪の魔法少女が魔女を討滅するのはほとんど同時……いや、若干だがアタシの方が早かった。

「はあ………今日は厄日かな?とっと戻って休むか」

「遅かったじゃない、転校生」

アースラに戻ろうとしたアタシにそんな声が届いた。

アタシは少し気になったので声がした場所（アタシが居る場所の下）

を覗いた。

そこに居たのはまたしても魔法少女。この町って異常に魔法少女密度が高くないか？

これで三人目。でも、一人は新米だな。

「さてと……此処に居ても仕方ないし帰るか。」

「少し待つてくれないかな？佐倉 杏子」

うわ……いやな奴に会っちゃった。

「何の用だよ？ウソツキキュウベえ」

「酷いねえ。僕がいつ嘘をついたって言うんだい？」

「魔女の正体って言えばわかるか？」

「……君も真実を知ったんだね。じゃあ、まどかに魔法少女の真実を教えたのも君かい？」

「まあ、そうなるな。」

「おかげで困ったものだよ。まどかには懷疑の目で見られるし。君のせいで僕の計画が台無しじゃないか。」

「ざまあねえな。それとだ」

杏子はキュウベえに向かって槍を投擲した。投擲された槍はキュウベえの身体を見事に貫いていた。

「アタシの名前は高町 杏子だ。佐倉 杏子はもうどこにもいない」
それだけ言い残すと杏子は夜の闇の中に消えていった。

第5話（後書き）

シャルロットの性格はマイペース。

第6話 青の魔法少女

第5話 「青の魔法少女」

SIDE KYOUKO

「花壇」の魔女が落としたグリーンシードでソウルアクセサリーの穢れを取り除く杏子。

「さてと、シャルロッテとアクセリオンの二人はどうしてるかな？」

アタシが居るのはアースラの訓練スペース前。「ハコ」の魔女の魂が封じ込められた魂魄封入球はブリューナクに渡してきた。

ドガンッ！！ドゴンッ！！

そんな音が訓練スペースの中から聞こえてくる。

「……………このまま帰りたいな。」

でも、そろそろアクセリオンと交代しないと夕食が……

高町家の食事を取り仕切っているのは、基本的にアクセリオンである。なのはや杏子が料理することもあるが、圧倒的にアクセリオンの方が回数が多い。

閑話休題

杏子は意を決して訓練スペースの扉を開けた。

「……………」

「待て〜」

訓練スペースの内部の状況を簡潔に説明しよう。等身大のロリ・ポップを高々と掲げながら、シャルロッテがアクセリオンを追い掛け回していた。

「ほらほら。一回も当たってませんよ？」

「む〜!!」

思いつきりロリ・ポップ型の鈍器を降り下ろすシャルロッテ。って、ちよつと待て!! 床が陥没してるぞ! ?

シャルロッテの一撃をアクセリオンは華麗に避け、ロリ・ポップ型の鈍器は訓練スペースの床に激突した。驚きなのは明らかに非力な少女がかなり硬い床を陥没させていることだ。

しかし、ロリ・ポップで戦う光景は何ともシュールな光景だ。

「おや？杏子、戻ってたのですか？」

「あ、ああ」

「隙あり〜!!」

シャルロッテ、伝説の英雄と共に戦場を駆け抜けたアクセリオンに隙なんてねえよ。

アクセリオンはシャルロッテの持つロリ・ポップ（多分、かなりの重さがあるはず）を人差し指一本で押し止めた。

いつも思うが、アクセリオンって元々デバイスだよな？規格外すぎるだろ。

「この程度で私に勝てると思わないでください」

アクセリオンはシャルロッテを合気道の要領で投げ飛ばした。シャルロッテはそのまま壁に激突。

「じゃあ、杏子。交代です。」

「あいよ。」

杏子とハイタッチを交わすとアクセリオンは訓練スペースから出ていった。

「シャルロッテ。大丈夫か？」

「きゅっくっく」

「アタシも少し休むか」

シャルロットはしばらく目を覚ましそうにないので杏子もその横に座り、暫しの眠りについた。

S I D E アクセリオン

いやはや……この次元世界にマスターに匹敵する才能を持つ者が居るとは。

ポテンシャルは人造魔導師の身体を利用している関係が元々高いですが、魔法の呑み込みが早い。

「身体強化魔法を数分でマスターするとは思わなかったですね。それともそっち方面に資質があったのかも知れませんね。どっちにしても将来有望ですね」

アクセリオンは誰も居ない廊下で1人呟いた。

「さて、今日の夕食は何にしましょうか？」

翌日、杏子は再び地上に降りていた。目的はもちろん昨日見つけた青の魔法少女の搜索だ。

「って、意気揚々と飛び出して来たものの何処を探せばいいんだ？」

ミスったな。あの青の魔法少女はまどかの知り合いみたいだし、何か聞けたかも知れないのに……
まあ、魔力反応で探すけど。

「グーグンニル、まどかの魔力反応何処にある？」

《すぐ近くに反応があります。誰かと一緒のようですが……》

凄い偶然だな。ん？あいつは……

杏子の視線の先にはファーストフード店から出てきた黒髪の少女が

居た。

「あいつ……灰色の魔法少女に似てるな。」

《あの魔法少女の魔力反応を探れば、はっきりすると思いますが？》

「別にいいよ。アタシの目的は青の魔法少女の方だ。」

その後すぐにファーストフード店からまどかが出てきた。でも、なんか落ち込んでるみたいだな。

「おい、まどか」

「え……あつ！杏子ちゃん」

「少し付き合ってくれ」

魔法少女の話を公然の場でするわけにもいかなかったので杏子はまどかを連れて近くを流れる川の土手に移動した。

「少しお前に聞きたいことがあったんだ。」

「うん、私も。杏子ちゃんに頼みたいことがあったの。」

「頼みごと？」

「うん。さやかちゃんと仲良くして欲しいの。」

「それがあの青の魔法少女の名前か？」

「うん。美樹 さやか。私の大切な友達なの。」

「うん．．．．．少し無理があるな。向こうはアタシに良い印象を持ってないだろう？」

「うん．．．．．」

まあ、初邂逅があんな感じじゃあ、仕方ねえか．．．．．

「アタシができるのは、せいぜいピンチになったら助けるぐらいだ。それよりも、アイツが願った事柄について心当たりはないか？」

「うん．．．．．“幼馴染の腕を治してあげて”だと思う。」

他人のためにたった一回切りのチャンスを使ったのかよ！！

だが、これではつきりした。あの魔法少女は自分よりも他人を優先するタイプだ。魔女退治に向かない典型的なタイプだな。この手の奴は魔女から独立した使い魔も退治しようとする。

「面倒な奴だな．．．．．。そういう奴は使い魔までも倒そうとする。使い魔の相手をするだけでもソウルジェムは濁る。これがどういうことかわかるな？」

「ソウルジェムの消耗が激しいから．．．．．魔女になりやすい？」

「その通りだ。」

そう言っても正義バカは納得しねえだろうな。いつそのこと魔女の正体を……いや、それに絶望して魔女になる可能性もある。一番穏便なのは、ソウルジェムをソウルアクセサリーに改変する式を撃ちこむことだな。

「聞きたいことも聞けたし、アタシはそろそろ帰るわ。その前に

『これを教えておくよ』

「えっ!？」

「これは思念通話。まあ、念話みたいなものだ。念話は使ったことがあるか？」

「う、うん」

「じゃあ、これを持って念話を使うようにして見る」

杏子はまどかに青色のビー玉のような物を渡した。それはただのビー玉ではなく、杏子がミッドチルダに転移してしまった頃に使っていた簡易デバイスである。

『う、こんな感じ?』

『そうだ。これはキュウベえにも気付かれないし、範囲も広い。何かあったら、アタシを呼びな』

『うん。ありがと、杏子ちゃん』

『いいつて』

それだけ言い残すと杏子はまどかと別れた。

さて、まどかと別れた杏子はさやかをストーキングしていた。

《マスター、本当にあの少女と事を構えるのですか？》

グーゲンニルが心配そうにアタシに聞いてくる。

「何だ？心配なのか？」

《違います！！私は貴女が悪役の真似事をするのが嫌なだけです！
！》

「いいんだよ。それで人を助けれるならな。」

《・・・・・・・・》

グーゲンニルは何も言わなかった。悪いな、相棒。でも、譲れねえんだよ。

・・・・・・・・結界の反応だな。不安定だから、間違いなく使い魔だ。

『ブリーナク、わざと使い魔を逃がすからお前が退治しておいてくれ』

『わかりました』

さてと・・・・・・・・せいぜい悪役になりきりますか！！

SIDE ANOTHER

杏子はグーゲンニルをフルドライブ状態で起動し、結界の中に侵入する。魔女の結界のように安定していないので容易く入り込める。子供ような落書きの使い魔に当たりそうになるサーベルをグーゲンニルで弾き、さやかの前に出る杏子。

「ちょっとちょっと。何やってるのさ？あれ、使い魔だよ？」

「お、お前はあの時の！！」

「さやか！！使い魔が逃げるよ！！」

キュウベえに言われ、使い魔を追いかけようとするさやか。杏子はそのさやかの首元にグリーンニルの矛先を突き付けた。

「何してるのさ？アレ、使い魔だよ？グリーンフィードを持ってるわけじゃないじゃん」

「でも、あれをほつといたら大勢の人が犠牲になるんだよ！？」

「だからだよ。2、3人食べさせてやりやあ、きちんとグリーンフィードを孕む。卵産む前の鶏を絞めて何が楽しいのさ」

それは杏子の以前の考え方。高町　なのはという人物と出会う前の利己的な杏子の持論。

もちろん杏子と同じ考え方の者も居れば、さやかと同じ考えの者も居るだろう。

「なっ！！魔女の犠牲になる人たちを見捨てろっていうの！？」

さやかの発言に対して杏子はわざとらしいため息を吐いた。

「アンタさ、根本的に勘違いしてない？弱い人間を魔女が食い、その魔女をアタシたちが食う。食物連鎖って奴さ。学校で習ったよね？」

杏子は言葉をいったん区切り、ニヤリと挑発的な笑みを浮かべた。

「まさかとは思っけど・・・人助けだの正義だのそんなおちゃらけた冗談かます為に契約したわけじゃないよねえ？」

「・・・・・・・・・・！」

くガキンッ！！！！

さやかはサーベルと杏子のグーグンニルがぶつかり合う。

「ちょっと・・・・・・・・何すんのさー！」

杏子はグーグンニルを一回転させてサーベルごとさやかの胸元を切った。

今回は杏子も非殺傷設定を解除している。「自分が悪役を演じて誰かが助かるなら、私は喜んで悪役を演じてやるよ」というかつてなのはに言った言葉の通り精いっぱい悪役を演じる杏子。だが、その心の中は少しばかりの罪悪感が積っている。

「少しは頭冷やせよ。トーシロが」

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・」

よろめきながらもさやかは二本足でしっかりと大地を踏みしめ、新しいサーベルを召喚する。

「脅威的な回復能力。なるほどな。癒しの願いか・・・・・・・・。。まったく一度限りのチャンスが無駄にするなんてどうかしてるぜ」

「だまれえっ！！！」

杏子はサーベルを腕（魔力を纏わせているので傷つかない）で弾き、さやかにカウンターを仕掛ける。

「言つて聞かせてもわからねー。殴つてもわからねーバカとなりや・
・・・あとは殺しちゃうしかないよね!!」

「ぐっ!!」

伸縮自在な鞭のような状態のグーグンニルを振るい、さやかの身体から鮮血が流れる。しかし、魔法少女の癒しの力がその力をすぐに治療する。

杏子がさやかを傷つけ、さやかの能力が傷をすぐに回復させる。そんなやり取りが繰り返す内に杏子も内心は少し焦っていた。

（くそっ!!アイツのソウルジェムにさっさと式を撃ちこまねえと!!そうしないと魔力を無駄に浪費させちまう!!）

癒しの願いを契約の糧とした魔法少女は魔力の消費が激しく、すぐにソウルジェムが黒く濁ってしまう。

杏子の予定ではさやかのソウルジェムに式を撃ちこんだ後、とびつきりの魔法を使って戦意を無くす予定だったのだ。

（一か八か!!）

杏子は自分の得物の間合いよりも内側に入った。そして、さやかの足を絡めて無理やり倒れさせる。杏子はさやかに馬乗りするような形になり、腹部にあるさやかのソウルジェムにこっそりと触れ、式を撃ちこんだ。

「終わりだあ!!」

杏子のはど元に槍を突き刺そうとする。その刹那、一発の銃声が響いた。

「美樹さんから離れなさい。」

その銃声は金髪縦ロールの魔法少女の威嚇発砲だったようだ。そして、その魔法少女の横にはまどかが少し戸惑いがちに立っていた。

第6話 青の魔法少女（後書き）

根っこは優しい杏子さん。杏子は魔女になる心配ないので心に余裕があります。そして、何よりなのはの影響が大きい。

第7話

第7話

「そこまでよ。」

そう言いながらアタシにマスケット銃の銃口を向けてくる金髪縦口
ール。

その横には戸惑いの表情を浮かべるまどか。

『杏子ちゃん!! どうしてこんなことを……………』

『悪いな。魔女化させないためには少し事を構える必要があったんだ。大丈夫、お前の友達を殺したりしねえよ。』

思念通話でまどかを安心させるように囁く杏子。

「私もあんまり敵対したくないの。ここは退いてくれないかしら？」

「先に斬りかかって来たのはコイツだぜ？それに初心者と二人がかりで思ってたのか？」

「なら、ベテランの魔法少女が2人がかりはなら、どうかしら？」

「ッ!!」

背後から声を掛けられて杏子はさやかから飛び退く。

杏子の背後にはいつの間にか「ハコ」の魔女の現場に居た灰色の魔法少女が静かに佇んで居た。

コイツ、いつの間にアタシの背後に回った？グーゲンニルにも気付かれないで近付くなんて不可能だ。

「わかったよ。さすがに3対1じゃ、分が悪いからな。」

アタシはひとまずその場から離れた。と言ってもビルの屋上に飛び上がったただけだけだな。

「お疲れ様でした。」

「おお。ブリューナク、使い魔は殺しておいたか？」

「はい。それにしても、あの灰色の魔法少女は一体どんな能力を持っているのでしょうか？」

「わかんねえ。」

「ザンクト・ヒルデ魔法学院主席でもわからないことがあるんですね。」

かなりムカつくが、ブリューナクの言う通りカラクリがまったく見

えない。

何せ、情報が少なすぎる。戦闘を見たこともないから、予想も立てられねえ。まあ、グーグンニルに気づかれずにアタシに接近したことを見ると瞬間移動系の能力だな。

「そうそう。なのはから連絡がありましたよ？“魔女の搜索は私が引き受けるから、今日1日ぐらいはゆっくり羽を伸ばしなさい”だって。」

「了解。お言葉に甘えさせて貰うわ。ブリューナクはどうする？」

「私も杏子に着いていきます。なのはから無茶しないよう見張っておくように言われますから。」

アタシよりも母さんの方の負担が大きいのと思うけどな。アクセリオンが止めないと何処までも突っ走って行きそうだし。

でも、母さんの親友が言うには昔よりもかなりマシになったらしい。昔はどれ程無茶をしてんだらうか？

SIDE NANOHA

「ここら辺一体には結界の反応がないね。」

わたくし、高町　なのはが居るのは見滝原市の市民病院。魔女が居る可能性が高い場所です。
何をしてるかと言うと魔女探しです。

「魔女の結界は魔導師の結界と違って隠密性が高いですからね。」

「だからといって、杏子にばかり任せるのも気が引けるからね。母親として少しぐらい手伝わないとね」

“魂魄転生” はかなりの魔力を消費するけど、動けないほどではない。
い。

ちなみに、アースラには新しく「ハコ」の魔女と「花壇」の魔女の転生者が眠ってる。2人連続の“魂魄転生” は流石に堪えたよ。

「後は人気の無い場所……。アクセリオン、この近くで一番人気の無い場所は？」

「病院から南西の方角に古びた教会があります。衰弱死という点から考えると最適だと思います。」

「じゃあ、その教会までの地図を出して。」

アクセリオンが、はい。と頷くと見滝原市周辺の地図が表示された空間投影ディスプレイが展開される。

表示された地図には赤いラインが走り、教会までの道を示していた。隣町か……それほど離れてるわけじゃないけど、歩いて行くには少し遠いね。

まあ、私たち“特務零課”は管理外世界での魔法使用は許可されるし……飛行魔法と認識阻害を使おうか。

「アクセリオン、少し飛ぶよ？」

「はい、マスター」

アクセリオンの姿が人間形態から本来の宝石の姿に戻る。それをなのは優しく掴み、天に掲げる。

「レイジングハート、セッーート・アップー！」

《Stand by ready・Set up》

なのはが着ていた衣服が量子変換され、代わりに魔力で編まれた強靱な衣服がなのはを包み込み。

なのはが着込んだバリジャケットは長年慣れ親しんだ青と白を基調にした物。

そして、手には魔導師の杖となったレイジングハート。

「レイジングハート、認識阻害魔法を展開。」

《Yes》

認識阻害魔法のおかげで私とレイジングハートの姿は見えない……
…はず。

うん、よっぽどの先天的才能持たない一般人には見えない。

「さあ、行くよ!!」

私は勢いよく大空に飛び上がった。

なのはがやって来た教会はもう何年も使われていないのか廃墟となっていた。

床や椅子には埃が被り、教会の象徴であるステンドグラスは割れて太陽に光がぎんぎんを入ってくる。

しかし、境内の後ろの掲げられた十字架は立派なままだった。

「……使われなくなって数年ほどだね。」

《はい。》

それにしても、この教会で何があったんだろ？ほのかにだけど、血の匂いが混じってる。

「レイジングハート、魔女の反応は？」

《魔力の歪みも感じられません。此处には居ないようです。》

「ハズレかあ」

私はため息を吐いた。いや、そんなに期待してわけじゃないけどね。

わざわざ隣町に来たのに対象が居ないなんて結構精神的にキツイよ？

「魔女が居ないんじゃ、仕方ないね。引き返そうか」

そう言っただけで私が踵を返そうとした瞬間、ゆらりと空間が歪んだような気がした。

でも、魔力はまったく感じなかった。やっぱり疲れてるのかな？

誰？そこに居るのは？

「！！」

念話でも思念通話でもない。一体、今の声は……………

《マスター！！前を見てください！！》

「??」

えっ？」

レイジングハートに言われて真正面を見る。何もないと思ってたのに私の目の前には半透明な少女が浮かんでいた。でも、なにより驚きなものが…………その少女が愛娘の杏子にそっくりだったことだ。

この教会に何の用ですか？この呪われた教会に

「君はこの教会の関係者なの？」

はい。

目の前の少女はコクリと頷いた。どうやらこの子は教会に住み着く

幽霊のようだ。その証拠に床より少し上に浮き上がっている。

「じゃあ、教えて。この教会って何があったの？」

「……………この教会には四人家族が暮らしていました。父親は新聞を見て毎日涙を流すような人でした。」

幽霊の少女は静かに語り始めてくれた。この教会で起こった悲惨な出来事を。

しかし、その父親は教義にないことまで説教し始めました。当然、本部から破門。一家は食べ物にも困る有り様になりました。だけど、ある日。その父親の説法を聞くためにたくさんの人が集まりました。

あれ？この話……………杏子の過去に似てる。

その四人家族には二人の女の子がいました。信者が一斉に増えたのはその姉妹の姉が関わっていました。なんとその姉は魔法の力で信者を集めたのです。

いや、似てるんじゃない！！杏子が私に話してくれた話とまったく同じだ！！

ここは杏子の家。それじゃあ、この子は……………

そのことを聞いた父親はその姉にこう言いました。“人を誑かす魔女め！！”と。その後、酒に溺れた父親は家族と一緒に心中しました。これがこの教会で起こった出来事です。

「ねえ、貴女の名前を教えてください？」

私の名前は響^{こづき}。フルネームは佐倉 響です。

「っ！！」

やっぱり……。この子は杏子の妹。でも、魂だけが何で此処に留まってるの？

「ねえ、佐倉 杏子っていう名前に聞き覚えはない？」

佐倉 杏子は私の姉です。でも、死んでしまつて……。此処には私しかいません。

「その姉が……。今でも生きてるって言ったらどうする？」

えっ？

杏子にそっくりな杏子の妹、響は驚いたような表情を浮かべた。

「佐倉 杏子は生きてるよ。高町 杏子と名前を変えて……………」

「

姉さんが……………生きてる……………？

そのことを聞いた響はぼろぼろと涙を流し始めた。（幽霊なのに？というツッコミは無しで）

よかった……。よかったよう

「杏子のこと……………怨んで無いの？」

怨むはずがないです。姉さんは家族を助けるために魔法を使
ったんですから

「杏子に会いたい？」

私が響にそう尋ねると私の予想は外れ、響は首を横に振った。

私は姉が生きてることが聞けて満足です。これ以上のことは
望みません。

それだけ言い残すと響は姿を消した。でも、気配はあるから成仏は
していないようだ。

“魂魄転生”を使えば、彼女を生き返らせることができるかも
しれない。でも、今日は無理だ。
二人の魔女を人間に戻したから、もう一度“魂魄転生”を行使する
ほどの魔力は残ってない。

「いったん戻るよ」

《杏子にこのことは伝えますか？》

「いや、事情を話して彼女が生き返りたいと望んだ時に杏子に言う
よ」

《マスターがそういうなら、私は口を出しません》

「ありがとう」

私は響が眠る教会をあとにして見滝原市に戻った。

S I D E 杏子

なのはから休みを言い渡された杏子はゲームセンターに立ち寄っていた。

杏子が遊んでいるのは国民的人気ゲーム“ダ ス・ダ ス・レボリ ユーション”。プレイしている曲は「コネ ト」である。

ちなみに、ブリーナクは人間形態で杏子が遊んでいるのをじっと観察している。

「まさかこっちにもこのゲームがあるなんてな。」

「ミッドチルダにはなのはやその友人の影響で地球の物が持ちこまれてるらしいですから。」

「母さんが言うつにはこの世界と母さんの故郷は似て非なる世界らしいな」

アタシは母さんの故郷、第97管理外世界に行ったことはない。この世界と母さんの故郷がどれくらい似てるのなんてわからない。

「カツ、カツ」

『ブリューナク。』

『はい』

ブリューナクは認識障害魔法を使って自分の姿が一般人に見えないようにする。

「よう。何の用だい？」

「単刀直入に言うわ。私と手を組んで」

気配でなんとなくわかったが、アタシの元に来たのは灰色の魔法少女こと曉美 ほむらだ。

名前はまどかから聞いた。

「へえ………どういう風の吹きまわしだい？魔法少女は基本的に群がらない。例外も居るけどな」

「二週間後、この街に“ワルプルギスの夜”が来る。私はそいつを倒したいだけ。」

“ワルプルギスの夜”。別名、「舞台装置」の魔女。そこらへんの魔女より数倍強力で最強の魔女であり、最凶の魔女。母さんの最強魔法のSLBか、アルカンシェルでも使わないと弱らすことすらできない存在。

当然、我らが特務零課の救済の対象だ。だが、この魔女の出現する時期は誰にも特定できない。」

「どうしてそれがわかる？」

「秘密よ。」

「まあいい。アタシにとってもアイツは面倒な相手だ。協力してやるよ。」

ちょうどプレイしていた曲が終了した。ミッドチルダでかなりやり込んだゲームなので点数は当然パーフェクト。

「食つかい？」

第7話（後書き）

杏子の妹を登場させました。女のぽい日本名が考えつかなかったんだ。

第8話

特務零課の本拠地にして伝説と謳われた次元航行艦アースラ。
そのアースラの食堂で“七人”がのんびりと食事を楽しんでいた。

「ふん……そのほむらっていう魔法少女と手を組むことにしたんだ」

「うん。その方が色々と情報が手に入りそうだし。ダメだったかな？」

「どちらにせよ、戦力は多いほうがいいからね。別に構わないよ」

ほむらと手を組んだのはいいが、手に入れられた情報はこの街に二週間後“ワルプルギスの夜”が来ることだけだ。アイツの能力については何もわからなかった。ただ、「瞬間移動に似たような物」というヒントを貰った。

「一体、何の能力なんだろうな」

「確証がありませんが……」

そう前置きする新しいメンバーの青いサファイアのような髪の少女。元「花壇」の魔女だった魔法少女で名前はゲルトルト・ブラウゼンブルク。容姿は艶のある青い髪と日本人特有の黒い瞳が特徴で赤ぶちの眼鏡を掛けている。黒い瞳は先祖返りだそうだ。

残念ながら契約した内容は教えてくれなかったが、十中八九花関係だろう。このゲルトルトもシャルロッテと同じように魔女救済に協力してくれるそうだ。

「私が魔法少女だった時に時間の進みを遅くしたり、速くしたりできる魔法少女と会ったことがあるので時間干渉系の能力じゃないでしょうか？」

「時間干渉ね……………」

「ほとんど確証がないことを話し合っても仕方ないよ。この話はこれで終わり。」

母さんの一言で曉美　ほむらに関する能力考察は保留となった。まあ、確定情報が少なすぎるし、仕方ないな。

「モグモグ……………はあ、もう一度こうしてご飯を食べることになるなんて思いませんでした」

大層嬉しそうに満悦の笑みを浮かべながら、アクセリオン特製の料理を胃の中に納めていくゲルトルト。

ちなみに、今宵の夕食は洋食である。

「杏子、夕食が終わったらまた訓練に付き合ってくださいね？」

「いいぜ。」

ゲルトルートは典型的な古代ベルカ式の使い手だ。つまり、遠距離での魔法を苦手とするタイプだ。アタシはかなり珍しい純粹魔力放出を得意とする古代ベルカの騎士。だから、砲撃とかも使える。ちなみに、シャルロッテの奴は魔力付与を得意とするミッドチルダ式の使い手だ。

おっと、閑話休題

「「ごちそうさま」」

アタシとゲルトルートはほとんど同時に食事を終えた。

「さあ、訓練室に行くよ!!」

ぐいぐいとアタシの腕を引っ張るゲルトルート。

「食後すぐは止めとこうぜ？激しい運動したら、吐いちゃう。」

「大丈夫!!最初は軽くやるから!」

アタシの反論をもろともせず、ゲルトルートは腕をひたすら引っ張る。業を煮やしたのか、アタシの服の襟口を掴んで強制連行。コイツ、アタシが命の恩人だってことを忘れてんのか？

杏子が連れてこられたのは第1訓練スペース。新アースラにはサイズは違うが、3つの訓練スペースが設けられている。サイズ（広さ）が大きい順に第1、第2、第3と付けられている。杏子とゲルトルートが使っているのは一番広い場所だ。

「さあ、殺るよー!!」

「字が違うからな!!そして、お前の場合冗談に聞こえねえ!!」

だって、ゲルト（愛称）の武器って大きな鋏だぜ？そんな武器を構えながら“殺るよー!!”って言われて笑って流せる奴が居たら、見てみたいわ!!

ゲルトルートが握っている鋏は理髪店で使うような鋏に青い装甲を付け加えたような物。ちなみに、全長はゲルトルートの身長より少し長い。

「本当にかるゝくだからな!」

「わかってますよ」

そう言ってるが、殺る気満々な気配がひしひしと伝わってくる。

「制限時間は5分。非殺傷設定で飛行は禁止。わかったな!？」

「えー!!何で時間制限なんて付けるのー!？」

予想通りゲルトルートが文句を垂れてきた。制限時間を設けないといつまでも戦い続けそうだからな。

アタシもそれほど暇じゃないんだ。夏休みの宿題も少し残ってるしな。

「文句言つなら、付き合つてやらないぞ？」

「すいませんすいません!!文句言いませんからー!!」

「それなら良し。」

そう言いながら杏子はグーグンニルを起動させた。いつもの槍形態ではなく、今回は刃渡り1m程のソードモードだ。

「ふっ!!」「はぁッ!!」

くガキンッ!!く

2人が同時に動き出し、ちょうど訓練スペースの中心で激突した。

「相変わらずの馬鹿力だな!!」

「う、うるさい!!わ、私だって気にしてるの!!」

ギリギリとつばぜり合いをしている状態で言い合う2人。

「ねえ、杏子。雷ってどういう原理で発生するか知ってる？」

「あん？大雑把に言えば、静電気だろ？」

いきなり何を言い出すんだ？

「そうだよね。つまり、摩擦さえできれば、雷を起こせるんだ。」

「それがどうした？」

「つまり……単なる風でも雷は起こせるって事！！」

ツー！そう言えば、コイツは風の魔力変換持ちだった！！

アタシはお得意の短距離瞬間移動で元の位置に戻った。

「空破斬！！」

って、ハッターかよ！？たく、コイツの攻撃は面倒なんだよ！！

杏子は再び短距離瞬間移動を使ってその場から離れた。それによって、ゲルトルトの風の刃は空振りに終わった。

「皇牙一閃！！」

くガキーンッ！！！！

「このアタシに向かってハッターとはな。」

「演算能力が足りないから無理なのよ!!」

「気が変わった。全力でぶっ飛ばす!!」

「上等だよ!!」

「あゝ……気持ち悪。」

結局、10分も訓練に付き合ってたし。食後すぐの訓練はキツイな。杏子は少しふらふらになりながら、とあるアースラの一室にやって来た。

「シャルロッテ、交代だ。」

「はい」

シャルロッテと入れ替わりに部屋の中に入る。いつもの見張りだ。

「今のうちに宿題を終わらせるか。」

宿題は紙媒体じゃないから、場所を選ばずにできる。ちなみに、宿題の内容は“ベルカ式とミッドチルダ式のハイブリッド型魔法に対する考察レポート”。

近代ベルカ式と似て非なる魔法体系でアタシが使っている魔法体系も古代ベルカ式主体のミッドチルダ式とのハイブリッドだ。

「結構便利なんだけどな。古代ベルカ式の弱点である遠距離も克服できるし。」

《マスターのように純粋な魔力放出を得意とする古代ベルカの騎士は居ませんからね。》

「でも、古代ベルカ最後の聖王オリヴィエⅡゼーゲブレヒトは得意だったらしいぞ?」

《へえ。それは初めて聞きました》

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

五分後

「うつ……ん……。あれ？私は……………」

「気分はどうだ？化け物から人間に戻った気分は？」

「最高」

ようやく目を覚ました元「ハコ」の魔女。容姿は漆黒の髪にブルーの瞳。顔立ちは顔立ちから見て日本人だ。当然、裸。

「とりあえず服だ。」

あらかじめ用意しておいた服を手渡す。シャルロットやゲルトに渡した奴でもよかったんだけど……。あれってあんまり数がないんだよな。

ちなみに、服のサイズはピッタリなはずだ。アクセリオンが調整してたから。

「着ました。」

「おう。さてと……。とりあえずお前の名前は？」

「実は……………覚えてないんです。」

「はっ？」

「多分、自分の名前に執着がなかったからだと思います」

こんなことは初めてだな。シャルロットもゲルトも自分の名前をちゃんと覚えてたし。

「まあ、それは置いといて。アタシたちはこの世界に居る魔女を可能な限り救済しようと思っっている。さらに、もう少ししたら“ワルブルギスの夜”がこの街に来る。」

「私に協力してほしい……ということですか？」

「そうだ。理解が速くて助かる。」

「……………ひとつだけ条件があります。私が魔女だった時に私が襲ってしまった少女に会わせてください。」

「その少女って……………ピンク色の髪の奴か？」

アタシがまどかの特徴を端的に述べると目の前の少女はコクリツと頷いた。

「理由を聞いてもいいか？」

「襲ってしまったことを謝りたいのです」

「……………ちょっと待っててくれ。」

『まどか、起きてるか？』

現在、地球に居るであろうまどかに思念通話を繋げる杏子。アースラは衛星軌道上に待機しているが、思念通話が届くような距離では

ないが、まどかに渡したデバイスは少し特殊なのでかなりの距離があっても思念通話を繋げることができる。

『杏子ちゃん？うん、起きてるけど』

『実はお前に会いたいつていう奴が居るんだ。明日の4時ぐらいに会えないか？場所は前の川の土手で』

『その時間帯なら大丈夫だよ。』

『わかった。悪いな、夜遅くに。』

『気にしないで』

「明日の4時に会えるように約束を取った。」

「ありがとう。」

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

翌日。杏子と名無しの少女は川の土手でまどかを待っていた。名無しの少女は緊張しているのか、しきりに周囲を見回している。

とにかく落ち着きがなく、そわそわしている。

「杏子ちゃん!!」

「っ!!」

まどかの声に反応して名無し娘はアタシの後ろに隠れる。おいおい。

「悪いね、急に呼び出して」

「ううん。それで私に会わせたい人って？」

「こいつだよ。」

アタシはアタシの陰から顔だけを覗かせている名無し娘を指さす。その手はアタシの服の裾をがっしりと握っている。正直止めて欲しい。しわになるから。

「この子は？」

「つい最近お前を襲った魔女が居ただろ？その魔女が人間に戻った姿だ。お前に言いたいことがあるんだとよ」

いつまでも恥ずかしがっているのかアタシの陰から出てこない名無し娘を無理矢理まどかの前に出す。

「えっと……あの……あ、あのときは……
・・襲ってしまつてごめんなさい!!」

「別にいいよ。誰にも怪我はなかったんだし」

「でも……………」

「うん……………。じゃあ、罰として私と友達になってくれな
い？」

「えっ？」

「私、鹿目 まどか。まどかって呼んで」

「えっと……………私は……………」

少し助けてやるか。

「まどか、こいつには名前が無いんだ。よかったら、こいつに名前
を付けてあげてくれないか？」

「ええっ！？そんなことを急に言われても……………」

とか言いつつ断らないのがまどかの良い所だな。

まどかは何度も名無しの少女を見つめて最適な名前を考える。
そして、まどかの頭の上で豆電球がピカーンと光った。

「じゃあ、“ユキカゼ雪風 コウヤ煌夜”ってどうかな？」

「名前の由来は？」

「肌が雪のように白いし、瞳はサファイアみたいだから」

「だよ。気に入ったか？」

「雪風 煌夜・・・・・・・・うん。気に入った!!」

「じゃあ、改めてよろしくね、煌夜ちゃん」

「うん、まどか」

名無しの少女改め、雪風 煌夜はまどかがっちりと握手した。

第8話（後書き）

グダグダですいません

第9話

SIDE NANOHA

「ハコ」の魔女が雪風 煌夜に転生してから2日。杏子たち特務零課は次々と魔女を救済（といっても転生したのは2人）し、勢力を着実に拡大していた。

特務零課も最初は杏子となのはを含めた4人しか居なかったのに、今や9人まで増えた。

さて、そんな特務零課の移動本拠地次元航行艦アースラの第1訓練スペースでは……

「煌めけ、星の輝き。マスタースパーク!!」

「アイスシールド!!」

転生少女たちによる2人1組チーム対抗デザート争奪模擬戦が執り行われていた。

チーム編成は雪風 煌夜とゲルトルート＝ブランデンブルグ、シヤルロッテとトリシューラ＝ブリザード。

トリシューラ＝ブリザードというのは元「破壊」の魔女。水色の髪の毛と瞳を持つ活発な少女だ。そして、“氷結”の魔力変換持ちである。

「もしかしたらワンサイドゲームになるかと思ったけど、そうでもなかったね。」

「ああ。トリシューラの経験不足をシャルロッテとのコンビネーションで補ってる。」

シャルロッテは魔力運用が上手。トリシューラは魔力量が豊富。同じ素体を使っても此処まで顕著に違いが出るのは予想外かな？

「ロッテ!!」

「おっけ」

おや？シャルロッテ・トリシューラペアが何か仕掛けるみたいだね。トリシューラは魔力で大きな氷……いや、氷山の一角って言った方がいいかな？とにかく、先っぽが尖った氷の塊を作って……

「S & amp; Tコンビネーション、“爆裂ヘイムダルショット”!!」

拳銃の弾丸のように撃鉄の代わりにロリ・ポップ型のハンマーを使って発射した。正直、質量兵器じゃないの？

なのはの素朴なツツコミを他所に巨大な氷の弾丸はゲルトルート・煌夜に向かっていく。

「絶対死ぬから――！もう魔法じゃないじゃん――！」

煌夜の反論にシャルロットとトリシューラの2人は……

「魔法を使ってるから魔法――！」

堂々と言い切った。ちなみに、氷の塊に非殺傷なんてないので物理的に死ぬ。

「ふうふう………」

あの大質量の氷を潰すのはかなりの至難技だよ？一体どうするのかな？

「烈風斬――！」

魔力で刀身を延長した大剣をゲルトルートが振るうとシャルロットとトリシューラのコンビネーション魔法「爆裂ヘイムダルショット」は真つ二つに切り裂かれた。それだけでは終わらず、トリシューラの身体を切り裂いた。

魔力で刀身を形作り、一番外側だけを風に変換したのかな？

「あれって、アタシが母さんのデイベインバスターを防いだ時と同じ要領だよな？」

「うん。ゲルトルートに砲撃の対処法を聞かれた時に教えたんだ。」

「イタタタ……………私のお気に入りのバリアジャケットがあゝ」

血が流れてるのは気にしないの？

トリシューラは切り裂かれたバリアジャケットを魔力を使って修復する。

「もう怒ったゝ！！」

ゝガツンッ！！ゝ

落ち着ける意味も込めて、ロリ・ポップ型のハンマーでトリシューラの頭を軽く殴るシャルロッテ。

「いったあゝ！！何するの！？敵はアッチ！？」

「突っ込んで行こうとした愚か者に制裁を加えたただだよ。」

ガミガミと漫オトークを始める2人だけど……………煌夜がさつきから呪文唱えるのに気づいてないのかな？

「アクセリオンさんのデザートは頂きます。“ナイトメア・バースト”！！」

「「あつ」

2人がようやく漫才を止めて気づいた時にはもう遅い。2人の周囲には闇色の球体がプカプカと十個ほど浮かんでいた。

あつ、試合終了だね。

「……………煌夜。此処は落ち着いて話し合いましょう。」

シャルロツテが懇願するが、煌夜は笑顔で……………

「ヤ・ダ」

闇色の魔力球体を一斉に爆発させた。爆発が納まると……………

「「きゅうううう」」

目をクルクル回してボタンキュー状態になったシャルロツテとトリシューラが倒れていた。

「試合終了。杏子、私は少し行くところがあるから後の事はお願ひしていいかな？」

「いいけど……………どうしたんだ？」

「ちょっと…ね。」

杏子をはぐらかして私は第1訓練スペースから出て、アースラの転送ポートに向かった。

「遅いですよ、マスター。」

「ごめんごめん。転送ポートはすぐに使える？」

「はい。転移先座標もすでに入力済みです。」

さすがは私の長年の相棒。良く私の事を理解してるね

「貴女の事を理解していないとまた無茶をしそうです。少しぐらい自分の身体をご自愛ください。」

「わかってる。もう二度と無茶はしないよ。さあ、行こうか？」

「はい。」

なのはとアクセリオンは転送ポートの中に入った。そして、魔法陣が起動し、2人は転移した。

私が転移した場所は、見滝原市の隣町にある教会。つまり、杏子が住んでいた場所。

此処に来た理由は杏子のたった1人の妹、響のため。多分“魂魄転生”を使えば、響を人間に転生させることができるはず。

「響、居る？」

教会の古びた扉を開け放つと苦しそうに胸を押さえてる佐倉 響が居た。

「響！？どうしたの！？」

私はすぐに響に駆け寄る。響は本当に苦しそうで可愛い表情も苦痛に歪んでいる。

わかり……ません。何が……私を……引っ張ってる……

魂が何かに引き寄せられてる？肉体が生きてれば、起こりうる現象だけ……

グウツー！

「響ー！！」

響の姿が壊れかけのテレビが映し出す映像のようにぶれている。こんな状態じゃあ、“魂魄封印”を使っても……

魔女を救済してきた“魂魄封印”は拡散する魂を一つに留める特殊魔法だが、何かに引き寄せられてる魂魄を留めることはできない。なぜなら、留める力よりも引き寄せる力の方が強いため、留めることが不可能なのだ。

はあ……はあ……そう言えば、貴女の名前を聞いて居ませんでしたね。

「高町　なのは。貴女の姉、佐倉　杏子の母親。」

私がそう言つと響は驚いた表情の後、ニツコリと無理矢理笑みを浮かべる。

貴女が……姉さんの母親なら、私の母さんでもあります……ね…

…

なのはが響の最後の言葉を聞き届けた瞬間、響は初めからそこに居なかったかのように消え失せた。

「……アクセリオン。どう思う？」

「杏子の話では響の身体は完全に死んでいたらしいです。考えられるとしたら……」

「クローン体……だね。」

でも、一般人である響のクローンをどうするの？杏子は幼い頃の私と同等の魔力を持つてる。でも、響にもその資質があるとは限らな

い。

「考えてても仕方ないね。今は魔女を救済することだけを考えよう。」

「はい。」

S I D E H I B I K I

ゴポ……

此処は何処？

目を覚ました私は何か液体の中に入れられていた。

多分、カプセルか何かの中だと思う。不思議……液体の中なのにきちん呼吸ができてる。でも、一番不思議なのが私が肉体を持つてること。私の肉体と魂は完全に分離したはずなのに……

ゴポ……

意識ははつきりしてるのに瞼が重い……薄らと開けることができるだけ

おぼろげでよく見えないけど、何か異質な場所に紫色の男性と女性
が何か話してるのが見えた。

ゴポ……

さて、君のオリジナルの記憶は邪魔なのでな。完全に削除させてもらうよ

私の記憶を……消す!?
いや……嫌だ!!

しかし、響の思いを踏み弄るように過去の記憶が消しゴムで消されるように削除されていく。

嫌だ!! 悲しいこともあったけど、それも私にとっては大事な思い出!!

忘れたくない!! お父さんのこともお母さんのことも姉さんのことも!!

そして、あの人・・・・・・・・..なのはさんのことも!!

だから・・・・・・・・..

だから・・・・・・・・..

響は強く強く願った。

アタシの頭を弄くるなああああ!!!!!!!!

くキイイイイイン!!!!!!

くパリーンッ!~

何かが弾けて割れるような音が頭の中で私の頭の中で響いた。
それまで私の体を襲っていた不快感が完全に消えうせた。でも、それと同時に私の意識は深い深い暗闇の底に落ちっていた。

「ほう……この私の記憶操作を対抗するとは……」

「いかがいたしますか？」

「？13には記憶操作は行わずに“アレ”を使おう」

「“アレ”ですか？しかし、アレの調整はまだまだ掛かります。最終決戦に間に合うかどうかですよ？」

「作戦は？1？12だけ十分だよ。そもそも？13はお遊びで作ったものだ。」

「その割には固有武装に時間を裂いてましたが？」

「フフフ……ちょっとしたお遊びだよ。魔力とのハイブリッドを使ったらどうなるのか実験したかっただけさ。では、私は“アレ”の調整に取り掛かるう」

「了解しました、ドクター。それと近々『聖王の器』が完成するそうです」

「フフフ……ようやくだ。ようやく最強の切り札が手に入る……」

ドクターと呼ばれた男性は狂気をはらんだ笑い声を上げた。

その男性の名は………広域次元犯罪者ジェル＝スカリエツ
ティ。

しかし、稀代の天才科学者でも予測していないことがあった。

それは「特務零課」の存在。

「特務零課」の存在が物語りをどのように導くのだろうか？

第9話（後書き）

響の敵対フラグが立ちました。響は機動六課側の杏子と戦うことになりました。

第10話

第10話 「ソウルジェムの秘密。魔女の真実。」

なのはが響の元に向かっている頃、アースラでは……第1回チーム対抗デザート争奪戦で勝利した煌夜・ゲルトルートペアは食堂でアクセリオン特製のデザートに舌鼓を打ち、負けたシャルロッテ・トリシューラペアは反省会を開いていた。

「お前ら、注意力が散漫し過ぎ。トリシューラはこっちの魔法に触れてまだ僅かだから、仕方ないけど……シャルロッテはダメだろ。」

「悪いのはトリシューラだよ。服を切られただけで突進しようとするんだもん」

「だからって頭を殴ることないだろ!!」

「ゴンッ!」

シャルロッテとトリシューラがまた言い合いを始めそうだったので、杏子の鉄拳制裁がお見舞いされた。

「お前ら、元魔法少女だろ? そんなんで良く死ななかったな。」

「逃げるのは得意だったのさ!」

胸を張ってそんなことを言うのはお前らだけだと思う。

「他の問題点は……トリシューラ、お前はミッドチルダ式だよな？」

「そだよ？」

トリシューラの戦闘スタイルは母さんと同じように遠距離から高威力の砲撃をバカスカ撃つタイプだ。

しかも、かなり特殊で直射型砲撃魔法を複数同時に撃つことができるらしい。

「なら、何で砲撃を使わずに突っ込んでんだ？」

「いや……まだ上手く使えなくて……」

「お前の場合は砲撃魔法の完全マスターだな。それが出来れば、チーム戦において大きなアドバンテージになるはずだ。」

「はい」

アタシも直射型砲撃魔法を使うけど、砲撃魔法は母さんが教えるのが一番いいよな？

「で。次はシャルロットなんだが……もう少し魔法のレパートリーを増やせないか？」

シャルロッテの問題点はとにかく所有している魔法の少なさだ。アタシが知る限り魔力付与と身体強化、飛行魔法しか使っていない。本人曰く「しつくりくる魔法がないのら」とのこと。だからって少なすぎるだろ!?

「うーん……考える」

「そうしてくれ。」

シャルロッテに適正があつたのは近代ベルカ式。最近、使い手が急増している比較的新しい魔法体系だ。魔力運用が上手だから、色んな術を使えるだろうしな。

「まあ、お前らも結構善戦したし……アタシがデザートを作ってるよ。」

杏子がそう言うのを聞くとシャルロッテとトリシューラは目を輝かせた。

「「いいの!?!」」

「あ、ああ。少し待っててくれ。」

2人にそう言い残すと杏子はアースラのキッチンに入ってしまった。

とは言ったものの……何かあるか?

杏子が適当に食材を物色すると……何も見付からなかった。

「果物類が何にもねえや。」

うーん……これだと時間の掛かるデザートしか作れねえな。いや、待てよ。

今度は棚を漁る杏子。すると、目的の物を発見した。

「やっぱり残ってたな。これなら、時間も掛からねえしちょうど良いや。」

杏子が見つけたのは市販のホットケーキミックスである。杏子は冷蔵庫から卵と牛乳を取り出すと調理を始めた。

数分後……

「ほら、デザートの手付けケーキだ。」

「「いったきまゝす」」

シャルロットとトリシューラは杏子製ホットケーキにかぶり付く。

『杏子ちゃん!! 助けて!!』

『まどか? 一体、どうしたんだよ?』

『さやかちゃんが……さやかちゃんが……』

『落ち着け!! お前ら、どこにいる!?!』

落ち着けるために少し怒鳴る。慌ててる奴には怒鳴り付けるのが一番だ。

『ま、魔女の結界の中………』

『少し待ってろ!! アタシが今すぐそっち行く!!』

アタシはプリューナクに断りを入れると転送ポートに急いだ。

魔女の結界の中で巴

マミと鹿目

まどかはナイフを持った

盗賊」の魔女と戦っていた。

マミの後ろにはまどかと倒れ込んだ美樹 さやかが居た。

「さやかちゃん、目を開けてよ……」

まどかは必死に懇願するが、さやかは全く反応を示さない。当然だろう。美樹 さやかは“死んでしまっている”のだから。

「クッ！一体、何があったというの！？」

さやかがこんな状態になったのは「盗賊」の魔女の使い魔にソウルジェムを奪われたからである。

戦況はマミが圧倒的に不利だ。ベテランの魔法少女である彼女でも、一般人を守りながら戦闘するのは無理がある。

「きゃあああああつ！……！」

「鹿目さん……！」

使い魔がまどかに向かってナイフを振り上げていた。マミが助けに向かおうにも使い魔によって遮られる。

ストライクスターズ……！！

紅の弾丸が次々と降り注ぎ、使い魔を撃ち抜く。

「カートリッジ・ロード……！」

ガシュンッ！！ガシュンッ！！という音を立てて二発のカートリッジがロードされる。

「竜月閃！！」

魔力を纏った槍がまどかを襲おうとした使い魔を殺す。

「おいおい。どういう状況だ？」

コイツは……大元の魔女じゃないな。使い魔か。

それで不意打ちにあって、さやか of ソウルジェムが使い魔に奪われた……て感じか。

「鋼の軛！！」

地面から生えた紅の刃が魔女の身体を貫き、拘束する。「盗賊」の魔女はその拘束から必死に抜け出そうともがくが、まったく意味をなさない。

古代ベルカの守護獣から教えて貰ったバインド魔法だ！！そう簡単に抜けられねえだろ！

「竜月閃！！」

使い魔を切り裂き、さやか of ソウルジェムを取り返す。後は、魔女だけだ！！

「大・竜月閃！！」

“鋼の軛”によって動けない魔女を真つ二つに切り裂く。魔女は杏

子の強力な一撃によって滅殺され、グリーンフィードを落として消滅した。

魔女は消滅し、結界が解除され、奇妙な空間から現実世界に戻る。

「まったく……」

ソウルジエムをさやかに戻す。すると、目に光が戻り、身体にも熱が戻る。

「あれ？魔女はどうなったの？」

「さやかちゃん！！」

まどかは泣きながら、さやかに抱き着く。そして、マミは杏子にマスケット銃の銃口を向けた。

「どういうことが説明してくれるわね？」

「わかってるよ。お前も着いてこいよ。」

アタシが建物の影に隠れてる奴に声を掛けると暁美　ほむらが出てきた。

「オモイカモネ、転移人数は5人。それと母さんにすぐ戻るように言っておいてくれ。」

アタシがアースラの管制AIオモイカモネに呼び掛けると転送ポイントが開かれ、アタシたちはアースラに転移した。

「えっ、此処は？」

真っ先にまどかが疑問の声を上げた。まあ、近未来的な風景にいきなり変わったら、驚くわな。

「此処は次元航行艦アースラ。」

「……次元航行艦？」

「詳しいことは纏めて話してやるよ。とりあえず、着いてこい。」

取り敢えず、4人は食堂に連れてきた。シャルロットたちには少し席を外して貰っている。

「さてと……何から説明して欲しい？」

「貴女が使った不思議な力について。」

「アタシが使ってるのはお前らが使ってる魔法とは異なる魔法だ。この世界には次元の壁によって隔たれた無数の世界がある。アタシたちはそれを“次元世界”って呼んでる。

次元世界の中には科学技術が発達した世界や医学が発達した世界とか色んな世界がある。

その世界の中には魔法が発達した世界が当然存在する。」

「あんたが使う魔法と私たちが使う魔法ってどう違いあるっての。」

「それはアタシにも上手く説明できねえ。まあ、エネルギー源が違うとだけ理解してくれ。」

一応、管理局じゃ円環式魔法って呼ばれてるけど魔力の性質自体が違うからな。

根本的に違うんだよね。」

「お前らが知りたがっているソウルジェムの正体だが……ソウルジェムを日本語に訳すとどうなる？」

「“ソウル”で魂、“ジェム”で宝石だから、“ソウルジェム”は魂の宝石ね。えっ、まさか……」

コイツは気付いたようだな。

「お前の予想通りだ。ソウルジェムの正体は魔法少女の魂そのものだ。」

「「「！」「」」」

今の反応を見る限り暁美　ほむらの奴は知ってたみたいだな。

「そして、希望が絶望に変わる時。ソウルジェムは黒く染まり……
…希望を叶えた少女は絶望を振り撒く少女に変わる。」

「……！」

まどかは知っているので驚かない。

「そんな……ソウルジェムが魔女を生むなら、私たち死ぬしかない
じゃない……！」

マミは自分の手で自分のソウルジェムを砕こうとする。さやかやま
どかがマミを止めに入る前に紅色の鎖がマミの四肢を縛り付け、拘
束する。

「まったく……これだから正義バカは困るんだ。」

バインドをあらかじめ準備してなかったら、危うく死んじまう所だ
ぜ。

「落ち着け。アタシがお前らに接触したのはそれを防ぐ方法がある
からだ。」

「……！！……」

これにはいつも無表情な暁美　ほむらも驚いたのか目を見開いて
いた。

その時、食堂の扉が開き、栗色の美しい女性が食堂に入ってきた。

「どうしたの？杏子。急に呼び出して」

「あ、母さん。」

「」「」「母さん！？」」「」

「杏子、駄目だよ？部外者を勝手に連れてきたら。」

「母さん、コイツらはインキュベーターの契約者だ。」

「ふん……」

母さんの姿が一瞬消えると母さんはいつの間にかまどかたちの背後に回っていた。

母さんが使ったのは、アタシが使うSランクスキル《短距離瞬間移動》ではなく、単なる高速移動魔法。古代ベルカ式を習得すると同時に強化したらしい。

「ほいほいほいと。」

ほむら、マミ、さやかのソウルジェムに順に触れるのは。

すると、三人のソウルジェムは杏子のソウルジェムと同じようにソウルアクセサリーに変貌した。

「これで貴女たちは魔女になる心配はないよ。代わりにソウルアクセサリーの濁りが疲労として現れるから注意してね？」

それだけを言い残すとなのはは食堂からそそくさと出ていった。

「さてと……これでお前らは魔女になる心配がなくなった。」

「聞いてもいい？あんだ、どうしてそこまで世話を妬いてくれるの？」

「別に。アタシの仕事を増やされるのが嫌なだけだよ。」

杏子も素直じゃないね。単に、助けたかったって言えば良いのに…

……

食堂の扉にもたれながら、なのはは杏子に対して心の中で呟いた。

「私が悪役になることで誰が助かるなら、私は喜んで悪役になるか。自己犠牲的なやり方は私にそっくりだね。」

「そうですね。おかげ見守る側はいつもヒヤヒヤさせられますよ。」

コツコツと靴音を鳴らしながらなのはの前に現れたのはアクセリオ

ンだった。

「アクセリオン……貴女、転生少女を看護してすんじゃないの？」

「信仰」の魔女という魔女から転生した少女は二日間も眠っている。他の転生少女が1日で目を覚ましているにも関わらず……

「信仰」の魔女は今までの魔女とは並外れた強さを持っていた。それこそ、杏子と私がほんのすこし本気を出さないといけないくらい。あれでも結界の中に隠れてるし、“ワルプルギスの夜”を相手にするなら、杏子も私も“アレ”を使わざるを得ないね。

おっと、話が逸れた。

「いえ、その少女がついさっき目を覚まして、マスターに会ってみたいと申しまして……」

「この人が貴女の主ですか？」

アクセリオンの後ろから現れたのは美しい銀色の長く伸びた髪の毛が特徴的な14歳ぐらいの少女だった。

「初めまして、私の命の恩人。わたくしは……ジャンヌ。ただのジャンヌ＝ダルクです。」

「へっ？」

なのはは驚きの余り目が点になった。アクセリオンも「普通はそう驚きますよね」と苦笑いを浮かべていた。

“ジャンヌ＝ダルク”？百年戦争でフランスのオルレアン解放に尽力した聖女の……ジャンヌ＝ダルク？

「ええええええええっ！！」

なのはの驚きの声がアースラの中に木霊した。

第10話（後書き）

ようやくまどマギ編も佳境に入ってきました！！

第11話

第11話

SIDE KYOUKO

まだかたちにソウルジェムと魔女の真実を打ち明けてから数日後。
杏子はトリシューラを連れて見滝原市に降りていた。
目的は当然の如く、魔女の搜索である。時折、杏子のソウルアクセサリーが強い反応を示すが、すぐに消えてしまう。

随分と隠密性の強い魔女だな。ソウルアクセサリーの反応範囲に入ってもすぐに逃げ出す。
こりゃあ、面倒な相手になりそうだ。

「キョウコ。お腹空きました」

「さっきたい焼きを奢ってやっただろうが。」

「あんなんじゃないよ、そんなに持たないよ。」

「仕方ねえ。ほらよ。」

アタシはトリシューラに向かって露店で買った新鮮そうなリンゴを投げ渡した。

そして、リンゴを受け取った瞬間、トリシューラはリンゴにかぶり付いた。

「？」

そんな時、アタシらの目の前をピンク色の髪の毛の少女が通り過ぎた。

「あれは………まどかか？」

「あの少女がインキュベーターに付け回されてる少女？」

「ああ。そういう理由なのかはアタシにもわからねえがな。」

アイツ、こんな時間に何処に行こうとしてるんだ？

現在の時間は21時の少し前。中学生ぐらいの少女が出歩くべき時間じゃない。

追い掛けるか。アイツはものすごいトラブル体质だからな。また厄介事に巻き込まれそうだしな。

「トリシューラ。少し付き合ってくれねえか？」

「いいよ。」

杏子とトリシューラはまどかを追い掛けるために駆け出した。

SIDE SAYAKA

「今日も魔女退治について行っていい？」

「……………まどか」

魔女退治に出掛けようとしたあたしを待っていたのはまどかだった。

「さやかちゃんに一人ぼっちになって欲しくなくて。だから……………」

何で……………何で……………あんたはそんなに優しいのかな……………？こんな……………何の価値もないあたしに……………。

さやかはまどかにいきなり抱き着いた。突然のさやかの行動に驚くまどか。

「……………今日ね、仁美を助けたことを後悔しそうになったの。正義の味方を目指してたのに……………」

言葉が止まらない。まどかに話しても何も変わらないって頭では理解してるのに……………言葉が止まらない。

まどかはそんなさやかを優しく抱き締める。

「仁美に……恭介取られちゃうよ……。でもあたし……なんにもできない。だって、もう死んでるだもん。ゾンビだもん……こんな身体で抱き締めてなんて言えない。キスしてなんて言えない……」

「だったら、そんな考えなんて捨てちまいな。」

その時、あたしに魔法少女の真実を教えてくれた……不器用で優しい紅の魔法少女の声が聞こえた。

SIDE KYOUKO

アタシはまどかとさやかの会話を建物の影から盗み聞きしていた。話の内容からすると、アイツの恋人が仁美って奴に取られそうになってるみたいだな。だけど、アイツはある考えに縛られてる。

「だったら、そんな考えなんて捨てちまいな。」

「杏子ちゃん……」

「魔法少女が恋心を抱いたら駄目か？」

魔法少女が愛情を受け取ったら駄目か？

その身体が死んでるからって、誰かを愛したら駄目か？

恋心を抱いて、泣いて………そんな感情を持つてる奴が死んでる
筈ないだろ！！」

杏子はさやかを思いっきり怒鳴り付ける。杏子が言ったセリフはかつて杏子がなのはに言われたセリフと酷似している。

「自分の心に素直になれよ。それとも、お前の恋心は偽物なのか？
それとも、お前が愛した男は相手がゾンビだからって嫌うような奴
なのか？」

「ッ！！そんなこと、あるわけない！！」

さやかの反論を聞いた杏子は満足したような笑みを浮かべた。

「じゃあ、後悔するような選択はすんな。」

「うん！！ありがと！！」

さやかは何か吹っ切れたように何処かに行ってしまった。まあ、大

体予想できるけどな。

「たく…………ぐだらねえことで悩んでんじゃねえよ。」

「杏子ちゃん、ありがとね。」

「気にすんな。」

さやかが戻って来たのは、大体30分だった。随分と清々した表情してやがるぜ。

「どうだったの?」

「えへへ まだわかんない。一晩考えさせてくれって。」

「そっか」

「おい、お前ら。置いてくぞ?」

「待ってよ、杏子ちゃん。」

「そつだよ、杏子。」

まったく……アタシも丸くなったものだな。

「そう言えば、杏子。あんたは何を願って魔法少女になったの?」

「……アタシの父親は隣町の教会の神父だったんだ」

何で……アタシはこんな奴らにこんな話をしようとしてるんだろ? 母さん以外に話そうと思ったことなんてなかったのに……

「毎日、新聞を読んで涙を流す変な人だった。しまいには、教典にないことまで説教し始めた。」

当然、本部から破門。アタシの一家は食うものにも困る有り様だった。

親子は間違ったことなんて言っていない。そう思ってたアタシの前にキュウベえが現れた。」

「何て……願ったの?」

「皆が親父の話をちゃんと聞いてくれますように。それがアタシの願いだった。」

“誰かと似てるだろ？”と言いながら、杏子はさやかを見た。さやかは杏子の視線を感じてポリポリと頬を掻く。

さやかと杏子は本質がとってもよく似ている。杏子は自分が悪役になることで他人を助ける、さやかは自分を犠牲に誰かを助ける。

どちらも本質は自己犠牲。つまり、かつてのなのはのような人格だ。最も某錬鉄の英雄のように自分の命<他人の命という考えはない。

「それともう1つ聞きたいんだけど……………」

「ん？」

さつきから出たり消えたりしてた魔女の反応が移動しなくなった。誘ってるのか？それとも、諦めたのか？

「キュウベえにあんたは五年前に行方不明になったって聞いたんだけど……………あんた程の魔法少女がどうして急に居なくなったの？」

「……………五年前、アタシは「旅」の魔女との戦闘に辛うじて勝利した。だけど、「旅」の魔女がグリーンフィールドに施した悪あがきのせいでアタシは次元の壁を越えた。」

杏子は満月が照らす月下の満天の星空を見上げながら、振り返るように語った。

「次元の壁を越えた先で…………アタシは母さんに会ったんだ。」

「えっ。じゃあ、あんたと前に会った綺麗な人って……………」

「義理の親子だ。けど……あの人はアタシを本当の娘のように扱ってくれた。だから、アタシもあの人が本当の母さんだと思ってる。」

杏子の話を聞いていたさやかとまどかは同時に同じようなことを思った。

（（杏子ってマザコン？））

「それよりも魔女だ。反応からして、結構な強さだ。」

「「ッ!!」」

3人は雰囲気を百八十度反転させて、戦闘モードに移行する。
杏子はグーグンニルを起動し、さやかは魔法少女姿に変わった。

「行くぞ!!」

「「おう!!」」

アタシが魔女の結界を切り開き、まどかとさやかがアタシに続く形で魔女の結界内に侵入した。

今回の魔女の結界は白と黒だけの世界だった。いや、真っ白な空間に鉛筆で輪郭を書いたような空間と言った方が正しいかも知れない。

「そして、あれがこの魔女の結界の主みたいだな。」

黒い線で描かれた崖の先で祈る神に祈るような少女の姿を型どった「影」の魔女がじつと佇んでいた。

いつも群がつてる使い魔が居ねえ。使い魔を必要としないくらい強い魔女なのか？

「先手必勝！！」

「あつ、こら！！」

さやかは奴は何も考えずに「影」の魔女に突進していきやがった。少しぐらいは警戒しろ！！

そして、さやかのサーベルが「影」の魔女に届きそうになった時、魔女の影がさやかを飲み込もうとした。

「ちっ、世話の妬ける奴だな！！」

アタシは短距離瞬間移動を使ってさやかを攫う。

「この馬鹿！！ちっとは相手の出方を伺ったりしろ！！」

「う、ごめん」

空中に飛んだアタシらに向かって影の刃が一斉に飛んできやがった。残念だけどな、アタシにはこれがあるんだよ！！

杏子はブーツに紅色の翼を顕現させて、空を文字通り駆けた。

これは杏子が空中でも地上戦と同じように戦闘できるようにするた

めに編み出した魔法だ。
魔力運用が上手い人なら、簡単にできるので使い手もそれなりに居る。

「これがアタシらの魔法だ。魔法少女の奴も使い勝手がいいんだ」

「ちょっと！！落ちないの、コレ！！」

「アタシが魔法を解除しない限り落ちねえよ。竜月閃！！」

迫って来た影の刃をグーグンニルで消し飛ばす。

「おら、逝って来い！！」

「字が違っただろ！！」

アタシは魔女に向けてさやかを放り投げた。さやかは叫びながらもサーベルで影の刃を切り裂いて行く。

さすがにアイツだけに任しとくわけにもいかないから、グーグンニルを投擲する。

グーグンニルは地面に「影」の魔女を縛り付けてくれる。

「さやかあ！！しばらくそいつを抑えててくれ！！」

「わかった！！」

さやかに魔女を任せて、アタシは“魂魄封入球”を取り出して準備を整える。

“魂魄封印”を使うには相手が弱っているときか、動きが30秒以上止まっている時にしか使えねえ。

製作者……つまり、母さん曰く「失敗すると、その魔女は魂だけが漂う状態になる」らしい。
それは置いとして……

「絶望に吞まれた哀れな少女の魂を此処に封じる。 “ 魂魄封印 ” ！」

杏子の持っていた魂魄封入球が「影」の魔女の魂を捕獲する。

「止めだ！！」

杏子は急降下してグーグンニルを掴むと魔力を思いっきり流し込んだ。

グーグンニルの矛先から放出された魔力が魔女の身体を食い破って解放された。

くコッン………

魔女が居た場所にはグリーフシードだけが残され、「影」の魔女は消滅した。

結界の主が消滅したことによって、結界は崩れ落ち、さやかたちは現実世界に戻っていた。

第11話（後書き）

上条×さやか、ヤッホーい
ンです。

—— 少しハイテンショ

次回にまたお会いしましょう。

第12話

第12話

「使い魔が居ねえから、どんなに強い魔女かと警戒してたんだが、そんなに強くなかったな。」

「杏子、手に持つてる球体って何なの？」

「魔女の魂。」

「えっ？」

「魔法少女が魔女になっても魂はこの世に残り続ける。肉体は消滅してるこの方が多いけどな。」

「肉体の無い魂を集めてどうすんのよ？」

「新しい身体に転生させるんだよ。アイツみたいに……」

そう言いながら、アタシは一言も会話に加わず、空気に溶け込んでいたトリシューラの方を見た。

そして、トリシューラを見たアタシは固まった。なぜなら、トリシューラの奴がアタシが買ったリングを何個も食べてたからだ。

「てんめえええ!!」

「ふべらっ!!」

杏子の飛び蹴りがトリシューラにヒットした。

「てめえ、人のリンゴを勝手に食ってんじゃねえ!!」

「だって、お腹空いたんだもん!!」

「………… オモイカモネ、強制転送」

衛星軌道上に待機しているオモイカモネに命令したトリシューラをアースラに強制送還させる杏子。

「まったく…………」

「杏子、今の子って元々魔女だったの？」

「ああ。元々は“破壊”の魔女で今はトリシューラ＝ブリザードっていう人間だ。アタシはそろそろ帰るよ。」

「うん。ありがとね、杏子。」

「良い返事が貰えるといいな。」

アタシはそれだけを言い残すとオモイカモネにお願いしてアースラに転送して貰った。

「次の日」

杏子はさやかやまどか、マミやほむらが通う学校 私立見滝原中学校の敷地内に居た。敷地内の一際大きな樹木の太い枝の上に腰掛け、双眼鏡片手に昼食のサンドイッチを食べている。

《マスター、サーチャーをばら蒔いた方が楽だと思いますが？》

「あむ。馬鹿だな、グーグンニル。一般人なら、まだしもさやかは魔法少女だ。サーチャーに感付くかも知れないだろ。」

《こちら側の魔法を知らないのに………ですか？》

「ああ。」

杏子は再びサンドイッチを一口かじる。

魔法少女は何故か先天的に才能豊かな奴ばかりだ。トリシューラやシャルロット然り、元魔法少女はそんなのばかりだ。

だから、同じ魔法少女のさやかやほむら、キュウベえに付け回されてるまどかも先天的に高い魔導資質を持つてるかも知れない。

「つつか、さやかの奴出てこないな。」

アタシが此所に居るのは当然、さやかの行く末を見守るためだ。さてさて……………どうなることやら。

《朝の段階で返答を聞いたのでは？》

「それにしても昼休みに近づくにつれてそわそわしてたから、それはねえよ。大体、人の多い通学路でそんな大事なことを言う筈がねえだろ。」

くガチャ……………く

おっ、さやかが出てきた。かなり挙動不審だな。しきりに髪を弄り、周りをキョロキョロを見回したり……………
おや？あれは……………ほむらじゃねえか。何やってんだ？

杏子とはちょうど反対側にある塔から、誰か見ていることに気付いた杏子は覗いている双眼鏡の倍率を上げて、その存在を視認した。

『おいおい。そんな所で何やってんだよ？』

ソウルアクセサリーを耳に当てて、ほむらに念話で話し掛ける杏子。

『教室の窓から貴女の姿が見えたから、此所に居るだけよ。一体、何しに来たの?』

『とある魔法少女の恋の行方を見守りに来ただけだよ。』

『そう。魔女狩りの方はいいの?』

『母さんに任せてある。』

くガチャく

再び屋上の扉が開く音が聞こえた瞬間、杏子は視線を屋上に戻した。

ようやくかよ……。待ちくたびれたぜ。あつ。でも、会話が聞こえねや。

盗聴器でも仕掛けておくんだっとな。

「よいしょ。よいしょ。」

「よう。」

「あつ、杏子ちゃん。こんな所で何してるの?」

「覗き。」

「駄目だよ。人のプライバシーを侵害したら」

「じゃあ、首に掛かつてるそれは何だ？」

杏子がニヤニヤと笑いながら、まどかの首に掛かつてる双眼鏡を指差した。

どうやら、まどかも同じ目的で杏子の隣に座り、杏子と同じように双眼鏡を覗き込んだ。

うわー……お互いに顔を真っ赤にしてやがる。このままじゃあ、昼休み終わっちまうぞ？
あつ、さやか奴が口を開いた。くそー！！やっぱり盗聴器を仕掛けとくべきだったぜ！！

杏子は今更ながら屋上に盗聴器を仕掛けなかったのを後悔した。母親の親友の1人である狸の悪影響なのは言うまでもない。

「へっくしー!!」

「はやてちゃん、風邪ですか？」

「うーん……誰が噂したんやろか？」

機動六課はととてもとても平和だった。

「うーん……杏子ちゃん。2人に気付かれずに会話が聞き取れる道具とかないの？」

「アタシはドラえもんじゃねえから、持ってねえよ。つか、プライバシーの侵害はどうした」

「それはそれ。これはこれ。」

「……………まどかつて、こんな小悪魔ほい奴だったけ？アタシの記憶では、とてもピュアな女の子だった気がするんだが……………」

「単純に2人の行く末が私も気になるだけだよ」

「本音は？」

「いつもさやかちゃんにからかわられてるから、これをネタにさやかちゃんをからかおうと……………」

「……………」

「あつ、向こうの方も進展があつたみたい！！」

「なに！？」

まどかに言われて、慌てて双眼鏡を覗き込む杏子。見るとさやかと上条 恭介（さやかが好きしてる男子の名前）が抱き合っていた。さやかの方は何故か涙を流しているが、断られたようではない。

さやかの奴……………自分がゾンビに近い存在だって事を話したのか？

そして、泣き止んださやかの顔と恭介の顔がゆっくりと近付いて行

き……… 2人の唇が重なった。

「「おお〜!!」」

「ガシッ!〜」

盛り上がって来た2人の肩を誰かが掴んだ。

「2人とも、何をしてるのかな〜?」

2人の肩を掴んだのは杏子の母親である高町　なのはだった。しかし、顔は笑っているが、目はまったく笑っていない。こういう時は必ずお説教が待っているのだ。

「他人の幸福を盗み見るのは、お母さんは感心しないな〜。だから、少しお話しようか?」

なのはに捕まった者は逃げ出せない。お昼休みの予鈴が鳴り響くまでなのはのお説教は続いた。

「なんで私まで〜」

「えへへ」

夕食後、自分の部屋に戻ったさやかはたいそうご機嫌で幸せボルテージが超過している。

ベッドの上でニヤケながら、枕を抱き締めるさやか。軟らかい枕はさやかに締め付けられて細くなる。このまま枕を絞殺するような勢いだ。

恭介が……あたしと……あたしと……きゃあああああ

心の中で嬌声をあげるさやか。周りに人が居たら、急にごろごろと転がり出したのでかなり奇妙な光景だろう。しかし、そこはさやかの部屋なので誰も居ない。

「あまつさえ、き、キスまで……………」

ボンツ！！という音を立ててさやかの表情が茹でたタコのように紅くなり、そのまま横に倒れる。

本当に……夢みたい　そりゃあ、恭介のことを信じてたから、魔法少女のことを話したけど……返って来た返答には思わず泣いちゃったよ。でも、恭介の腕が治ったのがあたしの願いだということは話していない。同情で付き合うことになっても嫌だからね。

屋上でさやかは恭介に自分が魔法少女であることを話した。自分の身体がゾンビに近い物であることも話した。ソレに対する恭介の返答は「それでも、さやかはさやかだよ。」というものだった。

「やあ」

「・・・・・・・・・・」

さやかのテンションがぎゅぐゅと急降下した。当然の如く、その原因はさやかの前に現れたキュウベえである。さやかたちがソウルジエムの真実・魔女の真実を知ったときより姿を現すことはなかったが、さやかの前にこうして再び姿を現した。

「今更私に何のよう?」

「幸せそうな君に絶望を与えにきたよ。あと数日でこの街にワルプルギスの夜が来る」

「何よ、それ」

「魔女の天敵である超弩級の大形魔女さ。たくさん魔女が束になっても敵わなかった最強の魔女さ。この魔女が来たら、君の恋人も十中八九死ぬだろうね」

あいもかわらず抑揚のない無感情な声で話しかけるキュウベえ。そんなキュウベえにさやかはサーベルを突きつけた。

「そんなこと……絶対にあたしがさせない。恭介もこの町の人もある」

たしを守る」

「それは無理だ。言っただろ？ たくさんの魔女が束になっても敵わなかったって。いくら杏子でも勝てないだろう」

「なら、そんな運命をあたしたちが変えてやる。まどかは契約させない。」

「なら、僕らも見せてもらおうとするよ。君たち人類が何処まで足掻けるのか」

そっぴい残してキュウベえは暗闇の中に姿を消した。

本当に……自分たちのことしか考えてないんだね。

ワルプルギスの夜襲来まで 後三日。

第12話（後書き）

やっぱ、上条とさやかはくつつけるべき。という結論に至った結果。短くてすいません。というか、文章量が安定しなくてすいません。

第13話

S I D E K Y O U K O

「ワルプルギスの出現予測地点は此处。」

「その根拠は？」

「統計よ。」

高町 杏子はほむらの家で“ワルプルギスの夜”に対して策を講じていた。

「統計？まどかやさやかから聞いたが、この街にワルプルギスの夜が来たなんてことは聞いた事がねえぞ？」

ワルプルギスの夜が出現した場所は必ず廃墟となり、大勢の人が死ぬ。アタシがミッドに渡る前にワルプルギスの夜が襲来したなんて話は聞いたことがねえ。

「……………」

「あのさあ、一応仲間なんだから、もう少し手の内を明かしてくれてもいいんじゃないか？そうしねえと此方もやりずらいんだよ。」

「あたしも同感。」

「それはそうと貴女はどうして此所に居るのかしら？美樹　さやか。」

「あたしにもこの街に絶対守りたい者ができちゃったからさ。」

「そう。戦力は多いに越したことはないわ。」

しかし……コイツの目的は何なんだ？まるでワルプルギスの夜に何回も遭遇しているような口振り。やたらとまどかに突っ掛かる行動。

「貴女と共闘するのは、“この世界”が始めてよ。」

ん？“この世界”？

「戦力は多い方がいいなら、マミさんも誘えばいいんじゃないの？」

「巴　マミは再起不能よ。魔女の真実を知って、心が打ち砕かれたみたい。」

典型的なパターンだな。正義感が強い魔法少女は魔女の真実を知ると、自害するか、鬱ぎ込む。

さやかの場合は例外だが、多分アイツの心の中では絶対守りたい者があつたから、心が壊れなかったんだろう。

「そういうわけで巴　マミは戦線には参加できないわ。」

「戦力が1人減ったか……………」

「ってことは、その“ワルプルギスの夜”って奴にあたしたち3人で戦わないといけないのか……………」

魔法少女“は”3人だけだな。特務零課からまともに戦えるメンバーが来てくれるし、いざとなれば“アレ”ある。

「なら、尚更お前の能力を聞いておかねえとな。」

杏子はホカホカのたい焼きをくわえながら、ほむらを少し睨み付けた。

しかし、ほむらはまったく口を割ろうとしない。

「……………時間干渉（ボソツ）」

くビクッく

杏子が小さな声で呟くとほむらはわかりやすい反応を示してくれた。

「なるほどな。お前の能力は時間干渉か。」

「……………正確には時間停止よ。」

「時間停止……………道理でグーグンニルが接近に気付かなかったわけだ。」

時間を止めた状態で近づかれたらグーグンニルもさすがに気づけねえからな。

「だが、その時間停止を使ってどうするつもりだ？」

「まったく効かないかも知れないけど、いくつか考えたプランがあるわ。」

S I D E N A N O H A

くアースラ 次元通信室く

「フォワードたちの様子はどうですか？」

「君が選んだだけあって、みんな優秀だ。正直、僕も嫉妬するくらいだ。」

クロノくんも十分優秀だと思うけどな。あれだけ精密な魔力運用は私にもできないよ？

あ、クロノくんっていうのは次元航行艦の艦長なんだけど、私が不在のヶ月半は彼にフォワードたちの教導を任せているの。魔力保有量はそんな多くないけど、そこを魔力運用技術とかで補ってる。管理局の間では「努力の天才」と呼ばれてるの。

「まあ、少しティアナが暴走したが、丸く収まったよ。」

「何か……あつたんですか？」

「かつての君と同じだ。」

私と同じってことは、オーバーレーニングにオーバーワーク……かな？ いや、フォワードはデスクワークの量は少ないから違うね。ということはオーバーレーニングか……ティアナはティードさん夢を叶えることに少し執着してるからね。

ティアナのお兄さん、ティード・ランスタは首都航空隊のエリート魔導師だった。だけど、犯罪者を手傷を負わせたものの逃がしてしまった。その時に救護班は間に合わずにティードさんは死亡。そのことに対して、上司が少し酷い発言をしたからお話してやったの。

「安心すると良い。多分、君たちが帰って来る頃には見違えるぐらいの強さになってるさ。下手をすれば、君も負けるかもしれないぞ」

？」

「まだひよつこに負けるつもりはないよ。でも、ティアナにもかなり実力がついたみたいだし……クロノ提督。」

「はっ」

「聖銃ハーディアスをティアナⅡランスターに渡してください。特殊武器庫のA-1の棚に安置してあります」

「わかりました。」

私とクロノくんは一応、私の方が階級は上になっている。といっても、私の役職は色々あるから場合によってはクロノくんの方が上官の時もある。

私が持つてる肩書きは「特務零課部隊長」「最高教導官」「特別科学官」とか色々。特務零課部隊長としては私のほうが階級が上。ややこしくてしょうがないよ。

「それともう一つ。“神具”の使用許可を」

「！！」

なのはのお願いに流石のクロノも驚いた。

“神具”というのは、なのはの『物質改変能力』によって普通の剣を神話級の武器に昇華された武器である。

ミッドチルダでも名のある鍛冶師に作って貰った名刀を神話級の兵器に昇華させたため、全てロストロギア認定されている。この神具は時空管理局の本当の切り札であり、勝手に使用することは固く禁止されている。

このアースラにも2つの神具が置かれている。

閑話休題

「そこまで強い相手なのか？」

「うん。」

思ったら、神具を使うのは【久遠の落日】以来になるのかな？私が神具を使うようになることなんて滅多にない。神具は長期任務に出る次元航行艦には必ず一つは配備されてる。最悪は許可なく使うこともできるけど、その後は物凄い報告書は書かされる羽目になるけど。

「君がそう言うなら、上層部もすぐに使用許可を出すだろう。」

「うん。あと半月ぐらいで戻るから、それまでフォワードたちにとっては任せたよ？」

「ああ。」

次元通信が切断され、クロノの姿を映していた空間投影ディスプレイが消える。

さてと……………私も魔女狩りに行こうかな？

SIDE HOMURA

明日、“ワルプルギスの夜”が此所に来る。明日がまどかを救えるかどうかの境目。

今度こそ、“ワルプルギスの夜”を倒す。それに今回はこれ以上ないくらいに事態が好転している。

「ほむら、実際の勝率はどれくらいだ？」

「20%程度。この時間軸の貴女たちの実力がどれくらいか、わからないから高いかもしれない。」

「高いことないだろ。此方はソウルアクセサリーのおかげで思い切り魔法を使えるんだからさ。」

「そうね。でも、その魔法を使う本人が未熟者な以上プラス要因にはならないわ。」

「あのさ……未熟者ってあたしのこと？」

「「当然だ（でしょ）」」

見滝原市に居る魔法少女の中でもさやかかの戦闘経験は最下位。二週間前に契約しただけのさやかでは、どうやって戦力にならない。神具があれば、話は別だが………

くピンポーンく

その時、ほむら宅の呼び鈴が鳴らされた。

「少し待ってて。」

ほむらは立ち上がり、玄関に向かった。

玄関を開けて来訪者を確認すると………来訪者はまどかだった。

「入ってもいいかな？」

まどかの言葉にほむらはコクリと頷いた。

「これが……“ワルプルギスの夜”？」

「ああ。結界に隠れず、顕現するだけでこの世界に災厄をもたらすモノ。」

「勝てるの？」

「神のみぞ知るってところだ。アタシら全員……死ぬかもしれない。」

「そんなー!!」

「まどか。貴女は前に私の願いを聞きたがってたわね。ちょうどいいわ。この際だから……貴女に話すわ。」

私の……永遠の旅路の出発点を。

ほむらはまどかに自分の願いを話し始めた。

く灰色の魔法少女の過去語り しばらくお待ちくださいく

詳しくはアニメ第10話をご覧ください。BY 作者

「そして、私は巡りに巡ってこの世界にたどり着いた。この世界が……私の旅路の終着駅になるかもしれない。」

分岐点は佐倉　杏子が「旅」の魔女を倒すこと。今まで世界で杏子は「旅」の魔女を倒せなかった。

だから、この世界が……最後に遣されたまどかとの約束を果たせるかもしれない世界。

私はまどかとの約束を果たしてみせる。

たとえ　私の命と引き換えになっても……

第13話（後書き）

気づけばまどマギ編ももう10話目。そろそろ佳境に入ってきました。

次回はとうとうワルプルギスの夜との決戦です。

第14話（前書き）

今回はオール三人称視点

第14話

杏子となのはが率いる時空管理局特務零課が特殊管理外世界に訪れて約1ヶ月。

スーパーセルが観測されたため、付近の住人は避難して、街には一人居ない。

上空は果てしない曇天に覆われて太陽の光すら届かない。そんな時、キーパーソンである高町 杏子は市街地にあるそあるマンションを訪れていた。

「お前は逃げなくていいのか？」

「ワルプルギスの夜が来たのなら、何処に居ようと同じよ。みんな死ぬしかないのよ。」

“ワルプルギスの夜”襲来まであと僅か。そんな時、杏子はマミの元を訪れていた。といってもベランダで背中合わせに会話しているだけだが……

「まどかやさやかが懂れた巴 マミは何処に行ったんだ？」

「正義の味方の巴 マミはもう死んだの。」

いつものマミように元気な声ではなく、沈んだ暗い声。

「こんな人殺しの私なんて生きてる価値」

「いい加減にしろよ、トーシロが。」

明らかに苛立ちを孕んだ声で杏子はマミの言葉を遮った。

「今度、生きてる価値がないなんて言ってみろ。死ぬのも拒むぐらいの絶望を与えてやる。」

「……………」

「お前は魔女を狩っていたことに罪悪感を抱いてるみたいだけど、それは間違いだ。」

「同じ境遇の子を殺しておいて何が間違いよ!？」

今までの暗い声とは一変。怒りを含んだ大きな声で叫ぶ杏子。

「はあ〜」

杏子は大きくため息を吐いた。

「魔女は倒されない限り成仏することはない。それがどれだけ辛いことかわかるか？」

「……………」

「少しぐらい考えれば、わかるよな？アタシらはそんな魔女の魂を救済してるんだよ。」

《マスター、そろそろ時間です。》

グーグンニルの報せに杏子はより一層気を引き締める。

「アタシはこれからワルプルギスの夜と戦う。逃げるなら、止めねえが、わざと死ぬのは許さねえ。」

杏子はそれだけを言い残すとベランダが飛び降りて決戦の会場へと向かった。

“ワルプルギスの夜” 出現予想地点周辺。見滝原市に在住する魔法少女が集結していた。さらに、この闘いを見届けたいと言い出し、周囲の反対も押し切ったまどかも居る。

「悪い。少し遅くなった。」

「いえ、ジャストタイミングだわ。」

ほむらが前を見据えるとたちまち白い霧のような立ち上り始めた。そして、ゾウのようなピエロのようなモノが次々出現する。

「コイツらは気にする必要はないわ。使い魔じゃないから。」

「ふーん……………」

「それより本命が来たわ。」

見滝原市の上空に巨大な影は出現した。その影は徐々にその身体を具現化させる。

青い衣装を着たピエロを逆さまにして足に歯車のようなパーツをつけたようなシルエットの魔女。

魔法少女の天敵にして超弩級の最強の魔女、「舞台装置」の魔女。通称“ワルプルギスの夜”がその姿を現した。

「これが……………ワルプルギスの夜……………」

圧倒的な威圧感と存在感。その2つが4人の身体にひしひしと伝わる。

「コイツを倒さないと恭介を守れない!!」

「今度こそまどかを……………」

「安心しろよ。お前も……………救済してやるからさ!!」

3人はそれぞれの目的のために……戦闘形態に移行し、此所に最終戦争の火蓋が切って落とされた。

先鋒はほむら。盾の中から数え切れないほどのロケットランチャーを取り出す。そして、時間停止を使い、ロケットランチャーを撃ち尽くす。時間停止を解除するとロケットランチャーの弾丸がワルプルギスの夜に殺到した。

しかし、ワルプルギスの夜にダメージはなく、ほむらの攻撃もまだ終わらない。

「なんか……転校生の闘いを見てるとあれが魔法少女なのか疑問に思うわ」

「あれは例外だ。全ての魔法少女があんな現代兵器を使って戦うわけないだろ。」

爆弾で鉄塔を倒壊させてタンクローリーで神風特攻。さらに、よくわからない兵器でワルプルギスを吹き飛ばし、大量の地雷を一斉に起動。

到底、魔法少女の戦闘風景とは思えない。

「だけど、これで手傷ぐらいは……」

次の瞬間、ほむらはワルプルギスの攻撃で吹き飛ばされた。杏子がすぐに『短距離瞬間移動』を使って救出する。

「あれだけの攻撃を受けて無傷かよ……」

「倒せないまでも手傷は負わせれると思ったのに……」

ほむらは少なからずショックを受けていた。

「作戦変更だな。全力でアイツを潰す！！」

作戦変更と同時に魔法を構築する杏子。

「エクセリオンバスター！！」

ワルプルギスに向かって放たれた純粹魔力砲はワルプルギスにヒットするもワルプルギスの驚異的な耐久力の前には意味を為さない。

「さやか、合わせる！！」

「ぶつつけ本番だけど、やってみる！！」

杏子はグーグンニルをソードフォームに変え、その刀身に魔力を纏わせる。

さやかも同じように魔力を纏わせて抜刀姿勢を取る。

「ダブル・一文字！！！！」

剣を抜刀した瞬間、魔力のよって構成された斬撃がワルプルギスに向かって放たれた。
デカイ図体故に攻撃はヒットするが、大したダメージを与えているように見えない。

「エクスキューション・ソードバレル！！」

いつもより一回りほど大きい魔力剣がワルプルギスに向かって行くが、これも大したダメージを与えられない。

（ちっ！！母さんのSLB級の魔砲じゃないとまともにダメージを与えられないか）

「杏子！！」

さやかに叫ばれて本能的にその場から退避する。杏子が居た場所にサーベルが降り下ろされた。

「おらっ！！」

グーグンニルで一閃。本体は化け物のような耐久力でも使い魔の方は大した耐久力を持っていないようで、使い魔はそのまま消滅する。

「サンキュー、さやか。」

「いいっていいって。それよりもどうするの？こっちの攻撃はまったく通じないし……………」

「実弾も通用しないわ。」

杏子とさやかにほむらが合流した。まどかの方は以前、杏子が渡した簡易デバイスが障壁を張ってくれているだろう。

「一応、アイツにダメージを与えそうな魔法はあるんだが……………チャージにかなり時間がかかる。」

「なら、それまで貴女を攻撃から守ってあげるわ。」

「この天才さやかちゃんに任せなさい!!」

「たく…………お前ら、根っからのお人好しだな。」

杏子は足元に一際大きな古代ベルカ式魔法を展開する。

「この魔法のチャージには大体20秒かかる。それまで時間を稼いでくれ。」

「わかった!!」「わかったわ。」

「杏子ちゃん…………さやかちゃん…………ほむらちゃん…………」

「運命は覆らないよ。誰もワルプルギスの夜は倒せない。そして、彼女たちは死ぬ。これは定められた運命だ。」

「そんなことない!!」

悪魔ように囁くキュウベエの言葉をまどかは強く否定した。

「私は信じてる。きっとさやかちゃんたちは運命を覆すつて。」

「そうか。なら、じっくり見届けるといい。彼女たちが絶望に染まる時を」

「チャージ完了まで残り五秒!!」

「ちょっとキツいかも!!」

「数が……多い!!」

杏子を守るように闘うさやかとほむらは数多の使い魔に襲われていた。

「三……二……一……よし!!グーグンニル、カートリッジ・フルロード!!」

ガシュンッ!!ガシュンッ!!という音を立ててグーグンニルの中に残っていた四発のカートリッジを解放する。杏子の身体の中を膨大な魔力が暴れまわるが、それを制御する。

すると、グーグンニルは紅い光を帯び、その光が鳥のような形を作っていく。

さらに、右腕に魔力で弓を創造し、グーゲンニルで射る体勢に移る。

「ギガンテック・サジタリウス（巨人の大弓）！！」

グーゲンニルは一条の光の筋を作り、ワルプルギスを撃ち抜いた。

「はあ……はあ……はあ……」

急激な魔力消費に荒い呼吸を吐く杏子。

アハハハハ　アハハハハ

しかし、そんな3人の奮闘を嘲笑うかのようにワルプルギスは見滝原市に建設されていたビルの上の部分を浮かび上がらせるとビルを投擲した。

三本のビルが杏子たちに向かう。急激な魔力消費で動けない杏子をさやかが抱えてワルプルギスの攻撃を避けた。

「まどかー！！」

ほむらは気づいた。

一本のビルが正確にまどかが居る方向に向かっていった。ほむらは時間停止を使用しようとするが……

「そんな……タイムオーバー」

ほむらの時間停止には制限がある。それはさかもどった日より1ヶ月の間しか使えないのだ。再び時間停止を使うにはまた一ヶ月時をやり直さなければならない。

時間停止に匹敵するスキルを持つ杏子も急激な魔力消費の影響で動けない。まどかを助けに行ける者は居ない。

「まどかああああ！！」

ほむらは力一杯叫んだ。

闇より暗き絶望に眠る、汝は少女の運命に叛く牙！！

くドゴン！！！！

一瞬の漆黒の閃光。その後には轟いた大きな爆音。
唐突にワルブルギスの夜が投擲したビルはすべて破壊された。

「間一髪だったわね、鹿目さん。」

まどかの前に立ちはだかったのは、全長3メートルぐらいの漆黒の大剣を握りしめる漆黒の魔人。
所々に黄色のラインが走り、その身体は機械で形作られた魔人のようだった。

その足元には金髪縦ロールの魔法少女が威風堂々と仁王立ちしていた。まどかとさやかが憧れた巴 マミが絶望から這い上がり、さらには新しい力を携えて戦場に再び舞い降りた。

第15話

「マミ……さん……？」

「来るのが遅れてごめんなさい。」

「あの……その力は？」

まどかはマミの後ろで腕を組みながら佇んでいる漆黒の機械の魔人を指差した。

「私の新しい力、“アスラ・マキナ機械魔人”よ。」

「マミさん！！」

そこへさやかたちも合流した。マミが来たことで戦力が上がったように思えるが、杏子は急激な魔力消費の反動でしばらく動けない。よって、ファイフティ・ファイフティだ。

「遅れてごめんなさいね、美樹さん。でも、私が来たからにはもう大丈夫よ。」

「お前ら……暢気に話してる場合じゃねえ。第二波が来るぞ……」

力の籠っていない覇気のない声。すでに杏子は限界を迎えていた。そんなことはお構い無しにワルプルギスの夜は五本のビルを投擲し

てきた。

「今度は五本も!？」

「任せて。 “ 光より顕現せし希望を紡ぐ者 汝は無垢なる刃! ! ”」

マミが手を翳すと背後の機械魔人^{アスラ・マキナ}も連動するように腕を掲げる。さらに、呪文を唱えると魔人の手に握られた銀色の大剣が眩いくらいに光り、その光が長い刀身を作り出す。

「ハアッ! !」

マミが手を動かすと魔人も大剣を振るう。その光の刃はワルプルギスの夜が投擲した五本のビルを切り裂いた。

「凄っ! !」

（この力なら、アイツに勝てるかも知れない! !）

一度は消えかけたほむらの希望に再び光が差した。だが、杏子は樂觀視して居なかった。

（間違いねえ。さっきの攻撃の瞬間、ソウルアクセサリーが一気に濁りやがった! !）

マミのソウルアクセサリーは少し濁りのある状態からソウルアクセサリーの半分が一気に濁った。

通常では考えられないくらい魔力消費の多さだ。杏子から見てもあの攻撃はかなり強力だった。その対価がこの異常な魔力消費量だ。

（あと二発ぐらいが限界な筈だ。）

その時、今度は多数の使い魔が襲撃して来た。

「闇より暗き絶望に眠る、汝は少女の運命に叛く牙！！」

最初に使ったのと同じ呪文。魔人の腕から放たれた黒い球体は急激にその体積を膨張させて使い魔たちを喰らった。

（広域空間攻撃か！！だが、これであと一発しか撃てない筈だ。）

「はあ……はあ…… 光より顕現せし希望を紡ぐ者 汝は無垢なる刃！！」

荒い呼吸をしながら、マミは四回目の攻撃を行う。
振るわれた光の刃はワルプルギスの夜の身体に切り傷を負わせた。

「このまま……ぐっ！！」

このままワルプルギスの夜を切り裂こうとするマミだが、突然膝をつき、漆黒の魔人もマミの影の中に戻って行った。

「「マミさん！？」「」

まどかとさやかが急いで駆け寄る。マミのソウルアクセサリーは黒く濁っていた。

魔女化する心配はないが、これではマミも疲労で指一本動かせない。

「やっぱり……魔力の消費が……桁違いね」

「当たり前だろうな。あんだけ高威力の攻撃を立て続けて行ったら、
そうなる。」

光が差した希望に再び陰りが現れ始める。が、天は彼女たちを見捨てなかった。

くブオンッ！！く

大きな円形魔法陣が展開され、複数の人影が浮かび上がる。

「ようやくご到着か……………」

杏子は笑みを浮かべながら呟いた。

ロリ・ポップ型のハンマーを握る桃色の髪の少女、シャルロッテ。

大きなハサミを持った青い髪の少女、ゲルトルト＝ブラウデンプルク

分厚いハードカバーの本を持った黒い髪の少女、雪風 煌夜。

白塗りの二丁銃をしっかりと握り締める少女、トリシューラ＝ブリザード。

長剣の西洋剣を握ったハニーブロンド色の少女、ジャンヌ＝ダルク。
漆黒の長い三叉の槍を握る漆黒のツインテールの少女、エルザ＝マ

リア

そして、杏子の母親であり、特務零課隊長 高町 なのは。

「ごめん。この子たちの武器を強化したら、遅くなっちゃった。」

「遅れはちゃんと取り戻してくれよ？」

「わかってる。だから、取って置きの切り札を持ってきたよ。」

なのはは杏子に向かって黄土色の布に包まれたモノを投げ渡した。それを受け取った杏子はニヤリと笑った。

「それから……………はい。」

「サンキュー」

次になのはが渡したのは緑色の液体が入った小瓶だ。

杏子はその小瓶を受け取るとその中に入っていた液体を一気に飲み干した。

「ぷはあゝ……………やっぱりにげえ。」

「良薬は口に苦し。こればかりは仕方ないよ。」

「まあ、魔力は全回復したし……………盛大に暴れるか！！」

なのはが渡した小瓶の中身なのは特製万能薬“エリクシール”で

ある。

この薬を服用した者は疲労や傷、魔力が回復する最高の薬だが、一個作るのにかなりの時間を必要とするので量産できない。さらに言えば、とても苦い。慣れないと吐き出すほどの苦みだ。

「行くぞ、 “ゲイボルグ” ！！！！」

「行くよ、 “エクスカリバー” ！！」

なのはと杏子は同時に黄土色の布を取り払った。

なのはが握っていたのは銀色の刀身の中心が金色の西洋剣。

杏子が握っていたのは紅い三叉の槍。長さは杏子の身長のおよそ1.5倍ほど。

どちらもその身から膨大な魔力を放出していた。

アハハハハ アハハハハ

笑い声を上げながら、ワルプルギスの夜は大量の使い魔と一際大きなビルを投擲してきた。

「行くよ」

シャルロットはハンマーを大きく振り上げて、使い魔を倒す。

「フリーズランサー！！」

残りの使い魔をトリシューラが作り出した氷の槍が撃ち抜いていく。

「ゲルト、合わせて。」

「わかってる。」

元「影」の魔女、エルザ・マリアとゲルトルトが己の得物を構える。ゲルトルトの鉄に烈風が渦巻き、の槍に黒い魔力がまとわりつく。

「「G&Eコンビネーション―極点集中魔砲！！」「風竜の咆哮」！！！！」

ゲルトルトの風を纏った漆黒の砲撃が大きなビルを撃ち抜き、破壊する。

「星の煌めきよ　我が願いを聞き届け給え。邪悪を退ける聖なる光よ　此処に集いて道を示さん！！」

本を開きながら、呪文を唱え続ける煌夜。その足元には白色光を放つ円形の魔法陣がくると回転を続けていた。

ワルプルギスの夜の周囲には赤色、青色、緑色の球体が配置されていた。

それは周囲の魔力素を吸い込み、徐々に大きくなっていく。

「天地鳴動、スターゲイザああああ！！」

煌夜が高らかにトリガーワードを叫ぶと三色の球体はみるみるとその体積を大きくしていき、“ワルプルギスの夜”の身体を包み込む。

球体が消滅するとワルプルギスの衣服のような物が所々破けている。

「ふう………」

このメンバーの中で一番歳上であり、シャルロッテたちの纏め役であるジャンヌは刃渡りほどの西洋剣を構え、魔力を注ぎ込む。すると、西洋剣の刀身は眩く光り始めた。

「シャルロッテ。」

「はい」

シャルロッテがジャンヌの背後に立ち、ハンマーを振り上げる。

「行くよ」

ジャンヌはその場で少しジャンプして足を浮かせる。浮いた足を掬うようにシャルロッテがハンマーを振り抜いた！！

「セイント・クロス！！」

ワルプルギスの夜の胸元を十字に切り裂くが、ジャンヌの剣は粉々に砕け散ってしまった。

それでもワルプルギスには確実にダメージが届いていた。

「お前の心臓………頂くぞ！！」

杏子はゲイボルグを投擲した。投擲されたゲイボルグはワルプルギスの夜の心臓部分を綺麗に貫いた。

そして、ゲイボルグはまるで犬のように杏子の手に戻ってきた。

「絶望に吞まれた少女の魂を此処に封じる。“魂魄封印”！！」

“魂魄封入球”にワルプルギスの夜の魂が封印され、桃色に染まる。そして、それと入れ替わるようになるのはが飛び出した。

「エクスカリバー、少女たちの思いを紡ぎ力と成せ！！」

なのはが命令するとエクスカリバーは黄金の光を放ち始めた。

エクスカリバーは人の思い・願いを集束し、力に変えることができる。

その威力はまさに星一つを滅ぼすほどと推測されている。ゆえに、このエクスカリバーはなのはだけが使うことを許させた最強の神具なのだ。

「思いの紡げ！！エクスカリバー！！」

「キイイイイイイン！！！！！！」

黄金の光は純白の光に変わり、何かを形作っていく。

それは……何十倍、何百倍にも巨大化した鳥の羽根だった。《ワルプルギスの夜》と同じぐらいの大きさの羽根をなのはは天高く掲げる。

「煌翼天翔斬！！」

なのは力一杯エクスカリバーを降り下ろした。
エクスカリバーは曇天を切り裂き、ワルプルギスの夜の身体を一刀
両断した。

くアハハ アハ……ハ あ……は……は……は……は……

最後の最後までワルプルギスの夜は笑っていた。しかし、その一刀
両断された身体は粒子となって消滅していった。最強と謳われた魔
女は跡形もなく消滅した。

曇天が覆っていた空は青空を少女たちに覗かせていた。

「夜が……開けたな。」

「ええ。」

「うん。」

「私たちは……守り切れたんだ」

「そうね。そして、私の長い旅も……ようやく終わったわ。」

マミたちに釣られてなのか、自分の本心からなのかわからないが、
ほむらは笑顔を浮かべていた。

第15話（後書き）

ワルブルギスの夜、討伐成功！！（モンハン風）
ここまで長くなると思わなかったよ。でも、まだ一話だけ残ってるんだ

第16話 まどマギ編完結

ワルプルギスの夜を無事に撃破した魔法少女・特務零課連合軍。
さやかたちはお互いに健闘を讃えあった。

「まったく。ワルプルギスの夜を倒してしまうなんて予想外だよ。」

そして、タイミングを狙ったようにキュウベえは口を開いた。

「過程はどうあれ君たちはあの最強の魔女を倒した。運命を覆すなんて聞いたことないよ。」

「運命なんて個人の力で変えられる。それがこの世界の理だよ。」

「ふーん。それにしても、魔女になった魔法少女を人間に転生させる方法があるなんて思いもしなかった。君たちは魔女を消滅させようとしてるみたいだね。でも、魔法少女が居なくなるなら限り魔女は消滅しないよ?」

「……………」

なのはは無言でポケットからある物を取り出した。

形はひし形で青い光を放つその宝石の名は“ジュエルシード”。

かつて、なのはとその親友が親友となるきっかけを作った魔法の石であり、膨大な魔力をその小さな器に内包したロストロギアである。その身に秘めた膨大なエネルギーを感じ取ったのか、キュウベえは言葉に詰まった。

「これだけの魔力があれば、“エントロピー”を凌駕するなんて簡

単だよね？」

「凌駕できるなんてレベルじゃない。新しい世界すら、作り出せるよ。」

「なら、取り引きだ。インキュベーター。」

なのはの視線が優しいモノから鋭いモノに変わる。

「今後一切、魔法少女を産み出さないと誓うなら、この宝石をお前に献上する。」

「そもそも僕たちが魔法少女を産み出してるのは、エネルギーを回収するためだ。エネルギーを回収する必要があるなら、魔法少女を産み出す理由なんてないさ。」

「交渉成立だ。」

なのはは5つのジュエルシードをキュウベえに投げ渡した。

「じゃあ、僕は自分の星に戻るとしよう。エネルギー回収ノルマは達成できたしね。」

いつの間にかキュウベえの姿はそこになかった。

最強の魔女“ワルプルギスの夜”は討伐された。そして、キュウベえ……インキュベーターもこの地球を去り、新たな魔法少女は生まれなくなった。

しかし、特務零課の任務はまだ終わっていない。

半月後………

ワルブルギスの夜の討伐から半月の時があつという間に流れた。作業人数が大幅に増えたことにより、作業効率も格段に上昇した。そのため、特務零課が人間に転生させた魔女は数え切れない。だが、全員が特務零課に残るわけではない。家族が居る者は日常に戻り、家族がや友人も居ない者は特務零課に残った。といっても、それも全員が全員ではない。

S I D E K Y O U K O

この世界に来て早いものでもう1ヶ月半の月日が流れた。アタシらが居るのは見滝原市の臨海公園。

見滝原市はワルブルギスの夜の襲来とアタシらとの戦闘の余波で廃墟となったが、街の人の努力のおかげで元の姿を取り戻しつつある。

「もう……行ってしまうのね。」

「ああ。この世界に滞在できる時間を過ぎちゃったからな。」

そう。特務零課の任務期間は約45日間。任務が終了した以上、アタシらが此処に居る意味はない。

「残ってる魔女のことはお前らに任せる。」

「任せて。すべての魔女は私たちが成仏させるから。」

この1ヶ月半で大半の魔女を倒滅・救済したが、魔女はまだ残ってる。

母さんが触れるだけでソウルジエムをソウルアクセサリーに変化させるアイテムを作ったおかげで魔女が新しく発生することはない。

「貴女のおかげで私は長い長い旅を終えることができたわ。」

ほむらは笑顔を浮かべながら言った。肩の荷が降りたおかげか、随分と感情を表に出すようになった。

「気にすんな。アタシは好きでやっただけだ。」

「とか言っちゃって本当は嬉しい癖に」

「うつせえぞ、さやかー!!」

「怒った怒った やっぱり凶星なんだ」

ニヒヒと笑いながら杏子をからかうさやか。彼女なりに別れを惜しんでいるのかもしれない。

「煌夜ちゃんも行っちゃうの？」

「うん。」

「たまに……会いに来てくれる？」

「もちろん まどかは私の最初の友達なんだから」

「……………うん」

「それに……………まどかが杏子から貰ったデバイスがあれば、次元を越えて通信ができるよ。」

そう言いながら、煌夜は自分の長い漆黒の髪を纏め上げていた青いリボンをほどいた。

「友達の証。私のことを忘れないように……………」

「じゃあ、私も。」

まどかも大して長くない髪の毛をツインテール状に縛っていた赤いリボンをほどいて煌夜に差し出した。

「えへへ」

「ははは」

「微笑ましい光景だな。なあ、さやか。お前もそう思わないか？」

くギリギリギリギリ！く

「痛い痛いっ！！そんなこと言われたって見えないから！！ちよっ！！力を強めるな！！」

杏子をさんざんからかっていたさやかは杏子より報復という名のアイアンクローを味わされていた。

その様子をほむらとマミが微笑ましそうに見詰めていた。

「いい加減離せよ！！この貧乳！！」

くピキッく

杏子のこめかみにつつすらと青筋が浮かび上がる。

コイツ………言ってはいけないことを言ったな？よし。もう少し力を強めよう。

くギリギリギリギリ！！！！！！く

「ぎゃあああああつ！！頭潰れる！！トマトになるく！！」

「ほらほら、その仲良しお二人さん。そろそろ時間だよ？」

黒い半袖の服に青いスカートと履いた少女・リーファイア「ワルプルギスに言われてさやかを解放する杏子。」

すでにオモイカモネによって転送ポートが開かれて杏子以外の全員がその中に入っていた。

「……………元気だな、さやか。」

「あんたもね、杏子」

小さく言葉を交わすと杏子も転送ポートの上に乗った。

杏子が入ると同時に転送ポートが起動し、アースラに戻った。

「さあ、いつまでも感傷に浸ってる場合じゃないわよ。私たちにはまだやることがあるんだから。」

「そうね。」

「よし!!行こう!!」

「うん!!」

見滝原市の魔法少女は闘い続ける。呪いを振り撒く哀れな魔女が居なくなるまで……

第16話 まどマギ編完結（後書き）

超短けえ！！でも、しょうがないです。この話は第15話に入れるつもりだったんですが、やっぱりせつかなので分けました。

追加設定（前書き）

まどマギ編で正式参入したメンバーの設定です。

追加設定

佐倉 響

性別：

年齢：杏子と同じ年

魔力量：A A +

容姿：杏子と瓜二つだが、目つきがおっとりしている。

髪型：二本のおさげ（漫画版に出てきた髪型）

杏子の血のつながった妹。現在はスカリエッティに囚われている。一家の無理心中の後、インキュベーターがその世界に施した特殊な結界の影響で魂が固定されてしまった。スカリエッティが培養したクローン体に魂が宿り、一人の人間として転生している。

リーファイアⅡワルブルギス

性別：

年齢：14歳程度

髪型：クリーム色の髪の毛を燕の尻尾のように二つに分けている。

瞳の色：琥珀色

魔力量：S S

使用デバイス：双剣型ストレージデバイス

使用術式：近代ベルカ式

スキル：魔力変換『炎熱』、魔力変換『電気』

元「舞台装置」の魔女が転生した姿。最強の魔女であっただけに魔法資質がずば抜けている。

特務零課最強と言っても過言ではないほどの能力を身に秘めている。基本的に誰でも丁寧語。

杏子とペアを組むことが多い。

【バリアジャケット】

背中が開いたロングスカートと一体になった長袖の衣装で色は濃い青色。

戦闘時は長い髪の毛はピエロが被っているような帽子の中に収納している。

両腰には双剣の鞘を携えている。

ジャンヌⅡダルク

性別：

年齢：17歳程度

髪型：ハニーブロンド色の髪の毛のストレート

瞳の色：サファイア

魔力量：A A A

使用武器：聖剣デュランダル

使用術式：古代ベルカ式

スキル：治癒魔法、高速術式展開

特務零課の転生少女たちを纏め上げるもう一人のリーダー。いつも微笑みを絶やさないが、一度怒らせるとほぼ笑みを浮かべたまま怒るのでかなり怖い。指揮能力が高いので、戦闘では司令塔。デバイスを持っていないので術式構築を短縮することができないが、「高速術式展開」というスキルで補っている。また、並列思考も得意。よく本を読んでおり、その時は眼鏡を掛けている。

【騎士甲冑】

“緋弾のアリア”のジャンヌと同じ衣装。

ユキカゼ
雪風
ユウヤ
煌夜

性別：

年齢：12歳程度

髪型：漆黒の髪の毛を赤いリボンでツインテール状に縛っている

瞳の色：青

魔力量：B+

使用術式：ミッドチルダ式

使用武器：魔術書ネクロミコン（制作中）

スキル：ハッキング、広域殲滅魔法

元「箱」の魔女が転生した少女。転生少女の中では魔力量は少ない方（一番少ないかも）。

引き篋もっていた影響なのか運動が苦手な趣味でデバイスを組み上げたりすることを密かな目標にしている。リボンはまどかと交換したもの。魔術書ネクロミコンは「魔力消費を抑える」という概念を持たせた概念武装。ハッキングの腕前は一級品。

【バリアジャケット】

白い長そでに白いスカートの白一色の衣装。腰辺りで黒いリボンが巻かれている。

ゲルトルーツII フランデンプルク

性別：

年齢：15歳程度

髪型：青色の髪をポニーテールに纏めている

瞳の色：漆黒

魔力量：A A

使用術式：古代ベルカ式

使用武器：大バサミ型アームドデバイス（開発中）

スキル：魔力変換『烈風』

元「花壇」の魔女が転生した少女。若干バトルマニア。しょっちゅうリーフィアに戦いを挑んで返り討ちにあっている。（これが原因でリーフィアは力をメキメキと付けた）

普段は赤縁の眼鏡をつけているが、伊達ではなく、近視なため。植物を育てることが好きなので、自分の部屋でなのはから紹介された魔法薬になる薬草を育てている。

【騎士甲冑】

青色のドレスを改造して動きやすくしたもの。露出度は低い。腰に赤色の腰当てと腕にも赤色のガントレットを装着している。

トリシューラ®ブリザード

性別：

年齢：11歳程度

容姿：遊戯王OCGの「ブリザード・プリンセス」

魔力量：A A A +

使用術式：ミッドチルダ式

使用武器：二丁銃型デバイス（現在制作中）

スキル：同時多重砲撃

元「破壊」の魔女。魔法少女になる前はとある国お姫様だったらしい。願いごとは不明。

子供っぽい性格でシャルロッテとは性格的にも馬が合う。そのため、トリシューラとシャルロッテはコンビを組むことが多い。また、魔力変換『氷結』を持ち、ブリューナクともユニゾンできる。

【バリアジャケット】

前側の丈が短くなった水色のライン入りのスカートと一体化したワンピース型の衣装。

全体に水色のラインが入っており、頭に氷を模した髪飾りがついて
いる。

簡単に言えば、「ブリザード・プリンセス」の衣装そのままです。

シャルロッテ

性別：

年齢：11歳程度

髪型：桃色のふつくらしたショートヘア

瞳の色：ピンクに近い色

魔力量：A A +

使用術式：古代ベルカ式

使用武器：ロリ・ポップ型ハンマー（制作中）

スキル：高度魔力運用

元「お菓子」の魔女。子供ばい性格でトリシューラとよくつるんでいる。

実は料理が大得意でチーズ以外の料理はすべて作れる。それゆえに、特務零課の料理長で25人分近い量を五人掛かりで作っている。魔力運用は誰よりも上手いの、保有する魔法が恐ろしく少ない残念な子。基本的にマイペース。なぜかいつも袖がぶかぶかな衣服を着ている。（イメージ的にはESののほほんさん）ちなみに、特務零課の料理長でもある。

【騎士甲冑】

首には赤い水玉模様のマフラーを巻き、少し丈の短いスカートと一

体化した長袖の服（色はピンクと黒）。さらに黒いマントとキャスタと呼ばれる黒い帽子を着用している

エルザ・マリア

性別：

年齢：12歳程度

髪型：漆黒のツインテール

瞳の色：スカーレット

魔力量：A A +

使用術式：近代ベルカ式

使用武器：三叉槍型のアームデバイス

スキル：影魔法

元「影」の魔女。性格は根暗……。ではなく、活発な性格。しかし、極度の人見知りの性格でいつも本を読んでいるので根暗だと思われる。槍術は杏子から教えてもらっている。実はコスプレが大好きで自分で服を縫うこともある。料理の腕も並み。

【騎士甲冑】

白いフリルがあしらわれた黒いゴスロリ服

《用語解説》

【特務零課】

「久遠の落日」後に新設された部隊で管理局の抑止力的存在。管理局の傘下でありながら、命令系統が独立し、管理局法にも規制されない最強部隊。全員が不老不死。

入隊条件・永遠の時を生きることになれる精神を持っていること。

- ・Sランク認定されたスキルを持っていること。
- ・正義の概念に捕らわれていない。

【同時多重攻撃】習得難易度 S

正式名称は“全方位同時多重攻撃スキル”。自分の視界の中なら、どんな角度・方角からでも攻撃することができるスキル

【影魔法】習得難易度 S

自分の影を操って相手を攻撃する魔法。消費魔力の割に多様な攻撃をすることができ、完全習得すれば、自分自身が影を纏うこともできる。太陽の下でないと使えないことや習得の難しさから、使い手が少ない。

【高速術式展開】習得難易度 S+

デバイスの補助をまったく受けずにタイムラグ無しで術式を構築するスキル。メリットとしてはデバイスを破壊されても全力で戦えることと不意打ちに対応し易くなるという二点がある。しかし、大半の魔導師がデバイスに頼っているので習得者は恐ろしく少ない。

第17話

S I D E N A N O H A

特務零課が特殊任務に出掛けて1ヶ月半。特務零課の拠点であるL級次元航行アースラが1ヶ月半ぶりに時空管理局本局のドッグに戻っていた。

「アースラ、本局とのドッキング完了。」

「ん。ごめんね、オモイカモネ。しばらくはゆっくり休んで。」

「うん。なのはもゆっくり休んだ方がいいよ？」

「ありがと。でも、私は大丈夫だよ。本局に戻って来るまでの間にゆっくり休んだから。」

それにこの後、色々書類を書かないといけないんだよね。それに、ジャンヌから概念武装の制作依頼があるし。

「さてと。私も降りるか。」

アースラから降りたなのはを出迎えてくれたのはある2人の上官だった。

聖王教会教会騎士団員、カリム・グラシア。

現在、時空管理局本局を取り仕切る新生上層部の1人として管理局に籍を置いている。

次元航行官クラウディア艦長、クロノ・ハラウン。
なのはが長期任務に出ている間、機動六課のフォワード四人の教導を担当した。

「特務零課、ただいま任務を終えて帰還しました。」

「ああ。」

「ご苦労様です。」

「なのは。戻ってそうそうで悪いが、ミッドチルダに向かってくれるか？」

「何か………あつたの？」

「実は……………」

ふむふむ。休暇中だったライトニングがレリックを引き摺って地下水路を移動してきた少女を保護。

少女が落としたもう1つのレリックを巡ってガジェットと戦闘中……と。航空戦力の方はフェイトちゃんとヴィータちゃん。地下水路の方はフォワードたちが……………」

「事情はわかった。それで私はどちらの方に向かえばいいの？」

「航空戦力の方を頼む。フェイトが居るが、そろそろ限界な筈だ。」

「わかった。」

はあ。帰ってきた直後に新しい仕事っていうのは、精神的にも辛いな。

ユ一ノくんの気持ちが少しわかった気がする。とりあえず、地下水路の方は杏子に行ってもらおうかな。

「杏子、トリシューラ。聞こえる？」

「聞こえる。」

「こっちもだよ」

「帰宅直後だけど、新しい任務が入ったの。任務内容は機動六課と

協力してレリックの回収と航空戦力の殲滅。杏子はグーゲンニルに座標を送るから、そこに向かって。トリシューラは私と一緒に航空戦力の殲滅。わかったね？」

『ああ。』

『合点承知！！』

S I D E K Y O U K O

はあ………帰還直後に新しい任務が舞い込むなんてなんつう不運だよ。

しかし、地下水路に結構な数のガジェットが居るらしいから、念のためにもう1人連れていくか。

杏子は口の中に入れていたアイスクランデーの棒をゴミ箱に入れると訓練室の扉を開けた。

訓練室の中では濃い青色の衣装を着た少女がまるで舞踏を踊るかのように双剣を振り回していた。

「リーファイア」

アタシが名前を呼ぶと双剣を振り回してた少女・リーファイア「ワルプルギスは動きを止めてこっちを向いた。」

「少し付き合ってくれ。」

「別に構いませんが……私を連れていく意味がないのでは？」

「デバイスが完成してるのはお前だからだよ。それに敵の規模がわかんねえから、戦力は多いほうがいい。」

特務零課のメンバーの中でデバイスを所持してるのは、部隊長の母さんと副隊長のアタシにリーフィアしか居ない。

特務零課の構成員は総勢28人。そんな25個のデバイスをすぐに作れるわけがない。トリシューラは例外でブリューナクが居れば、十分に闘える。

ちなみに、リーフィアの双剣型デバイスはアタシがマリエルさんに教わりながら作った情報処理能力や容量を極限まで高めた一品だ。まあ、リーフィアの魔力に耐えられるかわからないけどな。

おっと、閑話休題。

「というわけで行くぞ。レリックが奪われたら、洒落にならねえかな。」

「わかりました。」

本局のトランスポートを抜けると古びた地下水路に出た。母さんが言うにはこの地下水路の何処かにレリックがあるらしい。ミッドチルダの北部にある廃棄都市区画は数年前に起こった臨海第6空港火災事故に伴って閉鎖された場所だ。その空港火災の時、アタシも母さんと一緒に救助活動に当たったものだ。

「このくそ広い地下水路からレリック一個を探せって………なんつう無理ゲーだよ。」

この地下水路はミッドチルダのほぼ全域にいきわたっているから、無茶苦茶広い。

あゝブリューナクも連れてくるべきだった。って、ブリューナクの奴はトリシューラの方か。

「キョウコ、レリックとは何ですか？」

「説明してなかったな。レリックは大量の魔力が高密度に凝縮されたロストロギアだ。扱い方を間違えたら、最低でも街一個は焼け野原になる。」

「……………本当ですか？」

「本当だよ。残念がらな。リーフィア、お前感知魔法が使えるよな？」

「はい。」

「ここら辺一帯を調べてくれないか？」

「わかりました。」

リーフィアの足元に濃い青色のミッドチルダ式魔法陣が展開される。リーフィアは何故か、感知魔法と防御魔法を真つ先に習得した。その理由を聞いたら「攻撃は他のメンバーに任せればいいからです」と答えた。

この性格のせいか、コイツはかなり人望がある。

「キョウコ、見つけました。此処から西の方向で戦闘が行われてします。」

西って……壁しかないんだが？仕方ない。壊すか。

杏子はグーゲンニルの矛先をちょうど西側にある壁に当てると、魔力を集束して壁を撃ち抜いた。

元々、廃棄都市区画で老朽化によって脆くなっていた地下水路の壁はぼろぼろと崩れ落ちた。壁の先にはガジェットの残骸がごろごろと転がっていた。

機動六課の奴らが破壊して行ってくれたのか？合流するのはもう少し

し後になると思ったんだが……

「リーフィア。多分、この先は戦場になってる。準備はいいか？」

「はい。」

「よし。行くぜ!!」

S I D E ティアナ

訓練に明け暮れていた私たちにクロノ提督から突然言い渡された休暇。その休暇の最中に突然舞い込んだ任務。

これまで通りに簡単に遂行できと思っていた。だけど……

「スターレンゲボイル!!」

無数の炎弾が私たちに襲いかかる。向こうは召喚師とその召喚獣に炎を操る融合機の3人組。こっちは5人だけど、キャロは召喚師の攻撃で行動不能。エリオはキャロを抱えてるから、行動が制限される。結果、戦えるのは私を含めて3人。

向こうは全員がかなり強いから、形勢は圧倒的に不利。

「ティア、どうする?」

「このまま後退してヴィータ副隊長と合流する。そうすれば、この形勢を一気に覆せる。」

「だね。」

《emergency!! 高魔力反応がこっちに近付いて来ます!!》

「「「「!!」」」」

こんな状況で敵の増援!? 冗談じゃないわよ!!

私たちが居る反対側の通路を駆けてくる2人の人影が私の目に見えた。

「ランスウィップ!!」

紅い方の奴が槍を振るう。その槍は鞭のように伸びて私たち……
じゃなくて敵を攻撃した。

「時空管理局特務零課副隊長、高町 杏子だ。お前が持つてるレ
リックを……渡して貰おうか。」

SIDE ANOTHER

「時空管理局特務零課副隊長、高町 杏子だ。お前が持つてるレ
リックを……渡して貰おうか。」

杏子はレリックケースを抱える少女にグリーンルを突き付ける。
薄い紫色の髪の毛で、おでこの部分に何かの紋章のようなものがある。

「渡さない。」

「そうか………なら、死んでも恨むんじゃねえぞ!!」

杏子は槍を構えて突進する。

「ルールー!!」

「邪魔すんじゃねえよ!!」

杏子が真っ先に狙ったのは融合機の方だった。『短距離瞬間移動』で融合機の後ろに回ると遅延呪文を発動し、融合機をバインドで拘束する。

「リーファイア!!召喚獣の方は頼む!!」

「わかりました!!」

双剣を抜刀したリーファイアは黒い甲殻を纏った召喚獣に肉薄する。

くガキンツ!!」

リーファイアが振るった双剣の刃は召喚獣の甲殻を切り裂くことができなかった。

「硬い………でも!!」

リーファイアはすぐにもう片方の剣を胴体と腕の付け根に突き刺した。すると、付け根の部分は甲殻に覆われて居ないのですんなりと刃は

食い込んだ。

「はあっ!!」

くバチバチバチ!!!!く

剣を通じて電気が流される。膨大な魔力を変化させた電気は召喚獣の身体を自由を奪った。

しかし、魔力の流した双剣の片割れは粉々に砕け散った。その代償を払ってリーフィアは少女の召喚獣を見事に倒した。

「ガリュー!!」

「おっと。」

くチャキく

杏子は少女の背後に回り込み、首筋にグーグンニルの矛先を当てる。

「下手に動いた瞬間、その首が胴体とお別れだぜ?」

「……………（ギリッ）」

少女は悔しさからなのか、唇をかみしめる。

杏子は少女を脅して大人しくさせると少女の身体にバインドを掛けた。

そして、少女が持っていたレリックケースを奪う。

「機動六課フォワード陣、そこに居るんだろ？アタシたちはレリックを届けねえといけねえから、あとの処理は任せたぞ。」

杏子はフォワード陣に後始末を一方的に頼むとリーフィアを連れて、本局に戻って行った。

第18話

ミッドチルダ首都クラナガン沿岸部の海上。蟻のように沸き上がる航空機型ガジェットを金色の鎌で薙ぎ払う1人の女性が居た。

名前はフェイトⅡⅢハラウン。

“金色の閃光”という2つ名を持つクロノの義妹であり、なのはの一番古い魔法関係者。

「はあああああ!!」

くザシュ!!ドカーン!!く

「くつ 数が多すぎる!!」

フェイトは大体20機ぐらいのガジェットを破壊しているが、ガジェットの数減ることを知らない。

しかも、10機を越えた辺りから幻影も交じっているのでフェイトの魔力はかなり減らされている。

その時、フェイトの前に円形の転送陣が開かれて2人の援軍が現れた。

「いきなり敵陣の真ん前に転移って何考えてるんですか!？」

転移完了早々になのはに抗議するトリシューラ。

「トリシューラの実力を信じてるだからだよ。」

「う……………（それは卑怯だよ!!）」

笑顔でそんなことを言われると言い返せないトリシューラ。

「さあ、来るよ!!」

「うん!!」

なのははレイジングハート（エクシードモード）を構えてその先端に魔力を集束し、解放する。

「デイベインバスター!!」

レイジングハートの先端から放たれた桜色の奔流は瞬く間にガジェットを飲み込んだ。

「よっしゃ、こっちも盛大な花火を上げようじゃないか!!」

【演算処理とかするのは私だけどね!!】

トリシューラが手を前に突き出すと六枚の魔法陣が戦闘空域のあちこちに無造作に展開される。

そして、魔法陣一枚一枚がそれぞれ魔力を集束した。

「アブソリュートバスター!!」

六枚の魔法陣から直射型砲撃魔法が一斉に発射される。かするだけでガジェットは翼の方がみるみる氷っていく、

「エ、Sランクスキル“全方位同時多重攻撃スキル”……………」

フェイトは驚いたように呟く。何故なら、砲撃魔導師の代名詞とも言える高町　なのはでさえ使えないスキルを目の前の少女がやってのけたからだ。

「ブリーナク!!」

【わかった!!】

海水が巻き上げられてトリシューラの右手に水を圧縮した剣を作り出す。

「なのは!!」

トリシューラの呼び掛けになのははコクリと頷くとなのはは高度を上げて回避する。

「ヴォーパルセイバーああ!!!!!!」

右手を真横に振り払った瞬間、手前の方に居た航空機型ガジェットは真つ二つに一刀両断された。

その切断面は鋭利な刃物で切り裂かれたかのように平らになっている。

【ヴォーパルセイバー】はウォーターカッターの原理を用いたブリューナク最強の魔法である。もともと、下手をすると相手の腕を切り落としてしまう可能性もあるので容易には使えない。

「降り注げ　流星。シューティングスター!!」

【ヴォーパルセイバー】の攻撃を免れたガジェット群に向かってなのは魔力弾が流星の如く降り注いだ。【シューティングスター】はガジェットの装甲を突き破り、破壊していく。

幻影も交じっているはずなのだが、広域殲滅魔法に匹敵する広範囲高威力攻撃の前には全く意味を為さなかった。

「殲滅完了。レイジングハート、六課のヘリの現在地は？」

《クラナガン上空を聖王教会方向に真つ直ぐ向かっています。》

「ありがと。トリシューラ、ヘリの方に向かうよ。もしかしたら、別動隊がヘリの方に向かってるかもしれない。」

「アイサー!!!」

「フェイトちゃんも早く行くよ?」

「う、うん……………」

全く見せ場がなかったフェイトはトリシューラ・なのはの後に続くように機動六課のへりを追い掛けた。

レリックを本局に届けに来た杏子にとある連絡が届いた。

「はあっ!? せっかく捕まえた犯罪者をみすみす取り逃がしただど!?」

「そうらしいです。何でも物質を通り抜ける能力を持った者に連れて行かれたそうです。」

“物質を透過する魔法”……………確か、シスターシャツハも使えるか

ら見せて貰った記憶があるが、結局原理とか術式はわからなかったんだよね。

「まあ、アタシらの仕事は犯罪者の逮捕じゃなくてレリックの回収だからな。関係ねえ。」

全く……最後の最後で油断するから、そんなことになるんだよ。

「えーと…… B 5の棚は……」

アタシとリーフィアは地上が慌ててる時に何をしてるのかというところ……聖剣デュランダルだ。

ジャンヌが概念武装の一覧を見つけて、その中で母さんが最初の方に作った物を選んだ。それが聖剣デュランダルだ。

聖剣デュランダルは他の概念武装とまったく違う。このデュランダルには“絶対に折れない”“魔力を任意で氷に変換する”という2つの概念を乗せた武装だ。

「キョウコ、これではないですか？」

「ん？ああ、確かにコレだ。」

杏子は B 5という表札？が貼られた棚に立て掛けられた鞘に入ってたままの西洋剣を降ろした。

「キョウコ、あの扉は何ですか？」

「ん？」

リーファイアが指差した先には何重にも鎖が掛けられ、ゴツい南京錠で鍵が掛けられた厳重過ぎる扉があった。
確か、あの先は……………

「アタシも詳しくは知らねえが……………あの先には“魔具”っていうロストログアが封印されているらしい。」

「“魔具”？」

「神具の対になる物、としかアタシも知らねえ。それよりもジャンヌが待つてる。」

「わかりました。」

アタシたちは聖剣デュランダルを持ってこの特殊武器庫から出た。

特殊武器庫前の通路でジャンヌは待っていた。「一緒に入れば良かったのに」と思つかもしれないが、ジャンヌは訓練で流した汗を落とすために大浴場に行って、ついさっき戻ってきただけなのだ。その証拠にハニーブロンドの髪がほんのり湿っている。

「ジャンヌ、取ってきたぞ。」

「ありがとう、キョウコ。」

ジャンヌは杏子から聖剣デュランダルを受け取り、デュランダルを鞘から抜いた。

すると、洗練された美しい銀色の刀身が露になった。片手で持つには大き過ぎるデュランダルは元々両手で持つことを前提としたように柄が普通の物よりも長い。

「実際に見てみるとそれ以上に美しく感じますね。」

ジャンヌはデュランダルを鞘に戻すとそのまま腰に差した。どうやら気に入ったようだ。

その時、なのはから通信が届いた。

「杏子。もう本局に戻ってる？」

「ああ。戻ってるけど？」

「じゃあ、頼みがあるの。機動六課のへりを護衛して欲しいの。」

「何でだ？」

「空中戦力は殲滅したけど、多分敵の狙いは地下かへり。地下の方にはヴィータちゃんが居るから大丈夫だけど……へりの方には護衛は居ないの」

確かに敵の目的がわからない状態で護衛が居ないのは危険すぎるな。仕方ねえ。手が空いてるのはアタシだけだしな。

「なのはさん、私に行かせて貰えないでしょうか？」

ジャンヌが名乗りを上げた。

「ジャンヌ？でも、貴女は武器が……………」

「武器なら、ついさっき手に入りました。」

ジャンヌは通信モニター越しに映るなのはにデュランダルを見せる。

「デュランダルを選んだんだね。わかった。特務零課部隊長として、ジャンヌ＝ダルクの出撃を許可します。」

「ありがとうございます！！」

「杏子、トランスポートまで案内して座標を打ち込んであげて。」

「わかった。」

アタシはジャンヌを連れて本局の一番近いトランスポートに向かった。

「見えた!!」

「良かった……ヘリは無事みたい。」

「た、高町一等空尉!!市街地にて大型の魔力反応感知!!推定カイバースランク!!」

ヘリに追い付く寸前に入ったロングアーチスタッフ ルキノより入った緊急連絡。その刹那、オレンジ色の閃光がヘリに向かって一直線に進んでいった。

「そんな……」

フェイトは啞然として呟く。対して、なのはとトリシューラは笑みを浮かべていた。

「大丈夫だよ。私の部下が間に合った。」

煙が晴れていくと……未だに動き続けている機動六課の輸送ヘリとその前に佇むハニーブロンドの少女が居た。

赤いラインが入った半袖の白い衣装に銀色の胸当てとガントレットを装備した騎士甲冑を纏う少女。

「こちら、特務零課所属ジャンヌ・ダルク。輸送ヘリの防御に成功しました。」

第18話（後書き）

リーフィアに続き、今回の見せ場はトリシューラとジャンヌの二人でした。

書いてて思ったが、ジャンヌよ、お前はどこの30代目だ。まあ、そうしたのは私ですけどね

第19話

くピコピコピコ

本局のトランスポートにたどり着いた杏子はジャンヌをトランスポートに入れるとすぐに座標入力 시작했다。

空間投影型キーボードを叩く手は軽やかに素早く転移座標を打ち込んで行く。

「転移場所はヘリのちょうど真上に設定したから、騎士甲冑を着つけよ。」

「はい。」

銀色に近い白色光がジャンヌを包み込み、騎士甲冑を形作る。

西欧の女騎士を思わせる銀色の胸当てと銀色のガントレットを白を基調とした衣装の上から装備したジャンヌが居た。

「転送する。くれぐれも怪我すんじゃないぞ?」

杏子の言葉に対してジャンヌは「はい。」と短く笑顔で答えた。

その刹那、ジャンヌは近未来的な設備の部屋から青空が広がるミッドチルダの空に転移した。

SIDE ジャンヌ

「此処が……ミッドチルダ」

これがこの世界の魔法がもたらした繁栄の形。私が生きた時代とはまったく違う世界。

半月ほど滞在した見滝原市も繁栄してましたが、ここはそれ以上に繁栄してますね。

空中に投げ出されて重力に引かれて落下していくジャンヌは空から見下ろした風景に酔いしれていた。

「おっと。自分の仕事を忘れる所でした。」

目を閉じて集中を極限状態まで高める。失敗は許されない。イメージするのは……強く美しく気高い純白の翼！！

カッと目を見開くジャンヌ。すると、ジャンヌの背中に銀色の粒子が舞い、その粒子が1つに集まり、形を為す。

くバサッく

ジャンヌの背中に現れたのは純白というより銀色に煌めく大きな天使の翼だった。

リーフィアは補助系統の魔法を優先したようにジャンヌは飛行系統の魔法を優先した。背中の翼は飛行魔法の一種であり、魔力で構成されている。飛行魔法で重要なのは空を飛ぶイメージであり、キリストンだったジャンヌにとって、イメージし易いのは天使の翼だった。このような形態になった。

「よつと。」

翼を羽ばたかせて体勢を整えますが、やはり操作が難しいですね。でも、イメージし易い飛行魔法の形が私にとって天使の羽なんですよね。まあ、神様などもうどうでもいいです。神様は困ったときに私たちを助けてくれない。だから、私は神様を信じない。つと、こんなどうでもいいことを考えてる場合ではありませんね。

「護衛対象のへりはアレですね。」

うん？今、建物の上で何かが光ったような……………

ジャンヌの脳裏に嫌な予感が迸る。そして、その予感はおレンジ色の閃光となって現実に降臨した。
オレンジ色の閃光はそのまま機動六課の輸送ヘリに向かっていく。
輸送ヘリを守る可能性があるのは、ジャンヌだけ。

「はあ！！」

私は背中に生えた【エンジェルフェザー】を思いっきり羽ばたかせて、ヘリと砲撃の間に割り込んだ。

私が割り込んだ時には砲撃がもう目の前に迫っていました。デバイスの無い私が1から術式を構築していたのでは間に合わないでしょう。しかし、私にはあるスキルがあります！！

「トライアングル・シールド！！」

ジャンヌが手を翳すと砲撃を遮るように二枚の三角形のシールドが逆さまに展開される。所謂、六芒星の形だ。

ジャンヌのシールドはオーバーSランク相当の砲撃を揺るぎもせず
に受け止めている。

ジャンヌが得意とするのは治癒魔法。そして、ジャンヌの取り柄は
“高速術式展開”。その名の通り瞬時に術式を組み上げる（ただし、
構成を理解しているモノに限る）特殊なスキル。それゆえに、ジャンヌは
デバイスを持たなくてもタイムラグ無しに術式を組み上げることができる。

「確かに高威力の砲撃ですが……………我が部隊長お墨付きの私のシールドは破れません！！」

結果、ジャンヌのシールドは高威力の砲撃を見事に防ぎきる。

「こちら、特務零課所属ジャンヌⅡダルク。ヘリの防御に成功！！」

さっきの砲撃主は……あそこですね。まったく、直射型の砲撃の後はずぐに退散しないと居場所を特定されますよ？

まあ、不意打ちという騎士の道理に反することを行った輩には……お仕置きしないといけませんね。

ジャンヌは腰に携えたデュランダルに手を掛けて魔力を籠めていく。デュランダルに備えられた概念がジャンヌの魔力を冷気に変換する。デュランダルの鞘は特別なモノなので冷気によって凍ることはない。

「ブリザード・ブレス（氷竜の吐息）！！」

デュランダルを抜刀した瞬間、冷気の斬撃が飛び出した。ジャンヌが放った冷気の斬撃はジャンヌが狙ったビルに行った。

そして、《ブリザード・ブレス》がビルに接触した瞬間、ビルの屋上は凍り付いた。

ん………これだけ離れては当たったのか当たってないのかわかりませんね。

『ジャンヌ』

『なのはさん？今、何処に居るんですか？』

『砲撃主を追ってる。こっちのことはいいから、ジャンヌはヘリの護衛の続けて。』

『了解しました。』

部隊長に任せておけば大丈夫でしょう。

しかし、ジャンヌの予想を裏切り、犯罪者たちは取り逃がしてしまった。

SIDE NANOHA

（聖王教会付属病院）

機動六課が保護した少女は聖王教会付属病院に搬送された。ジャンヌもなのも聖王教会付属病院の休憩室で休息を取っていた。

「初仕事お疲れ様、ジャンヌ。」

「ええ。少し不安もありましたが、なんとかまりました。」

「初めてにしては様になってたよ。」

「ありがとうございます。」

なのはは自動販売機に売っていたコーヒーを、ジャンヌは自動販売機に売っていた紅茶をそれぞれ口に含む。

「犯罪者たちのことは何かわかったのですか？」

ジャンヌの質問に私は首を横に振るしかできなかった。わかったのは、砲撃主と幻術使いが使ってエネルギーが魔力とは別系統のモノだってこと。スカリエッティとの関連性も現在調査中。

「ジャンヌはもう戻っていいよ。後は機動六課の仕事だから。」

「なのはさんはどうするんですか？」

「ちょっと学院の方に用事があるの。」

SIDE KYOUKO

特務零課の初陣から数回の夜が明けた。特務零課副隊長である高町杏子もザンクト・ヒルデ魔法学院に1ヶ月と数週間振りに登校した。

「おはよう」

「あ、杏子」

アタシの顔を見るなりアタシに抱き着いて来ようとするロビン。その頭をアタシは片手で思いつきり掴んだ。

「む。そこは優しく抱いてよ」

「アタシに同性愛者の趣味はねえ」

「杏子はマザコンだからね」

く。ピシッく

ロビンフットの一言に暖かいはずの杏子の空気が急転直下。まるで氷のような空気を纏った。

笑顔を浮かべているが、目は笑っていない。さらに言えば、こめかみがひくついている。

「……………」

杏子は無言でロビンフットの頭を締め付ける指の力を強めて、アイアンクローを掛けた。ちなみに、魔力強化付き。

「痛い痛い！！からかってごめんなさい！！だから、許して！！！」

「そろそろ勘弁してあげてください。」

アテナは苦笑いを浮かべてながら、停止を促した。杏子は「わかったよ」と呟きながら、ロビンフットを解放した。

「うへへ酷い目に合った」

「自業自得だ、馬鹿」

そう言いながら杏子は自分の席についた。それに続くようにアテナもロビンフットも自分の席に着席した。ちなみに、アテナの席が杏子の左隣で、ロビンフットの席が杏子の前だ。場所は中央の最後尾。

「それにしても、今日はクラスが騒がしいな。」

アタシのクラスは結構大人しく、静かなクラスだ。だけど、今日はクラス全員に落ち着きがない。

「噂だけど、このクラスに転校生が来るらしいの」

「転校生？こんな時期にか？」

もう二学期が始まって数週間経ってるぞ？普通、二学期の最初の日だろ。

杏子は長期任務の影響で他の生徒よりも長く夏休みを取る必要があった。優等生である杏子は呆気なく夏休みの延長をもぎ取り、2週間ほど延ばして貰っている。その分、杏子に渡された夏休みの宿題は他の生徒とは難易度が違うモノを渡されたが……

「うーん：本当は二学期開始と同時に転校してくる筈だったんだけど、諸事情で遅くなったらしいよ？」

「ふーん。まあ、アタシには関係ないけどね。」

「編み編み 編み編み」

杏子とアテナが転校生について話している間、ロビンフットは杏子の長い髪を三つ編み状に編んでいた。

くガラガラく

「席につけ。ホームルームを始める」

教室の扉を開けて担当教諭のエクステリア「エルヴィスが入って来ると同時にクラス全員が大人しくなった。ロビンフットも杏子の髪を編む手を止めて、前を向いた。

「さて、ホームルームに入る前に紹介する奴が居る。最近、噂になっていた転校生だ。」

エクステリア教諭の言葉に反応してクラスが騒がしくなる。

「入って来い」

エクステリア教諭が命令すると扉が開き、噂の転校生が入って来た。クリーム色の少しパーマの掛かった長い髪に濃い青色の瞳を持つ少女はクラスの男女問わず魅力した。

唯一、杏子は口を酸欠状態の金魚のようにパクパクさせていた。

「皆さん、初めまして。今日より皆さんと一緒にクラスになりました“リーファイア”ワルプルギス”です」

ザンクト・ヒルデ魔法学院に転校してきたのは、なんと特務零課所属の中で最強とも謳われる少女だった。

第20話

SIDE リーフィア

「皆さん、初めまして。今日より皆さんと一緒にのクラスになりました。リーフィア＝ワルプルギス」です。」

学校に通うことになるのは初めてです。魔女になる前は貧しい身分でしたし、生活するので精一杯でしたから。

ミッドチルダに魔法学校があるのを聞いた私はなのはさんに頼み込んで通わせて貰えるようになりました

……まあ、色々と苦労しました。主に勉強面で。

おっと、私のことばかり喋って居ても仕方ありませんね。

「ワルプルギスはこんな形だが、れっきとした14歳だ。」

酷いです。（泣）

確かに私は童顔だし、ぺったんこだし、身長もキョウコと同じくらいだけど……

「ワルプルギスの席は………ヴィルヘルムの隣がいいだろ。」

「わかりました。」

私はエクステリア教諭が空けた席に座りました。

「ホームルームは以上だ。」

そう言うエクステリア教諭はホームルーム終了の合図を待たずに教室を出ていった。さて、転校生が最初に味わうクラスからの洗礼とは何だろうか？

転校生の初登校、教師の不在。この状態でやる事と言えば……

「ねえねえ、リーフィアさん。どうして転校が遅れたの？」

「転校つてことは教官を倒したの？」

「その髪つて元々？」

リーフィアは“質問攻め”の洗礼を受けた。

リーフィアの周囲を囲むように生徒が居るので、逃げ出すこともできない。

「そんなに一度に質問されても答えられませんよ。時間はたっぷりあるのですから、質問は一人ずつお願いします」

リーフィアは苦笑いを浮かべて転校生の登場でテンションが上がっているクラスを取りまとめる。

「じゃあ、私から。リーフィアさんの転校が遅れたのはどうして？」

「転校の手続きや転校に当たったの準備が思ったより手間取って…

……」

本当はなのはさんが騎士カリムに手を回してくれたおかげですぐにでも転校できるはずだったんですが……魔法に関する知識ゼロ、この世界に関する知識ゼロの状態で編入できるはずありません。この数日でアクセリオンさんに可能な限り知識を叩き込まれました。

「今度は僕だ。リーフィアさんが転校して来たってことは教官を倒したの？」

「はい。」

ザンクト・ヒルデ魔法学院に編入するには最低限の魔法知識と魔法技術が必要となる。魔法技術を確かめるためにザンクト・ヒルデ魔法学院の教師を相手に模擬戦を行う。リーフィアもこの模擬戦を行い、見事に勝利を納めた。

閑話休題

リーフィアの返答にクラスから驚きの声が上がった。編入試験模擬戦の相手するのは学院内でも上位に入る実力者だ。それに勝利したとなれば、驚かないはずがない。

「次は私だよ？リーフィアちゃんの髪って元々その色なの？」

「はい。」

やっぱりクリーム色の髪は変なんでしょうか？特務零課では、結構個性的な髪色の子も居ましたし……

「何時まで遊んでる？もう一限目が始まるぞ。さっさと席に戻れ！」

職員室に戻ったエクステリア教諭が戻って来ました。どうやら、最初の授業は彼女が担当のようです。

S I D E K Y O U K O

く 昼休み く

「たく。急に編入してくるんだから、ビックリしたぜ。」

昼休み。

杏子とリーフィアは中庭のベンチで昼食を摂っていた。杏子は何故か団子にかぶり付いている。リーフィアは普通のお弁当だが……

「てつきりなのはさんから聞いてる思ってたから。というか、キョウコ。」

「もう少し昼食らしい物を食べませんか？」

む、アテナと同じ事を言う奴だな。

「アタシの場合は母さんに負担を掛けたくないから、軽食で済ませてるんだよ。」

「自分で作ればいいのでは？」

「生憎とそこまでして食べようと思わねえよ。母さんが休みの日はちゃんと食べてるし」

「まあ、それは置いといて。なのはさんから私が編入するのを聞いていないという事は私が高町家に厄介になることも聞いてないのですか？」

「ああ。」

母さんから誰かが下宿することになるとは聞いてたけど、リーフィアだとは思わなかったな。まあ、部屋はかなり余ってるしな。一人暮らしたったはずなのに何であんだけ広い家を買ったんだろ？

「あの人もイタズラ好きなんですね。」

うん……ちょっと違うような気がするな。母さんは家族とかにしかそういうドッキリを仕掛けようとしない。そこら辺のしょっちゅうイタズラを仕掛けようとする豆狸とは違うからな。ちゃんと節度を守ってるし。

「それはそうと、キョウコ。私のデバイスの件はどうになりましたか？」

「あゝ。悪い、まだ素材が見つかってないんだ。」

前回の任務でリーフィアの双剣型デバイスはリーフィアの魔力出力に耐えきれずに半壊してしまった。

アタシはリーフィアの魔力出力に耐えることが出来て、炎や電気に強い素材を見つけなければならなかった。だけど、そんな都合の良い素材なんて見つかるわけがない。

今のリーフィアの魔力量は豆狸……もとい、八神部隊長と同じくらい。八神部隊長でも何個も試作デバイスを壊して、ようやく完成したらしい。

「そうですか……一応、私の方でも調べてみたのですが……」

リーフィアは少し残念そうな表情を浮かべた後、空間投影型ディスプレイを展開した。

おそらく、リーフィアが自分で調べたであろう素材の名前がびっしりと特性も纏めて表示されていた。

「よく短期間で調べられたな。」

「“ダイオラム魔法球”を使いましたから。」

「“別荘”を使ったのか!？」

「はい。勉強の時も使いました」

「道理で……。こんなたった数日で編入試験に必要な知識を吸収できるなんておかしいと思っただぜ。」

“ダイオラム魔法球”というのは、ボトルシップのような形をした魔法具で外と中の時間をずらすことができる。要するに竜宮城の逆バージョンだ。

杏子もこの“ダイオラム魔法球”の中で数年以上過ごしたこともある。もともとソウルアクセサリーの特性上、成長することがないの姿かたちはまったく変わらない。

元々はなのはが自分の心の傷を癒すために「誰にも邪魔されない場所」を目的としてモノ。

「話を戻しますね。私の最高魔法放出量に耐えられる素材となると龍種の素材ぐらいしか……。」

龍種の素材……。ねえ。確かにリーフィアの最高魔法放出量に耐えられるだろうが、肝心の素材がな。

まず、龍種は普通に強い。弱齡の龍なら、倒せるが、古龍並の奴なら、一人で絶対に勝てない。

それに、龍を信仰するアルザスの隠れ部族　ルシエ族が黙っているはずがない。

「まあ、母さんなら、心当たりがありそうだから、聞いて見るか？」

「はい。」

その頃、なのはは……………

「すいません、シグナムさん。車出してもらって」

「気にするな。私も聖王教会に用事がある。そのついでだ。それに、車はテストロッサの借り物だ。」

なのははシグナムの運転する車に乗って数日前に機動六課が保護した少女が入院している聖王教会付属病院に向かっていた。

「検査に随分と時間が掛かったな。」

「その少女が泣き叫んだり、逃亡したりで色々大変だったそうです。」

「騎士シグナム！！申し訳ありません！！
例の少女が逃げてしまいました！！」

騎士カリム専属の護衛であり、シグナムのもう一人のライバル、スターシャッハから通信が届いた。

「こちらにもう少しでこちらに到着します。それまで待っていてください」

「わかりました、騎士なのは」

プツンツという小さな音を立てて通信が切断された。

「少し急ぐぞ」

「はい。」

シグナムが車のアクセルを踏みしめると車はみるみる加速した。

S I D E N A N O H A

「すみません、騎士なのはに騎士シグナム。検査の途中であの子が逃げ出してしまつて」

「外には出れないはずですよね？」

「はい。敷地外に出る門の回りには警備の者が常に待機してますからね。」

あんな小さな体躯で敷地を囲う高い塀に登れるわけがないし、転移魔法も同じ理由で使えるわけがない。

ということとは……………まだこの敷地内に居る可能性の方が高い。

「シスターシャツハとシグナム副隊長は病院の中を。私は外を探してみます」

2人は頷き、病院内部に入って行った。

「さてと……………迷子の仔猫は何処にいるのかな？」

確か、試作品の“アレ”が一個だけ残ってたはず……………

なのはは特務零課の制服（魔法薬や魔法具を収納できるコートタイプ）から一本の水色の液体が入った小瓶を取り出した。

「これを地面に垂らして……………」

小瓶の蓋を開けて中身の液体を地面に垂らすと円形の鏡のように周りの風景を映し出す水溜まりが出来た。

「搜索対象はこの敷地内にいる五歳ぐらいの少女」

私が搜索対象を設定すると水溜まりはその少女の姿を映し出した。地面に垂らした液体は“遠見の鏡”。一回だけ半径30KM圏内の搜索対象者の姿を映し出してくれる結構便利な代物。周りの風景を見る限り……………此処は中庭かな？

「取り敢えず行ってみないとね。」

なのはは病院の中庭に向かって走り出した。“遠見の鏡”を垂らし

た地面は完全に乾ききっていた。

「ここら辺に居ると思うけど……………」

くがさがさく

「……………ん？」

中庭の茂みの中から探していた少女が出てきた。
ジャンヌと同じハニーブロンド色の髪に翡翠と紅玉の虹彩移植。着ているのは当然病人服でウサギのぬいぐるみを大事そうに抱き抱えている。ちなみに、警戒心丸出し。

「こんな所に居たんだ。探したよ？」

なのはは少女にゆっくりと近付いて行くが、少女も一歩一歩後退りする。

そして、少し泣きそうな表情になっている。

「怖くない。私は何もしないよ。」

「……………」

少女と目線を合わせて優しく声を掛ける。すると、少女の警戒心が徐々に薄れて行った。

逆巻け　　ヴィンデルシャフト！！

いつの間にかなのはと少女の間に臨戦体勢のシャツハが割り込んだ。

な・ん・でこんなタイミングで割り込んでくるのかな！？

怒り半分、呆れ半分。なのははシャツハの行動に頭を抱えた。そんなことはお構い無しにシャツハは少女にジリジリと近付いて行く。

少女の顔が再び泣き顔に変わって行く。

くヒュンッ！！く

なのははシャツハを蹴り飛ばして少女の視界から消し去る。そのまま少女に近付き、少女の視線に合わせて笑みを浮かべる。

「私、高町　なのはっていうの。貴女のお名前、教えてくれる？」

「……………　　ヴィヴィオ」

第20話（後書き）

最後の方が少し無茶苦茶になってしまい、すいませんでした。

第21話

特務零課隊長、高町　　なのは。

時空管理局が誇る屈指の実力を持つ砲撃魔導師であり、ミッドチルダ式の使い手である傍ら古代ベルカ式も使えるオールマイティーな魔導師であることで有名。

永遠の命を偶発的に手に入れた彼女は如何なる強敵にも屈せず、闘い続ける不屈の闘志を持つことから“不屈のエース・オブ・エース”と謳われている。

しかし、その高町　　なのはは非常に困っていた。

「行っちゃだ〜〜!!」

機動六課に幼い子供の泣き声が響き渡る。

困ったな〜。機動六課が保護した少女、ヴィヴィオを病院から連れ出して来たのはいいけど、私の足を離そうとしてくれません。ううう……騎士カリムに呼び出されて聖王教会に行かないといけないのに。

「な、泣かないでよ〜」

「ふえ〜ん!!」

スバルが話し掛けると泣き声がより一層大きくなる。フォワードたちがヴィヴィオを慰めようとするが、まったく効果なし。逆に悪くなっているような気がする。

「困ったな。こんなに小さい子の相手なんてしたことないし……」

私は末っ子だったから、相手するよりもされる側だったし……うう。

「おいおい。一体何してるんだよ。」

なのはが心の中でうんうん唸っていると学校帰りの杏子とリーフィアが現れた。
学校帰りなので二人ともザンクト・ヒルデ魔法学校の制服を着ている。

『実は……病院から連れ出して来たただで、離れてくれなくて』
『なつかれたわけか……』

『うん。これから聖王教会の方に行かないといけないのに……』

『はあ。わかった。私がなんとかするよ。』

杏子は魔法陣を展開した。すると、杏子の姿が光に包まれてみるみる小さくなっていく。これって変身魔法？

「やあ」

「「ぶっ!!」」

杏子が変身した姿を見たのはとリーフィアは思わず吹き出してしまった。

杏子が化けた相手は……頭のてっぺん生えた角の付け根からウサギの耳に似た耳が垂れた未確認生命体。宇宙の存続なら、どんな犠牲も異図はない感情を持たない存在。インキュベーターこと、キュベえ。

「僕はキュベえって言うんだ 君の名前は？」

おまけにインキュベーターに声まで似せてる。けど、感情があるからこっちの方が可愛げはあるかも。

「ヴィヴィオ……」

「そっか、ヴィヴィオっていうだね。じゃあ、ヴィヴィオはどうしてそんなに悲しい顔をしてるのかな？」

ヴィヴィオは無言で私の制服の裾を強く握る。

「かあ…なのはが何処かに行くのが嫌なんだね？」

「……………うん。」

「でもさ、ヴィヴィオが我が儘ばかり言ってるとなのはも困っちゃうよね？」

「……………うん。」

「なのはには少し行かないといけない場所があるんだ。だから、僕と一緒に留守番してようよ」

「……………うん。」

キュウベえに化けた杏子に諭されてヴィヴィオはなのはの服の裾を離した。

相変わらず、今すぐにも泣きそうな表情を浮かべている。そんな泣きそうな表情を向けられるとなのはもやるせない気持ちになるが、ぐっと堪えた。

「ごめんね、ヴィヴィオ。すぐに行つてすぐに帰ってくるから、それまでキュウベえと一緒に留守番しててね？」

「……………うん。」

「じゃあ、杏子。ヴィヴィオのこと、お願いね？」

「ああ。さっさと行つてこいよ。」

「うん。」

なのはは駆け足でヘリポートに向かった。ちなみに、この様子は部隊長の八神はやてに目撃されており、ヘリの中からわれたのは完璧な余談である。

機動六課隊舎を飛び立ったのはたちは聖王教会に一直線に向かった。
なのはたちが到着する頃には、クロノもカリムもすでに到着していた。

「急に集まって貰ってごめんなさいね。今回集まって貰ったのは“予言”についてなの。」

やっぱり……というか、当然だね。騎士カリムが私たちを集めることなんて“予言”以外に考えられない。

“予言”っていうのは、騎士カリムの希少能力『預言者の著書』で書き出された予言書のこと。難解な古代ベルカ語で書かれてる上に詩文形式で書き出すから、解釈がとっても難しい。私も一応古代ベルカ語は読めるよ？少し鬱になってた時に気を紛らわすために覚えた。

「フェイトには話してなかったな。機動六課が設立されたのは少数

精鋭部隊の実験例というのが表向きだが、本当は騎士カリムの予言書に記されていた管理局システムの崩壊を阻止するためなんだ。」

私の隣で疑問符を浮かべていたフェイトちゃんにクロノくんが少しはしよって説明してくれます。

そう言えば、フェイトちゃんは騎士カリムに会ったことがなかったの。

「そして、その“予言”に大幅な変更がありました。」

カリムから白いA4サイズの手紙を受け取り、目を通す4人。手紙には、改訂版の予言を訳した物が書かれていた。

無限の欲望と古き結晶が集い交わる地にて大きな戦が起こらん。

機人の姉妹は己の自由のため 無限の欲望は己の欲望のため

自らが生み出した機兵を率いて法の塔を討ち滅ぼさんとす

対するのは絶望より這い上がりし戦乙女たち

不屈の翼は彼の戦乙女を率いて欲望の軍勢を討ち滅ぼさん

戦の最中 紅の姉妹が世界を越えて再会する

片割れは歓喜の声を上げ 片割れは悲痛の声を上げる。

「何時もの予言よりも長いな。」

「それに、何時もの予言より詳しいで」

「……………」

なのはは予言の模写が書かれた用紙とにらめっこしていた。その顔はかなり真剣な眼差しだった。

なのはが目を向けているのは最後の二節だ。

“紅の姉妹”……………もしかしくなくても、杏子と響のことだよね？この予言が成就するなら、響もこのミッドチルダに来てることになる。でも、最後の一節はどういうことなの？“片割れは歓喜の声を上げ、片割れは悲痛の声を上げる。”これは一体何を意味してるの？

「……………は。な…は。なのは！！」

「は、はい！？」

思考の海に沈んでいたなのはの意識はフェイトの呼び掛けによって強制的にサルベージされた。

「どうしたの？少し上の空だったよ？」

「大丈夫。少し……………考え事してただけ。」

「騎士なのは、貴女が連れ出した少女…ヴィヴィオの様子はどうでした？」

「特に変わった所はありませんでした。普通の子供です。」

「そうですね……。実は、数日前に遺伝子検査を行った結果、ヴィヴィオのオリジナルが判明しました。」

円卓の中央に空間投影型ディスプレイが展開されて1人の女性が映し出された。

この聖王教会の所々に飾られている肖像画と同じ人物だ。

「“オリヴィエ”ゼーゲブレヒト”。古代ベルカの戦乱を自分の命と引き換えに終結させた最後のゆりかごの聖王です。」

つまり、ヴィヴィオは聖王家の直系になるのか……。これを聖王教会の過激派が知ったら色々面倒だね。

聖王教会というのは一枚岩ではない。管理局に従属している状態を快く思わない者も数多く居る。

逆に、カリムのように今の状態に満足？している者たちも数多く居る。前者を過激派、後者を穏健派とお互いに称しており、穏健派のトップは騎士カリムだ。

「そこで。騎士なのはの人格を見込んでお願いがあります。」

「？」

うわゝ……結構遅くなっちゃった!!

機動六課の廊下をなのはは駆け抜けていた。時刻は6時を回った所で若干太陽が沈みかけている。

なのはは通路を歩く局員に杏子たちが居る場所を聞いて、その場所に向かっていた。そして、その場所にたどり着いた。

ゝコンッ コンッゝ

呼吸を整えた後、少し弱めに扉をノックする。すると、扉が勝手に開く。

「ごめんね、待たせちゃって」

「大丈夫だよ。それとあんまり大きい声は勘弁してくれ。」

杏子の隣には掛け布団を掛けられて気持ちよさそうに眠るヴィヴィオの姿があった。

「杏子もリーフィアもありがとね。」

「いえ、小さい子供の面倒を慣れてますので。」

「リーフィアの部屋の準備はしてあるから、帰ろっか。」

「おいおい。この子はどーすんだよ?」

「ヴィヴィオも連れて帰るよ。実は、騎士カリムにヴィヴィオを引き取ってくれないか?って言われてね。」

杏子とリーフィアの動きが驚きのあまり完全に停止した。まあ、私も驚いたよ。騎士カリムに“もう1人、養子縁組をする気はありませんか?”って、言われた時は。騎士カリムは他の所に預けるよりも私に預けるのが最善って言うだけ?

「それで……………引き受けたのか?」

杏子の質問に私は首を横に振った。

「1週間一緒に過ごした後でまだ私を求めるなら、引き受けるって、返答してきた。」

「アタシは別にいいけどな。元々妹も居たし。」

響のことは言わないでおこう。響が本当にミッドチルダに来てるとは限らないし。

「あの……………なのはさん。アルザスの土地以外で竜種が居る場所を

知りませんか？」

「一ヶ所だけ心当たりがあるけど、あの竜は……………」

「何か問題があるのか？」

「まあね。実際に闘ってみればわかるよ。」

「「？」」

なのはの返答に杏子とリーフィアは疑問符を浮かべた。その2人を無視して、なのはは眠ったままのヴィヴィオを抱えると機動六課をあとにした。

第22話

SIDE リーフィア

ヴィヴィオを高町邸で一時的に保護することになってから数日。高町家に下宿することになったリーフィアと1人娘の杏子を連れて、なのははある場所に向かっていた。

3人が飛行しているのは、クラナガンから遠く離れた島々（といっても飛行魔法で数10分ほどだが）の上空。眼下の大地には青々と緑が生い茂る島もあれば、逆に草木一本生えていない火山の島もある。

「皆、着陸するよ。」

えーと……私の見間違いじゃないなら、この真下はマグマ煮えたぎる火山なんです……。まさか、此処に着陸しろとでも？

「かなり熱いから、騎士甲冑の温度調整忘れないでね。」

……嫌な予感が見事に的中しましたよ！？少し勘づいてましたけどね！！

でも、“連れて行って”と言い出した本人が行かないわけにはいかないのです、騎士甲冑の耐熱性を上げて火山の河口に降りていきました。

「いくら騎士甲冑の耐熱性を可能な限り引き上げても、摂氏1万度を越えるマグマの中じゃあ、堪えるな。」

「だね。」

「あつっ……」

騎士甲冑は雪山でも砂漠でも活動できるように温度調整機能が付いています。にもかかわらず、額から汗がだらだらと流れて来ます。騎士甲冑を解除した瞬間に死にますね。

「なのはさん。目的の竜は何処に居るんですか？」

「あそこ」

なのはさんが指差した先にはマグマが滝のように流れ落ちている場所です。

訳がわからないよ。（キュウベえ風）

くグルル……く

「？杏子、何か聞こえなかった？」

「聞こえた。獣の唸り声みたいなのが……………」

くグオオーオン！！！！く

「来た！！」

ドバーンツという音を立てて四足歩行型のドラゴンがマグマの滝を突き破って出現した。

鈍く黒く煌めく赤い鱗に大きな身体を支えるために発達した強靱な四本の足。背中には竜の象徴で大きな二枚の翼、頭にはトサカのような天すらも貫く二本の角。高さはなのはの身長の二倍ぐらいで全長はもつと長い。

ミッドチルダの人々が絶対に手を出さない最強の竜。なのはたちですら、相手を撤退に追い込みしかできなかった古の龍の名は……………

煌黒龍“アルバトリオン”

「「ええ」……………」

私と杏子は開いた口が塞がりません。

目の前に居る龍はかなりの貫禄を感じます。千年以上は生きてるんじゃないでしょうか？

こんな強そうなドラゴンの素材なんて求めてないんですけど！？

リーフィアがそんなことを考えてる間にアルバトリオンは3人に向かって突進してきた！！

「皆、倒す必要は無いから。素材を手に入れたら、さっさと撤退するよー！！」

なのはの言葉に杏子とリーフィアは頷き、取り敢えずアルバトリオンの突進を回避する。

「グーグンニル！！」

バシュツという音を立ててカートリッジが三発だけロードさせる。

「竜月双閃！！」

アルバトリオンの背後に瞬間移動してアルバトリオンの背中に二回攻撃する。カートリッジを三発ロードしたにも関わらず、鱗が二枚手に入っただけだ。

（かてえー！！まるで頑丈な鉄パイプを殴ったみたいだ！！）

くビュンツ！！く

「うわあー！！」

アルバトリオンの尻尾に叩きつけられ、杏子は吹き飛ばされる。が、リーフィアが受け止めた。

「大丈夫ですか？杏子」

「ああ。騎士甲冑のおかげで衝撃は少ねえ。」

「シューティングスター・ソードシフト！！」

その刹那、流れ星のように魔力で構成された魔力剣が降り注ぎ、アルバトリオンの鱗を剥ぎ取り、尚且つダメージも与える。魔力剣の弾幕によってアルバトリオンの動きが止まる。その隙になのはは次の一手を用意していた。

「ディバインバスターー！！」

なのはの砲撃魔法の十八番（ディバインバスターカートリッジロード：二発）がアルバトリオンの脳天に叩き付けられた。

くグオオーン！！く

アルバトリオンは物凄い音量の咆哮を上げて、敵を威嚇するが、なのはたちには全く効いていない。

なのはバリアジャケット
なのはたちの騎士甲冑には防音機能が備わっているので、アルバトリオンの咆哮は大した意味を為さない。

「たあつ！！」

杏子はアルバトリオンの咆哮が効かないのを良いことにアルバトリオンの背中に飛び乗った。そして、鱗が剥がれて肉質が落ちた部位にグーグンニルを突き刺した。

くギヤオオオン！！く

アルバトリオンは苦しそうな声を上げたが、最強の古龍と謳われる煌黒龍はもう一度大きな咆哮を上げた。結構なダメージを与えているのに堪えてる様子がまったく無い。

「まだまだ！！」

アルバトリオンの周囲にリーフィアの魔力変換『電気』によって生成された魔力剣が浮かび、包围する。

「百花繚乱・雷!!」

リーフィアがトリガーワードを呟くと同時にアルバトリオンに魔力剣が一斉に突き刺さった。

「グオオーン!!」

「少し眠っててね!!」

なのははポケットの中から水色の液体が入った注射器を突き刺した。肉質が柔らかくなっている所を狙ったので、針はすんなり入った。

「グオオ……」

すぐに薬の効果が現れて怒り狂っていたアルバトリオンはあっさりと眠りについた。

「ふう」

「何を射ったんだ？」

「超強力な睡眠薬だよ。抗体が作られ易いから、一回しか使えないけど。」

なのはさんって、本当に色々な魔法薬を持ってるけど、どんな目的で超強力睡眠薬とか作ったんだろ？怖いから聞かないけど。

「2人はアルバトリオンの龍鱗を回収しておいて。私は少しやることがあるから。」

「わかった。」「はい。」

SIDE KYOUKO

「一枚、二枚、三枚……結構剥がれ落ちたな。」

「杏子、数えてないで回収を手伝ってください。」

「はいはい。」

しかし……眠ってるとは、言っても真近くで鱗を回収するのは怖えな。何時目を覚ますかわかんねえのが、余計に怖い。

内心、アルバトリオンの起床にビクビクしながらも杏子は袋の中に煌黒龍の龍鱗を集めた。

「グーグンニル、待機状態に戻って」

なのはが命令するとグーグンニルは十字槍から待機状態のアクセサリーに戻った。グーグンニルが刺さっていた傷口から赤黒い血が流れ出し、なのははそれを小瓶に回収する。

小瓶が二本一杯になった所で血の流れは完全に止まった。

「杏子、リーフィア。鱗の回収は終わった？」

「ああ。」

「全部集め終わりました。」

そんなに落ちてるわけじゃないのに袋がパンパンだ。まあ、図体があれだけデカイから、鱗一枚一枚のサイズがデカかったただけだな。

「それだけあれば、双剣を二振り使ってもオツリが来るね。じゃあ、最後の仕上げをやって帰ろっか。」

「「？」」

最後の仕上げって………一体何だ？

疑問符を浮かべる杏子とリーフィアをほっておいて、なのははアルバトリオンの頭部に近付いた。そして、しゃがみこむと何か作業を始めた。

「一体何してるん……………」

「それはちょっと……………」

アタシは顔を引きつらせた。多分、リーフィアも同じだろうな。母さんが何をしてるのかという……………龍の角に小型の爆弾を設置してるんだ。

「アルバトリオンの角は武器の錬成に欠かせない素材だし、魔法では到底折れない。だから、こうやって爆弾で角の根元から折るんだよ。」

だからって、設置し過ぎだろ！？片方の角だけで五個はあるぞ！？

「よし。これでOK」

なのははアルバトリオンの角に爆弾を設置し終わると飛行魔法を使って飛び上がった。なのはに倣って杏子もリーフィアも袋を背負ったまま飛び上がった。

「リーフィア、“スパーク”の準備をしておいてね。」

「はい。」

デバイスを失ったリーフィアは自力で術式を構築する。少し時間は掛かったが、リーフィアの右手にはバチバチと放電を続ける球体が形成されていた。

「準備万端だね。というわけで起爆！！！」

なのはがパチンツと指を弾くとアルバトリオンの角に仕掛けられた爆弾が爆発し、頑丈な角をへし折った。そして、桜色のバインドがアルバトリオンの角を見事に釣り上げた。

「グオオーーン！！！！」

そんなことをされてアルバトリオンも黙っていたら、大らかな翼を羽ばたかせて、さらに赤く鈍く光っていた身体を青く鈍く光らせてなのはたちに向かっていった。

「リーフィア！！」

「バース！！」

球体が破裂し、眩い光を放ち、アルバトリオンの視界を眩ませる。

こらーリーフィア。ネタに走るな。アタシモラ ユタは好きだけどな。

「さあ、今の内に逃げるよ!!」

「あれだけやっというて逃げんのかよ!?!」

アタシとリーフィアの声が重なった。いや、あれだけ苛めという目的達成したら、放置って酷くないか?

「冗談じゃないよ。いくら私でもアルバトリオンとまともにやり合える訳ないないよ。」

「えっ?」

「さて、素材が手に入ったから、鍛冶屋に行くよ。私が神具と概念武装を作る時にお世話になってる刀匠が居るから。」

3人はミッドチルダのアルトセイム地方に工房を構える刀匠の元に向かった。

「エミヤさん」

アルトセイム地方の森に囲まれた湖の畔に建てられた一軒家をなのはたちは訪ねた。なのはが扉を叩くとその一軒家から赤色が交じった髪の毛の女性が出てきた。

「ん？ああ、なのはちゃんじゃない。また刀をうって欲しいの？」

「いえ、今回は私の部下のデバイスの元になる双剣をうって欲しいんです。」

「だが、材料が無いと高くつくよ？」

「大丈夫です。」

なのははドサリツと刀匠エミヤの目の前にアルバトリオンの素材が入った袋を渡した。

「こりゃ、アルバトリオンの鱗と角じゃないか！？よく手に入れれたね？」

「まあ、家の子と部下に手伝って貰いましたから。これだけあれば十分ですよね？」

「ああ。1週間だけ待っててちょうだい。最高の一品を作ってあげる。」

「お願いします。」

第22話（後書き）

アルバをタコ殴りにするのは（笑）
ちなみに、私はアルバにソロで勝てません。

第23話

SIDE NANOHA

刀匠エミヤにリーフィアのデバイスの元になる双剣の製作を依頼した後、なのはたちは特務零課の隊舎兼移動要塞の次元航行艦アースラにやって来た。

なのはたちがアルバトリオンの素材強奪に向かっている間、特務零課に預けられていたヴィヴィオを回収しに来たのだ。

ヴィヴィオ、大泣きしてなければいいけど……………

イヤーっ!!

なのはたちの耳に聞き覚えのある拒絶の声が聞こえてきた。

「……………」

大泣きしてる訳じゃないけど……………一体、何をやらかしたの？

そんな疑問を頭に思い浮かべながら、3人は食堂の扉を開けた。

「ちゃんと食べなさい!!」

「苦いのきらい!!」

食堂に居たのは私たちを除く特務零課全員。ちょうど中心のテーブルにヴィヴィオとジャンヌが居て、スプーンに乗せた緑色の物体。緑ピーマンをヴィヴィオに食べさせようと格闘していた。

「およ？隊長方、お帰りなのら？」

なのはたちが帰って来たのに真っ先に気付いたシャルロッテが長い袖をぶらぶらと揺らしながら、駆け寄ってきた。

「ただいま、シャルロッテ。ところで、これは一体どういう状況なの？」

「いや、昼食にピーマンの入りのチャーハンを作ったんだけど、ヴィヴィはピーマンが嫌いらしくてね。それをジャンヌのお皿に移そうとしてジャンヌに見付かってこの状態」

ああ。小さい子の最初の関門の好き嫌いか。これくらいの年齢の子は好き嫌いが結構多いんだよね。

「リーフィア。アタシ、ちょっとアイツを締め上げてくる。」

「だ、ダメですー!!」

リーフィアは杏子を後ろから羽交い締めする。杏子はジタバタと暴れるが、魔法強化を施されたリーフィアの腕を振りほどくことができない。

「食い物を粗末にする奴には天誅を！！」

「その意見には少しばかり賛成しますが、貴女は絶対にやり過ぎます！！」

「はーなーせー」

にやはは……………杏子の食べ物に関する執着は凄いからね。まあ、一時期満足に美味しいものを食べられない地獄を経験したら、そうなるよね。

杏子の目の前で食べ物を粗末にしたら、地の果てまで追い掛けて来るだろうな。でも……………

「杏子、貴女にも嫌いな食べ物はあるでしょ？」

「うつ……………」

私が凶星を突くと杏子は大人しくなった。たった数年しか一緒に暮らしてないけど、杏子の好みはある程度把握している。

ちなみに、杏子の嫌いな食べ物はレモンやグレープフルーツのような酸味の強い食べ物。酸味が弱いのなら、食べれるらしい。

「ヴィヴィオ、ちゃんと……………食べないと……………身体…大きくならない。」

読んでいた本から視線を外して途切れ途切れに呟く特務零課で一番寡黙（と思われてる）な少女 エルザ＝マリア。

「うつ」

こうやって見てるととても古代ベルカの戦乱を終結させた偉大なる王の面影なんてまったくないね。

「ヴィヴィオ」

「あつ、ママ」

私が声を掛けると泣きそうだったヴィヴィオの表情は一変して明るい笑顔に変わった。

「ご飯食べ終わったら、ヴィヴィオの大好きなキャラメルミルク作ってあげるから頑張って食べようか？」

「ううう………パクっ」

キャラメルミルクという誘惑に負けたヴィヴィオは残ったピーマンをまるごと口に運んだ。そして、咀嚼もせずに丸のみ。

「偉いね、ヴィヴィオ　じゃあ、キャラメルミルク作って来るから少し待っててね？」

「うん」

ヴィヴィオが食べ終わった食器を持って、なのははキッチンの方に向かった。

S I D E K O U Y A

「うーん……………」

食堂の端の方のテーブルで煌夜は四枚の空間投影型ディスプレイと二枚の空間投影型キーボードを展開しながら、考え事をしていた。

シャルロッテのデバイスはフルドライブを大斧に設定して……………習得してる魔法が少ないから、なのはさんに頼んで魔法文字を刻んで貰って……………これで良いかな？

デバイスマイスターの資格を密かに習得しようと考えている煌夜は参考書片手に四機のデバイスの設定に着手していた。といっても一から設計しているのではなく、ある程度設計されたモノに煌夜が各々の特性に合わせて修正を加えているのだ。

ゲルトの方は耐久性重視にしておかないとすぐに壊しそうだ。フルドライブは……………大鎌で良いかな？

「あんまり根を積めると身体に毒だぞ」

「わかってるよ、杏子。でも、大丈夫。」

「まあ、あまり無理をするようなら、ひっぱたいてでも止めるけどな。ほら、部隊長からの差し入れた。」

「これは？」

「母さんお手製のキャラメルミルク。」

「ありがとう」

私は杏子からキャラメルミルクを受け取って一口飲んだ。すると、すっきりした甘味が口の中に広がって頭の中もすっきりした。

「美味しい……………」

「だろ？」

杏子といい、ヴィヴィオといい、あんな母親を持てて幸せですね。喧嘩ばかり私の両親とは……………大違いです。

煌夜の家は家庭環境が非常に悪かった。煌夜が小さい頃はそうでもなかったのだが、煌夜が大きくなるにつれてそれは悪化した。

それが煌夜が電腦世界にのめり込む要因だったのだ。まあ、それが原因で高度なハッキング技術を手に入れたのだが……………

「そつえば、なのはさんは？」

「機動六課の方に行つたよ。」

S I D E N A N O H A

〈陸戦シミュレーション空間〉

機動六課の訓練スペースにいつも通りフォワード4人の訓練が行われていた。今回の舞台は切り立った崖などがある複雑な地形で隠れ場所も多い。そして、今回フォワードに与えられた任務は対象の撃破。しかし、対象はガジェットのようなあまっちょろい奴ではなく、特務零課の部隊長である高町　なのはである。

「うーん……私を追ってきてるのはスバルとエリオ。多分、外に出たらティアナとキャロの集中砲火かな？」

私は現在森の中で戦況把握の真っ最中です。そして、私の手にはレ
イジングハートではなく、古代ベルカ式専用のデバイス“パラディ
オン”。最近、古代ベルカ式を使って居なかったなのでその慣らしに
訓練相手を引き受けてます。

「ここでスバルとエリオを撃破して……………森の外に居るキャロとテ
ィアナを撃破っていうのが最善かな？」

「でえええええい！！」

「ふっ！！」

スバルが木々の間を【ウイングロード】で駆け抜けて来た。私が居
ない1ヶ月半の間に【ウイングロード】の操作精度も上がってる。
だけど、攻撃が剃らされたら、意味がないよ？

なのははパラディオンを器用に扱ってスバルの攻撃を明後日の方向
にずらした。かなりの加速で駆け抜けて来たスバルは急に停止する
こともできずに樹の幹に叩きつけられた。

「でえええええい！！」

今度は背後からの強襲。いい作戦だけど……………

くガキン！！く

なのは後ろをまったく見ずにパラディオンの刀身でエリオのスト
ラーダを受け止めた。

「はあっ!!」

惚けているエリオの腹部に向かって、魔力の籠った鋭い蹴りを打ち
込んでエリオを樹の幹に叩き付ける。

「ほらほら。まだ私に一撃も与えられてないよ？」

「くううう……エリオ、合わせて!!」

「はい！」

スバルとエリオがカートリッジをロードして同時に私に突っ込んで
くる。同時攻撃は上手くいけば、決めの一手になるけど……

くカサッく

「くへっ?」

樹の枝が少し揺れる音の直後、スバルとエリオの目の前に居た筈の
なのはの姿はなかった。

「残念でした」

なのは隣の樹の枝に移っていた。そして、握っているパラディオンには膨大な魔力が籠められていた。

「同時攻撃は外れると同士討ちになることを覚えておこう、ね！」

「ドゴーン！！！！」

パラディオンを降り下ろし、なのははスバルとエリオを一撃で撃破した。古代ベルカ式を扱う時は“刹那の隙に一撃必殺を叩き込み”というのを常に心掛けているなのはは恵まれた魔力でそれを実現している。

ちなみに、この教えは彼女の父親が彼女に剣術を指南する時に教えたものである。

「スバルとエリオの前衛組は撃墜。残りは後衛のキャロとティアナだけど…………どうやって攻めようか？」

ティアナってジャンヌには及ばないけど、結構な策士なんだよね。何か罠を仕掛けてるかもしれないし…………仕方ない。結構な魔力を喰うけど、“あの魔法”を使おうか。

なのはの足元に桜色の古代ベルカ式魔法陣が展開され、クルクルと回転する。

「蜃気楼の鎧」
ミフージュウエル

なのはの姿が蜃気楼の歪み始めとしばらくすると、なのはの姿は初めからそこに居なかったように消滅した。

「スバルとエリオはやられちゃったみたいね。まったく……森の中に入ったら、こっちから援護できないのくらいわかってるでしょ」
切り立った崖の上に陣を構えるティアナはスバルと猪突猛進的な性格に対して愚痴っていた。

その様子に隣に居るキャロも苦笑いを浮かべた。

「それにしても、あの噂が本当だったとはね」

「あの噂？」

「なのはさんは古代ベルカ式の使い手で“純白の戦乙女”の二つ名を持つてるっていう噂。スバルのバカが嬉々と自慢してたわ。」

「私もフェイトさんから接近戦もできるって聞いた時は驚きました。なのはさんって固定砲台のイメージが強いから……」

「砲撃一筋じゃ生き残れないからだよ」

「「！！！！」」

「チエックメイト」

2人が後ろを振り返った時にはもう遅かった。キャロは桜色の鎖型バインドで拘束され、ティアナは首筋にパラディオンを突き付けられていた。

「フォワードチーム全員撃墜。センサーを森の周囲に張り巡らしてたのはいいけど、幻影を使われたら、意味ないよね？」

「……………はい。」

私が最後に使った魔法は幻影魔法系の《蜃気楼の鎧》。ミラーージュウエール

自分を姿、気配、魔力を全て感知できなくする幻影魔法の最高峰。もつとも術者しか消せないのと維持するだけで魔力がどんどん減っていくのが問題点。

「他にも色々言いたいことがあるけど……………一旦、集合。エリオとスバルを回収して来てね？」

「はい。」

なのははパラディオンを鞘に納めて、キャロのバインドを解除するとトコトコと何処かに行ってしまったとき。

第23話（後書き）

最後の模擬戦は完全におまけです。設定に古代ベルカ式と書いておきながらぜんぜん使っていないので・・・

第24話

S I D E N A N O H A

ヴィヴィオを保護してから1週間後。なのはは単身聖王教会のカリムの執務室に訪れていた。

「すみません、騎士なのは。急に呼び出してしまつて」

「構いませんよ。ちょうど養子縁組の書類を提出するついでだったので」

結局、ヴィヴィオの意思は変わらずヴィヴィオは高町　ヴィヴィオになりました。未婚状態で2人も子供を持つことになるとは思わなかったよ。

まあ、誰かと付き合うつつもりはないけどね。私は不老不死だし……

「騎士なのはに来て貰ったのは、聖王の子孫に関することです。予言の内容からして、公開意見陳述会が狙われる可能性が高いです。」

公開意見陳述会っていうのは、二日後に開催される“海”の首脳と“陸”の首脳による会談。管理局の上層部が一堂に介するから、管理局にクーデターを起こすなら、絶好の機会。

警備には機動六課や私たち特務零課も当たることになる。

「恐らく敵の狙いは……………」

「ヴィヴィオ、ですね。」

「はい。そして、敵の切り札は“聖王のゆりかご”です。」

「聖王の…ゆりかご……」

“聖王のゆりかご”。古代ベルカ最凶兵器にして最強の兵器。衛星軌道上に上げれば、二つの月の魔力を受けて誰にも破壊できない最強の兵器。

ヴィヴィオのオリジナルであるオリヴィエ聖王女殿下によって破壊されたはずなんじゃ…………

「“破壊された”という記述は残ってません。あくまで“消失した”というだけです。」

「騎士カリムはいつの間に読心術を身に付けたんですか？」

「クロノ提督やユーノ司書長にも同じ質問をされましたから」

カリムは苦笑いを浮かべながら言った。

ユーノくんは納得だけど、何でクロノくんまで聖王史（聖王家に関する歴史を取りまとめたモノ）を読んでるんだらう？

ちなみに、私も読みました。結構な量だったから、かなり時間が掛かったけどね。

「スカリエッティのアジトに関しては……………？」

「ロツサが調査中ですが、これと言って進展はありません。」

「そうですか……………」

アジトがわかれば、こっちから先制攻撃を仕掛けることができたのに……………。そう簡単に事は運ばないか。

「特務零課の様子はどうですか？」

「初期メンバー組のデバイスが完成すれば、何時でも大丈夫です。」

現在のデバイス持ちはジャンヌとリーフィアの2人と限定的にトリシューラ。あと、公開意見陳述会までには煌夜専用の概念武装“魔術書ネクロミコン”が完成する。

一応、設計図は出来てるけどデバイスの製造にはオーダーメイドだから、時間が掛かる。公開意見陳述会までには間に合えばいいけど……………

「心配なら、貴女が手伝えればいいのでは？」

「私が手伝ったら、最高性能を追求するから余計に時間が掛かりますよ。」

「貴女は研究者ですからね。では、その研究者にちょっとしたお願いがあります。」

「?。」

「この解析をお願いします」

騎士カリムが取り出したのは、黒い指輪ケースの中に入ったルビーのような宝石があしらわれた指輪。土台は純銀製で緻密な紋様が掘られている。

一見すると普通の指輪のように見えるが、宝石部分からは膨大な魔力が滲み出ている。

「これはキョウコが遺跡から回収して貰った指輪だったんですが……最初は魔力も感じないただの指輪でした。ですが、最近になって魔力を放出するようになりました。」

「ふん……………」

私は右目に触れずと使ってなかった能力を解放する。

なのはの右目は海のような青色から六芒星の紋章が刻まれた赤色に変わった。

魔眼“見透す者の眼”

なのはの右目は特殊な力が宿った瞳 通称 魔眼と呼ばれるモノに改変された。

そして、目覚めた魔眼の能力は「ありとあらゆるモノを解析する程度の能力」。なのははこの魔眼を“見透す者の眼”と呼んでおり、普段は隠している。

閑話休題

“見透す者の眼”を発動させたなのは脳内に指輪のデータが流入してくる。

しかし、余りにも指輪の情報が多いせいで美しい顔が苦しそうに歪む。

聖王家六代目当主が製作した指輪、“聖なる指輪”セイクリッド・リング。体内にレリック

クを埋め込む代わりにこの指輪を装着することで自身をレリックウエポンに変える。

指輪を外せば、元に戻るが、六代目聖王家当主が特殊な封印を施しているため、聖王家の血を受け継ぐ者にしか効果がない。

今一作った理由がわからないね。

「この指輪はレリックを使った指輪で聖王家の人間をレリックウエポンに変える力があるみたい」

「そうですか……。では、コレは貴女が持っていてください。私たちが持つていても意味がありませんから。」

「わかりました。」

聖王家が途絶えた現代で《聖王の指輪》を使えるのは、オリヴィエ聖王女殿下のクローンであるヴィヴィオだけ。

できれば……。あの子には闘いに参加して欲しくない。

「どのように使つかは貴女に任せますが、くれぐれも壊さないよう
にお願いします。」

「はい。」

SIDE OTHER

場所は変わって特務零課隊社次元航行艦アースラ。

「でりゃあー!!」

「よいしょー!!」

くガキンー!!」

アースラの第1訓練室で闘っているのは、シャルロッテとゲルトルトの2人。

2人が持つているのは、以前使っていた魔力伝達性が高い形状変化金属ではなく、2人専用チューニングされた真のデバイス。なのはが聖王教会に赴いている間にこの二人の専用デバイスが完成した。

「凄いな。デバイスがあるのとないで魔法の使い易さが全然違う
!!!」

「感激するのは後にしろ」

くゲシッ!!!

シャルロッテはゲルトルトの腹部を思い切り蹴り飛ばした。

「ゲホッ!!!ゴホッ!!!やりやがったなあ!!! “グラディウス”、
ツインハーケン!!!」

ゲルトルトの命令を受けて彼女専用の大鋏型ストレージデバイス《グラディウス》がその姿を二本の鎌に変える。

「シザークロス!!!」

十字の風の刃を飛ばす魔法がシャルロッテに襲いかかる。しかし、

シャルロッテはその場から動かず目を閉じていた。

そして、《シザークロス》がシャルロッテの障壁とぶつかる。しかし、それだけに終わらず《シザークロス》の外郭が崩れて一つの球体になる。

「返す」

「へっ？」

くパチンく

シャルロッテが指パチンを鳴らした瞬間、《シザークロス》が反転してゲルトルトに向かっていく。

「そんなのありかよ!？」

ゲルトルトは吠えた。

跳ね返された《シザークロス》をシールド型障壁で受け止める。

「“グランベール”、アックスフォーム」

くガキンッ!ー!ーく

そんな音を立てて巨大ロリ・ポップの飴の部分が半分に分れて中から青色の切っ先と黒い刀身を持った斧が姿を現した。

「ブラストキャリバー」

シャルロッテが呟くとグランベールの刀身にばら蒔かれた魔力素が収束していく。

「ストーーーーップ！……！」

シャルロッテが大技を放とうとするのを煌夜が大声で止めた。

「シャルロッテ……！訓練室で“ブラストキャリバー”は駄目って言ったでしょ……！」

「え………」

「え、じゃない……！第2訓練室を壊したのは誰ですか……？」

「わざとじゃないよ……」

アースラの第2訓練室は現在修理中。原因はシャルロッテが煌夜と模擬戦の際に放った《ブラストキャリバー》だ。

シャルロッテの魔法は集束技能を使った一撃必殺魔法だ。斧の切っ先“だけ”に魔力を集束されて相手の障壁ごと切り裂く魔法だ。この魔法には1ON1タイプと広域殲滅型が存在し、第2訓練室で使ったのは広域殲滅型である。

「まったく……。ゲルト、デバイスの調子はどうですか？」

「絶好調 何時でも前線に出れる!!」

「（グラディウスの方は問題なし。）シャルロッテは？」

「術式の構築が楽になった」

グランベールを肩で担ぎながら、シャルロッテは初めて自分専用のデバイスを使った感想を述べた。

「その様子だとグランベールも問題ないみたいだね。」

「煌夜は凄いのら」

「そんなことないよ。基本的な設計はダイダロスさんがやってくれたし……」

シャルロッテのグランベールとゲルトルートのグラディウスは基礎をダイダロス「スカイエンジェ」という人物が作り、2人の性格・行動パターン・使用する魔法の傾向等を熟知している煌夜がチューニングを加えた一品。そのため、パートナー（主）との相性がとてもいい。

ちなみに、ダイダロスⅡスカイエンジエというのはのはの補佐の一人（なのはの補佐は三人おり、残りの二人はアクセリオンとアスタロット）でギンガやスバルの調整をする凄腕の科学者である。

（これなら、公開意見陳述会の警備を任せれそうですね。）

2人の様子を影から見ていたアクセリオンは心の中でそう思った。

（トリシューラには悪いですが、もう少しブリューナクで我慢してください）

アクセリオンはデバイスが未だに完全していないトリシューラに対して謝罪した。

トリシューラの専用デバイスは残念なことに間に合わなかった。メインメンバーの中でデバイスが完成していないのは、彼女だけだ。（煌夜のネクロミコンは公開意見陳述会前日に完成する予定）

公開意見陳述会まで

あと2日。

第24話（後書き）

そろそろ響が登場するのですが……響のISが全く思いつきません。何かいい案がありましたら、感想にスキル名と効果を書いて送ってください。締切は今週中です。

ちなみに、響の武器は小さい斬艦刀です。

第25話

SIDE ジャンヌ

公開意見陳述会前日。私を含めた特務零課メインメンバーは隊社であるアースラの部隊長室に召集されました。

まあ、十中八九公開意見陳述会の警備シフトの発表でしょう。周りには学校帰りのリーフィアとキヨウコ、暢気なシャルロッテやゲルトルト、大人しい煌夜とエルザ。

「みんなもわかってると思うけど、明日の公開意見陳述会に私たち特務零課も警備に当たります。

警備担当はシャルロッテとトリシューラとゲルトルト、警備指揮はジャンヌ。補助に煌夜もついて貰う」

現場監督はやっぱ私ですか……。ですが、コウヤが補助というのは嬉しいですね。コウヤは優秀ですし、いざとなれば私の戦闘の補助も出来ますし。それにシャルロッテとトリシューラにゲルトルトの3人はチームワークも十分。私は指揮するだけで終わるかも知れませんか。

「杏子は機動六課の守りをお願い。」

あれ？機動六課の方は自分で護るくらいの戦力があるのでは？

ジャンヌはなのはの警備シフトの割り当てに疑問を抱くが、その疑問はすぐに解消されることになる。

「母さん、機動六課は護りなんて必要ないんじゃないかねえか？」

「それがそもいかないの。」

部隊長は溜め息交じりにそう呟きました。一体、何があったのでしょうか？

「向こうの部隊長が公開意見陳述会の警備にほとんどの戦力を投入するの。レリックは機動六課に安置されてるのにだよ？」

部隊長………愚痴に聞こえますよ？

それにしても、あの部隊長は何を考えてるのでしょうか？警備が薄くなる日を狙って襲撃してくる可能性は極めて高いのに。

「私も忠告したんだよ？でも、聞き入れてくれなくてね。はやてちゃんには少し痛い目にあってもらおうと思うの。」

なのはは黒い笑みを浮かべた。

「じゃあ、アタシが行く意味がねーじゃねえか」

「あるよ。杏子には非戦闘員だけを守って欲しいの。」

「りょーかい」

「リーフィアとエルザはアースラで待機」

あれ？リーフィアは前線に出さないの？

リーフィアが前線に出れば、敵を蹴散らすなんて虫を殺すことぐらいに簡単なのに……………

「あの……部隊長。何故私とエルザは待機なのでしょう？」

「まず第一に、外の警備には十分過ぎる戦力が整ってること。」

公開意見陳述会の外部警備には、機動六課や特務零課のメンバーに加えて“陸”の部隊からも人員が派遣される。

特務零課からはシャルロッテやトリシューラも派遣される。確かになのはの言うとおり戦力としては十分過ぎる。むしろ、過剰戦力かもしれない。

「第二に、リーフィアは特務零課^{つち}の切り札^{ジョーカー}だから。

今回予想される襲撃は単なる管理局への宣戦布告。全面戦争に発展するまで切り札は温存しておきたいの。」

特務零課の切り札って、部隊長と副部隊長だと思いますが……………。リーフィアもこの2人には勝てないし……………。

「エルザはデバイスがまだ完成してないから、今回はアースラで待機しててね？」

「わかった。」

「じゃあ、今日の深夜から警備に入るから、今日はゆっくり休んでおいてね？訓練も禁止。私からは以上。解散！！」

なのはの解散宣言を受けて部隊長室に集まっていたメンバーがぞろぞろと退出する。

「煌夜、ちょっと来て」

SIDE KOUYA

「貴女に渡しておく物があるの。ついさっき完成したよ」

そう言いながらなのはさんが取り出したのは、薄い赤色で彩飾され

た一冊の本でした。題名は記されておらず、表紙と裏表紙には白いギリシャ十字架が描かれています。背表紙には薄い赤色の下地に古代ベルカ文字で何か書かれてますが、何と書かれているのか私にはわかりません。

「煌夜専用の概念武装“魔術書ネクロミコン”。」

「これが……私の……」

「魔法を記録し、記録した魔法を行使することができる魔術書。消費する魔法半減させる“っていう概念を乗せておいたよ。でも、この魔術書はまだ未完成なの。」

パラパラとページを捲ると最初の方は一頁に1つの魔法が記録されていましたが、途中から真っ白です。

でも、裏表紙の方から開くと真っ白ではなく、きちんと魔法が記されています。どういうことでしょうか？

「裏表紙の方はページを千切るとそのページに書かれた魔法が発動するようになってるの。チャージも必要ないから、不意打ちに便利だよ。」

た・だ・し！！ページを千切って発動させた魔法はページが再生するまで使えないから注意してね？」

「使ったページは勝手に再生するんですか？」

「うん。丸1日かかるけどね。」

うわ……チート過ぎる。でも、裏表紙側の魔法はそんなに数がないんだよね。せいぜい十個くらい
よく見るとこのネクロミコンは半分ずつ紙の色が違う。表紙に近い方は如何にも古そうな紙だけど、裏表紙の方は白い。わかりやすいように分けてあるみたいだ。

「試しにページを千切ってみて。」

「はい。」

なのはさんに言われた通りに一番最後のページを千切る。すると、不思議なことに千切ったページは一枚のカードに変わった。

「ページは千切っただけじゃ発動しないの。千切ったページは“スperlカード”になって待機。そして、トリガーワードを呟いた瞬間に解放されるようになってるの。」

「へえ。」

つまり、この魔術書ネクロミコンは魔法を記した呪文書であると同時にスperlカードホルダーでもある訳だ。便利ツールだね

「ごめんね、完成が遅れて。概念武装は作るために素材を改変しないといけないから、どうやっても時間が掛かっちゃうの。」

「い、いえ!!」

そんなに謝られると逆に私の方が恐縮しちゃうよ!!なのはさん
って、変な所で生真面目だからな。部隊長に見えないけど、その
性格がいろんな人を惹き付けるんだよね。

特務零課のメンバーはなのはさんに恩義があるから、従ってる訳じ
ゃない。なのはさんの人柄に従っている。

「引き留めてごめんね。明日に備えて煌夜もゆっくり休んでおいて
ね?」

「それはなのはさんもですよ。」

私は苦笑いを浮かべて部隊長室をあとにしました。

SIDE NANOHA

「ははは……部下にまで心配されるほど無茶してるつもりはないんだけどな」

煌夜が出ていった扉を見詰めながら、私はそんなことを呟いた。部隊長室に残ってるのは、私とアクセリオンだけ。そう言えば、最近までもな休暇を取ってないな。

「アクセリオン、この事件が終わったら杏子を連れて何処かに羽を伸ばしに行こうか？」

「良いですね。何処に行きますか？」

「それは事件が終わってからだよ。今は事件を解決することに集中しよう？」

「はい。」

そして迎えた公開意見陳述会当日。特務零課のメインメンバーは固まって地上本部の正面玄関を守護していた。緊張感などまったく感じさせず、やいやいと喋っている。

「スカリエッティも災難だね。私たちが警備に参加してることを知らないなんて」

シャルロッテは陽気に呟いた。

「シャルロッテ、油断していると足元を掬われますよ?」

「これだけの戦力が居て突破されることなんて滅多にないと思うけどね。」

「……………公開意見陳述会終了まであと二時間。」

「っー!!」

公開意見陳述会終了まであと二時間という時にトリシューラの肩に乗っていたブリューナクが何かを感じ取った。

（遠くの方に複数の反応……………間違いない!!）

「みんな!! 敵が攻めて来た!!」

ブリューナクの報告に慌てることなく、ジャン又たちは戦闘服を纏う。

その刹那、ジャン又たちが守護する正面玄関前に複数の召喚魔法陣

が展開。召喚魔法陣1つにつきガジェット1編隊が召喚された。数は20を優に越えている。ジャンヌたちとは対称的に他の警備担当は突然のガジェットの襲来に慌てる。

「蒼白の雷よ　聖なる雷よ。集い交わりて我が眼前の敵を討滅せよ――」

ネクロミコンのページを開き、呪文を唱えると煌夜の足元にミッドチルダ式が展開される。開かれたネクロミコンのページに記された呪文も光を放っている。

「デイヴァインセイバー――」

くドゴーンッ――く

ガジェット軍隊に容赦ない破壊の雷が降り注ぎ、ガジェットを薙ぎ払った。

「2編隊……いや、3編隊は減りましたね。」

「でも、まだまだいっぱい居るよ――」

「この程度の数どうということはありません。」

ジャンヌはデュランダルを抜刀し、一閃。すると、シャルロットたちが守護している正面玄関が一瞬の間に凍土に変わった。

「私たちの仕事がなくなっちゃった」

「いえ、ガジェットが攻めて来てるのは此処だけではないようです。」

ジャンヌが空を指差すと航空機型ガジェットがシャルロットたちの頭上を通過していった。

「ブリューナク」

「ユニゾン・イン！！」

ブリューナクとトリシューラが融合し、1つになる。^{ユニゾン}トリシューラは空に飛び上がると周囲を眺めた。

「ガジェットが攻めて来てるのは……三ヶ所か。これくらいなら、余裕だね」というわけで砲撃の補助は任せたよ？」

【はいはい】

トリシューラが手を翳すと狙った地点の上空に魔法陣が展開される。

「フォーリン・ダウン」

ガジェットが襲撃して来た三ヶ所にトリシューラの砲撃が叩き込まれた。

「弱い弱い。」

【所詮は雑魚ですからね。そろそろ親魚が来るんじゃないですか？】

「上等！！三枚に下ろしてあげるよ！！」

地上本部攻防戦はまだ始まったばかり。

第25話（後書き）

なのはがスペルカードを知っているのは、幻想郷に訪れたことからです。次回で幻想郷に居た理由が少し明らかになります。

第26話

SIDE KYOUKO

スカリエッティによる地上本部襲撃が始まるのと同じ頃、地上本部襲撃の報せを受けた杏子はグーグンニルを起動して待ち構えていた。

「はむ。地上本部の襲撃が始まったか……」

機動六課正面玄関の壁にもたれ掛かりながら真っ赤なリングにかじりついていた。杏子の視線の先には杏子が設置したスフィアの映像が映し出された空間投影ディスプレイ。

たく……。主要戦力のほとんどは地上本部の警備を担当するとは聞いてたけど、まったく居ねえとは聞いてねえぞ！？

アタシは少し乱暴にリングをかじった。正直、八神部隊長には呆れてる。だって、機動六課の護りがアタシとシャマルさんにザフィーラの3人。

こんな少人数で護りきれないわけがない。

「杏子ちゃん！！敵がこっちに来てるらしいわ！！」

「数は？」

【戦闘機人らしき反応が3つ。二手に分かれて此方に向かっている。お前に言われた通りバックヤードスタッフとロングアーチスタッフ

はグリフィスに任せてある】

「避難には大体15分かかるらしいわ。」

15分間の防衛戦か……。敵の規模がわからない以上何とも言えないな。

「アタシは東側の奴を倒してくる。避難が完了したら、すぐに脱出しよう」

【心得た!!】

アタシは《短距離瞬間移動》でその場を離れた。その時のアタシは……まさか“アイツ”と闘うことになるとは思ってもなかった。まったく……神様は余程アタシに絶望を味わせたらしい。

SIDE NANOHA

「地下の方にも複数の反応があるね。」

「どうしますか?」

「フワードたちに任せるよ。ティアナには概念武装を渡してあるし、クロノくんが鍛えたから大丈夫でしょ。」

実は特務零課が正式稼働するようになってから、フワードたちの教導はクロノくんに任せつきり。私は自分の部隊の教導で手一杯だったしね。そもそも最初からクロノくんに任せたほうがよかったんじゃないかって思う。

「フェイトちゃん、私外のハエどもを掃除してくるね」

「えっ？でも、デバイスは……」

公開意見陳述会の内部警備にはデバイスは持ち込めない。でも、アクセリオンはデバイスとして認知されていない。

「先に行くよ」

なのははフェイトにそう言い残すと窓ガラスを突き破って外に出た。その刹那、桜色の魔力が繭のようになのはを包み込み、弾けた。真っ白なバリアジャケットを纏い、なのはは飛行魔法を使って滞空する。

「ねえ、レイジングハート。少しだけ本気になってもいいかな？」

《仕方ないですね。今回だけですよ？》

「ありがとう」

レイジングハートに了承を貰った私は力を解放するために精神世界にダイブした。

「久しいの、那奈夜」

「久しぶり、玉藻前」

精神世界にダイブした私を出迎えてくれたのは、朱色の狐耳を生やした着物姿の女性。名前は玉藻前。
私の精神世界に住む私のもう一人の相棒。

「那奈夜が妾の所に来るのは久しぶりだのう。“久遠の落日”以来か？」

「うん。」

「妾も少し有り余った力を持て余していた所じゃ。遠慮なく持つて行くがよい、那奈夜」

因みに、玉藻前は私の事を“那奈夜”って呼ぶ。玉藻前の先代の主が私にそっくりだかららしい。

「また使わせて貰うよ」

そう言つて、私は玉藻前を取り込んだことで手に入れた内なるもう一つの力を解放した。

なのはの意識が現実世界に戻ってくる。なのはの栗色の髪は鮮やかな朱色に変わり、頭には先っぽが黒くなっている狐耳。

真っ白なバリアジャケットはくの一のような黒い忍衣装に変更され、尾てい骨から二本の朱色の尻尾がヒョコツと生えている。

そして、なのはの閉じられていた瞳が開かれた。

「さて……………行こうか。」

私は黒塗りの札を取り出して構える。

「スペルカード、妖符『黒月舞踏』」

なのはが宣言した瞬間、漆黒の三日月が無数に弾幕のように展開された。

“スペルカード”……………それは私が訪れたとある場所である人物と一緒に開発した特殊な戦闘方法。魔力も大して使わないのに、高威

力砲撃から高密度弾幕まで使える優れ物。作るのが面倒だけど。煌夜のネクロミコンに搭載したのもスペルカードを少し改良したモノだ。

《マスター、高威力砲撃が迫ってます。》

「わかった。」

私は右腕に霊力を纏わせる。霊力は魔力と似て非なるエネルギーで纏うと全身を強靱な武器にすることができる。

「ふっ!!」

迫り来る砲撃を右腕で殴って相殺する。

「弓符『星光の弓』」

別のスペルカードを取り出して解放。先ほどなのはが相殺した砲撃よりも圧倒的に強力な砲撃が放たれた。

「さあ、私の広域殲滅型スペルカード受けてみて!!」

殲符『星屑の流星』!!」

スペルカードが発動し、スペルカードは光の球体となって打ち上げられる。

一定の高さまで上がった瞬間、球体は花火のように弾けて地上本部を取り囲むように魔力弾を降らせた。まるで流星の如く……………。

「爽快爽快　ずーっと力を押さえ付けていたから気分がいいや」

全力とまでは行かないが、少しばかり本気を出せたのでご満悦だった。

《“幻想郷”では、際限なく力を振るってましたからね。》

「“幻想郷”か……………。“久遠の落日”が起こってから行ってないね。」

あの日……………私が霊葉を殺してからずっと行ってないな。っと、今はそんな事を考えてる場合じゃない。

「なのはさん！！聞こえますか！？」

「ティアナ…。何かあったの？」

「はい。実はギンガさんと通信が繋がらないって、スバルが独断専行を……………」

「大体わかった。でも、私もこの場を少し離れないといけないの。こっちから何人が送るよ。」

「わかりました」

通信モニターが消える。

戦闘機人の雛型であるタイプゼロ、ギンガとスバル。スカリエツテイが狙うのは当然か。

「ゲルト、シャルロッテ。そっちは大丈夫？」

「大丈夫」

「ジャンヌやコウヤが撃ちまくってるから、此方は楽なもんです。」

「それは良かった。じゃあ、2人は地下に向かって。指定されたポイントから地下本部の内部に。指定ポイントはレイジングハートで2人のデバイスに送るから。」

「わかった」

「わかりました」

シャルロッテとゲルトルートに念話で指示を出した後、なのははレイジングハートにグラディウスとグランベールにデータを送るように命令する。

さてと、杏子の方は……………なっ！！

本来の力を解放したことでかなり遠くまで見渡せるようになった私の視界に映ったのは、火の手が上がった機動六課の隊社だった。

「杏子……………!!」

この時の私は特務零課の隊長という肩書きを捨てて、たった1人の母親として機動六課に向かった。

「何で……………」

機動六課を防衛していた杏子は身体のおちこちに傷を作っていた。
《短距離瞬間移動》を自由に使いこなせる杏子が傷を負うのは珍しい。それは杏子が対峙している相手に問題があった。

「何でだよ……………っ!!」

杏子と同じ髪を二本のおさげにして纏めて、青いボディースーツを着た少女。瞳は虚ろで感情を映し出していない。手に持っているのは、斬艦刀と呼ばれる刀を小さくしたモノ。

「何でだよ!! “響”!!」

杏子を苦しめていたのは、最愛の妹である佐倉 響であった。

「聖王……器……回収」

「目を覚ましてくれ……響……！」

「邪魔」

くグサツ……！

響が持っていた斬艦刀が杏子の腹部に深々と突き刺さった。

「がっ……あっ……」

血が口から逆流する。ソウルアクセサリーは砕かれてないため、死ぬことはないが、かなりの激痛が杏子に襲い掛かった。

「排除」

追撃のアップー。その一撃は杏子の脳を揺らし、意識も奪い去った。

（何で……泣いてんだよ……）

薄れ行く意識の中で杏子の視界に映ったのは、空虚な瞳から涙を流す響の姿だった。

S I D E N A N O H A

「はあはあ……………」

私が機動六課に到着した時にはすべてが終わっていた。機動六課の隊社は無惨に破壊され、利用できる施設がほとんど残っていない。

「ザフィーラ！！シャマルさん！！」

私は瓦礫の上に横たわっていた1人と1匹を見つけた。シャマルさんの方は怪我が軽いけど、ザフィーラの方は身体のおちこちの骨が折れてる。

「はあっ!!」

ザフィーラの身体に手を当てて霊力を流し込む。本来、霊力に傷を癒す程の力はない。でも、幻想郷から戻った私は霊力で傷を癒す特殊な術を開発した。

「取り敢えずザフィーラはこれで大丈夫な筈。後は、聖王教会の附属病院に……」

私は幻想郷で発現した能力“空間を繋げる程度の力”を解放した。そして、この場と病院の入り口を繋ぐ穴を作り出す。その穴にシャマルさんとザフィーラを投げ入れた後、私は杏子の魔力反応を探って杏子を探し出した。

「杏子!!」

見つけた瞬間、空間と空間を繋ぎ合わせて杏子の近くに移動する。

「ソウルアクセサリーは砕かれてない。ただの脳震盪か……」

杏子の無事になのは安堵のため息を吐いた。でも、このままだとソウルアクセサリーに穢れが生まれてしまうのでザフィーラの時と同じように霊力で傷を癒す。

「ねえ、グーグンニル。一体、何があったの？」

《……死んだと思われていたマスターの妹君が敵として現れてました。》

「っ！……！」

やっぱり響も此方に来てたんだ。騎士カリムの予言からある程度予想はしてたけど……

《それよりも母君よ、その姿は………》

「これが私の本当の姿。まあ、誰も知らないけどね。それよりも機動六課に残ってた人たちは？ 気配がまったく感じられないけど……」

《マスターの進言で全員聖王教会に避難しました。》

「そう………」

グーグンニルと会話している内に杏子の傷は完全に癒えた。この周囲には人の気配は感じられない。この場に留まるだけ無駄。

「オモイカモネ、転送ポートを開いて」

「はい」

第26話（後書き）

なのはの裏事情が明らかに！！なのはの九尾形態の衣装は犬日の隠密隊筆頭が着ていた衣装を思い出してください。次回はこの作品におけるなのはの経歴を載せます。

番外編 なのはの経歴 + 追加人物設定

本作品における高町 なのはの経歴を載せたいと思います。
内容はネタバレも含むので注意してください。それでも言いとう方はそのままスクロールして下にお進みください。

なのはの経歴

新暦65年12月 闇の書事件解決

新暦66年3月 時空管理局武装隊に入隊（学校生活と二足わらじ）

新暦66年8月 教導隊に移籍（すぐに才能を発揮し、ぐんぐんと功績を伸ばす）

新暦67年2月 “エリクシール”を体内に取り込む。

新暦67年3月 地上でティードゥランスターと出会い、聖銃ハーデイスを制作。

新暦68年冬 なのは墜落。 不老不死に。

同じ頃 ???を制作

数週間後 不老不死という重圧に耐えきれず、蒸発する。

数日後 転移した世界で玉藻前を取り込み、九尾の妖狐になる。

新暦69年5月 八雲 紫という人物の薦めで“幻想郷”に。

新暦70年〜新暦71年 幻想郷にて“時の鐘異変”が起こる。

新暦71年4月 最初のレリック回収任務に乱入

同月 “ 久遠の落日 ” が起こり、なのはは特別科学官に。

新暦 7 1 年 6 月 杏子がミッドチルダにトリップ。

上記の半年後 杏子、なのはの養女になる。

（この間にダイオラム魔法球で魔法に関する知識など教え込まれる）

新暦 7 5 年 1 月 特務零課が設立。

新暦 7 5 年 4 月 機動六課が設立。

大まかに書くとこんな感じ。原作のなのはよりもかなりハードな人生を送っている。

ダイオラム魔法球を作ったのは、物質改変能力を完全に会得した直後なので新暦 6 7 年 4 月ぐらい。

また、この作品のなのはは中学校を卒業していない。その間は幻想郷に居たから。幻想郷に居た間は現実世界ではなのはは死亡扱いであつた。

次は人物設定。

高町 奈々夜（高町 なのは）

人種：九尾の妖狐

年齢：200 歳越え

能力：空間を繋げる程度の能力

九尾の妖狐、玉藻前を取り込んだなのはの幻想郷での名前。また、半妖狐形態での名前でもある。髪の色は緋色に変わり、戦闘服は動きやすい服装に変わる。また、緋色の狐耳と九本の緋色の尻尾が生

える。

人間が持つ霊力、妖怪が持つ妖力、神が持つ神通力、異能の力である魔力の四つすべてを持つチート生物。「博麗の守り神」として博麗神社に祀られるようになり、神通力を得た。しかし、とある事件で神通力を封印した。

【幻想郷における高町 奈々夜】

寝床として博麗神社を利用する代わりに博麗神社を守護していた。人里の人間には最初は怖がれていたが、博麗の巫女の代わりに妖怪を退治する内に打ち解けて行った。

妖怪同士のいざこざの解決にも尽力したため、妖怪たちの間でも人氣がある。彼女が幻想郷を去る時はほとんどの妖怪が涙ぐんだという。

博麗 霊菜（故人）

霊夢の母親で奈々夜の親友だった人物。妖怪に霊夢を人質に取られ、奈々夜が殺されそうになったのを庇い、死んでしまう。奈々夜が持ちこんだ非殺傷設定の技術を用いて「スペルカードルール」を作り上げた偉大な人物。

玉藻前

白面金毛九尾の狐として有名な妖狐だが、本作品では緋色の毛並みとなっている。

なのはに取り込まれた直後は怒り狂っていたが、なのはの心の内を

覗く内になのはに惹かれていった。

現在はなのはの妖力を管理して、なのはの人間の姿を保たせている。
玉藻鈴の存在はなのはしか知らない。

【時の鐘異変】について

幻想郷に時間の流れを変える秘宝「時の鐘」が流れついたことよ
って起こった出来事。

これにより幻想郷の100年が外界の1年に匹敵するようになり、
八雲 紫も外界に出ることができなくなった。異変を解決したのは
奈々夜と霊葉の二人。

第27話

SIDE GINGA

「うつ……。ん……。」

様々な精密機材が備え付けられた何処かの一室。その部屋の手術台のようなベッドの上で1人の少女は重い瞼を開け、ダルい身体に鞭打って起き上がった。

「あれ……。？私は……。」

私は、確か公開意見陳述会の最中に銀髪の戦闘機人と遭遇して……
…後から来た2人の戦闘機人に不意打ちを受けた後……

「貴女は3人の戦闘機人と戦闘して敗北。かなり酷い怪我だったのよ？」

「ダイダロスさん……？」

私の目の前に現れたのは、管理局屈指の天才科学者と謳われる人物ダイダロス。私とスバルの“身体”を整備できる数少ない人物。

「彼女たちに感謝しなさいよ？連れ去られる貴女を助け出してくれたんだから。」

「えっ？」

ダイダロスさんが指差したのは、桃色の髪の少女とスバルより濃い青髪の少女だった。

話は地上本部襲撃の終了間近まで遡る。なのはから命令を受けたシャルロッテとゲルトルートは指定されたポイントから地下通路を逆走していた。

「シャルロッテ、奥の方から誰か来る。」

「ん」

地下通路を逆走していたシャルロッテとゲルトルートは急ブレーキを掛けて急停止する。

「戦闘機人相手に手加減する訳にはいかないよね。グランベール、アックスフォーム。」

グランベールの外装がパージされ、大斧の姿を晒す。

「先手必勝。というわけでゲルト、頼んだ。」

「はあ……………射撃魔法ぐらい覚えなさいよ。」

ゲルトルートはそんなことを愚痴りながらも指を弾いて風の刃を発生させる。

「さっきの攻撃はお前か!!」

通路の奥から現れたのは、赤髪の2人組の戦闘機人だった。片方はボードの上に乗し、もう1人はローラーシューズを履き、右腕を押さえている。

『ゲルト』

『ええ。ボードに付いてる箱の中から生体反応が感じられる。』

「貴女たちを通さないように言われてるけど、気が変わった。その荷物を置いていったら、見逃してあげる。」

「はっ!! 誰が従うかよ!!」

ローラーシューズを稼働させて戦闘機人A（ローラーシューズを装備している方）が後先考えずに突っ込んで来た。

くズサツ ズサツ ズサツく

「うわあああああ!!」

刹那、戦闘機人Aの身体に無数の切り傷が走った。

「ノーヴェー!!」

「勤くと貴女のお仲間が細切れになりますよ?」

「くっ……………!!」

戦闘機人Bは駆け寄ろうとした足を止めた。

「馬鹿ですね。私たちが何も用意せずに迎え撃つと思いました?」

シャルロツテは戦闘機人Aの首筋にグランベールの切っ先を当てる。

「管理局は犯罪者であろうと殺すのは御法度な筈ッス!!」

「残念。私たちは管理局法から独立した組織なので万が一は殺しても問題ありません。」

「この……………野郎……………!!うわああああ!!」

「逃れないよ。私の“烈風の網”ウインド・ネットからは。もがけば、もがくほど風の刃に傷つけられる。」

「さあて、仲間と任務のどちらを取りますか?」

「わかったッス……………」

戦闘機人Bはボードに付けられた箱を外してゲルトルートに向かって放り投げた。ゲルトルートは両腕でその箱を受け取った。

取り引きは成立したので、ゲルトルートもノーヴェに掛けていた《烈風の網》の魔法を解除する。

「魔法は解除した。見逃してあげるから、さっさと行きなさい。」

ゲルトルートは戦闘機人Bを睨み付けた。戦闘機人Bはヒッ！と短い悲鳴を上げた後、ノーヴェを回収してその場を急いで離れた。

「いや……敵にも仲間思いな奴が居るんだね。」

「身体はサイボーグだけど心は人間と変わらないですね。」

「そだね。」

そんな会話をしながらゲルトルートは箱を開けた。

「……………これは重傷ですね。」

箱の中身を確認した瞬間、ゲルトルートは苦虫を潰したような表情を浮かべた。

箱の中身は血塗れになった1人の少女だった。虫の息だが、まだ生きている。はがれた皮膚からは所々金属製のケーブルが顔を覗かせていた。

「……………この子も戦闘機人のようなね。シャルロッテ！！ダイダロスに連絡して！！」

「アイサ。」

「そして、今に至る訳。パーツのほとんどが使い物にならなかったから、大変だったわ。」

「すいません……………」

「まあ、良いけどね。それよりも身体に異常はない？」

ダイダロスさんに言われて少し身体を動かしてみる。絶好調とまではいかないけど、別に違和感はないし……………

くフサツく

腕をぐるぐると回してみると何かフサツとした物に当たった。そう言えば、身体も心なしが少し小さくなったような……………

「鏡を見た方がいいよ」

シャルロッテは苦笑いを浮かべながらギンガに鏡を見るように促した。

シャルロッテに言われて手術台の横に備え付けられた鏡を覗く。

「へっ？」

鏡の中に映った自分の姿を確認した瞬間、私は絶句した。鏡の中に映ったのは、背中に巨大な淡桃色の二枚羽を生やした10歳前後の私の姿……………

「ど、どうということ……………？」

「いや、パーツの規格が10歳の奴で止まってたから身体の方を退化させるしかなかったんだよ」

なぜギンガ専用の戦闘機人パーツが10歳のモノで止まっているのかというと……………ギンガとスバルは基本的にマリエルの所で定期メンテナンスを行うので、10歳以降のギンガ・スバルの生態データが手に入らなかったからだ。

その原因は“陸”と“海”のいがみ合いにあるのは、言うまでもない。

「じゃあ、背中の翼は何ですか!？」

「単なる趣味」

「単なる趣味で私の身体を改造するなあ！！！！」

ギンガは吠えた。

「言つとくけど、その翼は単なる翼じゃないわよ？超加速性能に加えて周囲の魔力素を集束する機能。使いこなせれば、貴女は最強よ？」

「だからって本人の同意なく改造のは事実でしょ！！」

「もう一回言ってくれますか？」

特務零課部隊長室で2人の部隊長 高町 なのはと八神 はや
てが面会していた。しかし、なのはは何時ものような笑みを浮かべているが、この空間に実際に入ったらわかるが 怒っている。原因は目の前のタヌキ。

「いや……六課の隊舎が使えんようになったから、このアースラを使わせてくれへんかな、って」

「ダメです。」

「結構スペース余ってるんやから別にええやんか」

はやては可愛く媚びるが、なのはは「親友だから」という理由で了承するほど優しくはない。

「はやて」

冷たい声で呼ばれてはやての身体がビクツと震えた後、凍りついたように動かなくなった。

「私は忠告しましたよね？六課も襲撃される可能性があるから、注意するようにと」

「ひゃ、ひゃい」

「それにも関わらず貴女はほとんどの戦力を警備に当てた。誰に責任があるかは明白ですよね？」

「……………はい。」

「わかったなら、さっさと出ていきなさい。私は忙しいんです。」

はやては肩を落としてトボトボと部隊長室から出ていった。

「まったく……………これだから人脈だけのしあがって来た愚か者は」

はやてが出ていったドアを見詰めながら、忌々しそうに呟いた。
なのはは若く見えるが、実年齢は100歳を越えている。不老なので見た目は変わらない。また、はやてと違い、なのはは部隊を率いた経験もある。（幻想郷で）

「プシュ」

「母さん、聞きたいことがあるんだ。」

扉を開けて入ってきた杏子。先の闘いで負った傷はなのはの治癒術によって完全に癒えている。

「対象の意識をそのままにして身体だけを自由に動かすことってできるか？」

「唐突だね。まあ、可能だよ。人間は電気信号によって身体を動かしてる。その信号を途中で書き換えれば、身体は部分の意識に反して動く。」

「なら、それを解除するにはどうすればいい？」

「簡単な話だよ。電気信号を書き換えている根源を破壊すればいい。」

「そっか……………」

杏子は考え込む 或いは、思い返す ように呟いた。

「響を助け出すのは、杏子に任せるよ。」

なのはの言葉に杏子は驚いた。“響”という名前を知っているのは一度話したことがあるから、納得できる。しかし、その響と戦闘したということはなのはに言っていないからだ。

「ふふ グーグンニルに聞いたんだよ。杏子が怪我を負うことなんて滅多にないからね。」

「母さんに隠し事するだけ無駄か……………」

「そうだよ さて、私はエルザにデバイスを渡しに行かないといけないから、失礼するよ。」

ちゃんと…………… 響を助け出して来なさいよ？ 杏子の妹なら、私の娘

でもあるんだから。」

なのははそう言い残すと部隊長室から出ていった。

「わかってるよ、母さん。」

なのはが出ていった扉を見詰めながら杏子は穏やかな笑みを浮かべて言った。

ちなみに、先日のスカリエッティの宣戦布告における被害は非常に少ないものであった。負傷者も数名居るだけである。まあ、実際は重傷者も出ていたが、なのはが靈力を流し込んで自然治癒力を極限まで高めておいたので比較的軽い怪我になっている。

スカリエッティによる総力戦が行われる数日前の出来事であった。

第27話（後書き）

グダグダですいませんでした。ギンガ魔改造はスバルと同じ戦闘機人なのに一人だけ能力が低いのは可哀想だったからです。（本編での活躍は未定）

ちなみに、この作品のダイダロスはノリがいい天才科学者です。

第28話

第1世界 ミッドチルダの首都クラナガン。魔法技術が著しく成長したその都市は大パニツクに陥っていた。

スカリエッツィの宣戦布告という名の地上本部襲撃。それからさほど時を置かずに次元犯罪者ジェイルⅡスカリエッツィは総力戦を挑んできた。

クラナガンに向かって進軍する千を超える航空機型ガジェット、二千を超える大型ガジェット、一万を超えるガジェットの？型。合計一万三千を超えるガジェットの軍勢に加えて、10人の戦闘機人がクラナガンを目指している。

地上本部の守りの要である“アインヘリアル”も全て破壊され、守護に当たっていたベテラン魔導師も全て撃破された。

これによりクラナガンだけでなく、ミッドチルダ全域の市民がパニツクに陥った。

SIDE NANOHA

廃棄都市区画と市街地の境目であるハイウェイ。残っている全戦力を集結させた地点になのはたち特務零課の姿があつた。しかし、なのは壁にもたれ掛かりながら考え事をしていた。

どうも腑に落ちない。一万三千以上のガジェットをどうやってこんな短時間に……。予め、製造してたとしてもこんだけのガジェットの格納できる筈がない。

「たった数日でガジェットの量を産できる物……。まさかつー！」

まさか、スカリエッティは《増殖鏡》ブリードミラーを持っているというの！？

《増殖鏡》ブリードミラーというのは、なのはがとある企業から依頼を受けて製造した無機物を無限コピーする能力を持った鏡である。しかし、その企業が強盗に襲われた時に一緒に奪われて現在は行方もわからない。

「もし、スカリエッティが《増殖鏡》を持っているとしたら……。拙いね」

《増殖鏡》は魔力がある限り無機物を無限に生成できる。スカリエッティは膨大な魔力を宿している《レリック》を持っている。なら、際限なくガジェットの生み出すことができる。

『玉藻前』

『何じゃ？奈々夜』

『今回の大戦、本気を出さないといけないかもしれない。』

『ああ、主の五感を通して状況はわかっておる。“神通力”の封印も解除するか？』

『……………いえ、神通力の封印は解除しません。今の私は……………“博麗の守り神”ではありませんから』

『……………わかった。』

なのはの中にいる玉藻前は悲しそうに言った。

（ウー！！ウー！！ウー！！）

敵の接近を報せるけたたましいサイレンが首都防衛戦にあたる魔導師全員に聞こえるように鳴り響いた。

ガジェットの軍勢はもう目前まで迫っていた。

「特務零課部隊長より特務零課全前線メンバーに告げる。一機たりともこの防衛線を通すな！！」

「……………了解！！……………」

私の号令に前線メンバー全員が元気良く返事した。さあ、私も全力でやらないとね!!

「レイジングハート!!」

「はい!!」

左手にパラディオン、右手にレイジングハート。騎士甲冑は防御力を落とし、素早さを上げたパラディンフォーム。戦闘準備を整えたのはガジェットの軍勢に真っ直ぐ突っ込んで行った。

「アブソリュート!!」

「ヴォーパルソード!!」

「天魔、爆砕!!」

トリシューラの魔法がガジェットを凍り付かせて、ブリューナクの水の刃がガジェットを切り裂き、シャルロットのグランベールがガ

ジェットを叩き潰す。

「いやゝ一万の軍勢だから、切りがないねゝ」

「同感です。」

「結構破壊してる筈なんだがな!!」

会話しながらも3人は順調にガジェットを駆逐していく。シャルロツテはグランベールで、ブリューナクは大気中の水蒸気を使った水の刃で、トリシューラは先日完成した双銃型デバイス“エクスマキナ”で複数のガジェットを一度で凍り付けにする。

「みんな、少し時間を稼いでゝ」

緊張感の無い声でお願いしながら、シャルロツテは一度後ろに下がる。

後ろに下がったシャルロツテはグランベールに刻まれた魔法文字を起動させて周囲の魔力素を集束する。

「アブソリユート・バレル!!」

エクスマキナを交差するように振り抜くとエクスマキナの銃口からレーザーが飛び出し、ガジェットを凍り付けさせる。

「アクアバレット!!」

ブリューナクは指先から水の弾丸を放ち、ガジェットを撃ち抜く。

「チャージ完了ゝ。みんな、下がってゝ」

シャルロツテはグランベールを高く掲げていた。グランベールの切っ先には膨大な魔力が集束されて蒼く輝いている。トリシューラとブリューナクは左右に避ける。

「ブラストキャリバー！！」

ハイウェイに一直線の裂け目ができ、射線上に居たガジェットは一機残らず消滅した。

「アブソリュートウォール！！」

トリシューラが地面に手を当てると巨大な氷の壁がガジェットの軍勢に立ちはだかるように出現した。

「これで少し休憩できるでしょ。」

そう言いながらトリシューラたちは座り込んだ。開戦直後から一機でも多くのガジェットを破壊するために広範囲攻撃を使っているため、魔力の消費が激しい。

「空の方はどうなってるのかな？」

くミッドチルダ 上空く

「轟天」

漆黒のトライデント《ノワール》をガジェットに突き刺し、内部から魔力を解放してガジェットを破壊するエルザⅡマリア。

「凍結せよ!!」

デュランダルから放たれる氷結拡散波動でガジェットを凍り付けさせて、それを他のガジェットにぶつけることで破壊するジャンヌⅡダルク。

「はあっ!!!!ていつ!!!!」

パラディオンでガジェットを切り裂き、レイジングハートで突き刺し、ガジェットを破壊していくのは。

「雷符『タ立』!!」

スペルカードを使って発生させた雷でガジェットを撃破する煌夜。

以上の四名が空のガジェット殲滅に当たっていた。

「デイベイン……バスター!!」

ドカンッ!!ドカンッ!!ドカンッ!!

航空機型ガジェットは密集隊形で飛行しているため、連鎖的に爆発していく。

「結構減ったね。」

「それでも、まだまだ残ってます。」

「スペルカードの残量もあんまりない。」

「敵……多すぎ」

（うーん……魔力散布は不十分だけど、地上に霧散してる魔力も使えば……）

「3人共、少しだけ時間を稼げる?」

「もちろん」

「じゃあ、少しだけ時間を稼いで。私が一撃で終わらせるから。」

なのはは一旦、後ろに下がって準備を開始した。なのはが準備を開始すると同時に戦闘地帯に散布された魔力が舞い上がる桜吹雪のようになのはの周囲に集まって行く。

【? ? ? ?】

レイジングハートがカウントを進めるにつれて桜色の球体は徐々に大きくなっていく。

【?...?...?】

「みんな、私の後ろに！！」

「はい！」

桜色の球体がドクンツと脈打つ。集束された魔力は今か今かと解放の時を待っていた。

【?.....?.....?.....ZERO】

「スターライト……ブレイカーアア!!!!!!」

く
キ
イ
イ
イ
イ
ン

ド
ゴ
ー
ン
ッ
！
！
！
く

解放された魔力は極太な一筋の閃光と為って、ガジエットの軍勢を

殲滅した。

衝撃波が治まるとハエのように群がっていたガジェットは一機残らず消滅した。

「すごっ！！」

「たった一撃で……………」

プシューッという音を立てて排気ダクトが開き、排熱される。

エルザやジャンヌ、煌夜は初めてみるのはの全力集束砲に驚きを隠せなかった。

「これで暫くは大丈夫かな？」

「機動六課ロングアーチから前線メンバーへ！！緊急事態発生！！クラナガンの東部に向けて進軍中のガジェットを発見！！」

「特務零課部隊長から機動六課ロングアーチへ。そのガジェットは私が1人で破壊します。」

「ええっ！！無茶です！！敵は千機を越えて」

ルキノが言い終わる前になのはは通信を強制的に切断した。

「煌夜たちは地上を手伝って上げて。」

「……はい。」

煌夜たちは地上に向けて真っ直ぐ降りていく。なのはは転移魔法を使ってその場から消えた。

なのはが転移した先はクラナガン東部に繋がる道路の上だった。此方の方面にはまったく防衛線が敷かれていない。

「さあて、私も本気を出そうか。」

カチンという音を立てて封印が解放された。押さえ付けられていた妖力と霊力が際限なく身体から漏れ出す。

髪は緋色に染まり、髪止めが外される。頭のとっぺんに先端が黒い狐耳が生えて、尾てい骨の辺りから緋色の九本の尻尾が顔を出す。

なのはが準備を終えると同時にガジェットの軍勢がなのはの前に現れた。

「我は高町 奈々夜。元“博麗の守り神”の名にかけてこの先には一機たりとも通さん！！」

なのははガジェットに向かってそう宣言すると黒塗りのカードに星が描かれたスペルカードを取り出した。

「霊符『夢想封印・黒』！！」

刹那、黒い弾幕がガジェットを覆いつくした。

第28話（後書き）

今回登場したデバイスの設定

エクスマキナ

トリシューラの双銃型ストレージデバイス。ティアナのクロスミラーージュに比べて銃身が長く、カートリッジがリボルバー型。色は青と白。

ノワール

エルザのトライデント型のストレージデバイス。全体が漆黒の槍で柄の部分に単発式のカートリッジシステムを内蔵している。

第29話

第28話 「紅の姉妹」

特務零課部隊長による大規模殲滅魔砲（誤字に非ず）を眺める一つの影があった。

「開戦からあんまり経ってないのにぶっぱなすな」

《戸惑ってたら、防衛線を突破されてしまいますから。》

「違いねえ」

杏子とグーグンニルのペアは大激戦地帯となっている中央ハイウェイから少し離れた場所にある別のハイウェイに居た。

杏子の目的は当然の如く響である。最初はアースラに待機して響がクラナガンに向かっていているという報告を聞いて降りてきたのだ。

「……此方にも敵さんが来た見てえだな。」

《はい。》

杏子はグーグンニルを握り締めて立ち上がった。杏子の視線の先に

は数百機ほどの陸戦型ガジェットを率いた1人の少女。

先日会ったときと同じように感情という光がまったく見えない空虚な瞳、手に握るのは小さい斬艦刀。

「よう。また会ったな。」

「……………殲滅」

響は周囲に居るガジェットに命令を下す。命令を受信したガジェットは杏子に一斉に襲い掛かる。

「グーグンニル、コキュートスフォーム!!」

《Yes!!》

杏子はこの日のために開発した切り札を解放した。紅の騎士甲冑に薄い青色のラインが浮かび、青地の布を白で縁取りしたジャケットタイプの上着が追加された。

グーグンニルの刀身と柄の付け根の部分に白と赤で彩飾された突起が生え、刀身部分がスリムになる。

何よりも目を引くのが、杏子の背中に浮かぶ六枚の氷の羽根だ。

杏子がグーグンニルに搭載した氷結特化モード《コキュートスフォーム》。

多数対一の戦いを想定して追加されたフォームだ!!

「氷月!!」

杏子が槍を振るうとガジェットが凍り付けになる。

「氷月氷槍陣！！」

グーグンニルを地面に突き刺すと無数の氷の槍がガジェットの装甲を貫いていた。

「さあ、これで邪魔者は無しだ。」

ガジェットはまだまだ残っているが、響の後ろにはいつの間にか大きな氷の壁が隔たり、ガジェットの介入を防いでいた。

「……………主の志を妨げる者、排除します」

「お前の目を……………すぐに覚まさせてやるぜ！！」

くガキンッ！！！！

斬艦刀と槍がぶつかり合い、火花を散らす。

「目を……………」

杏子は左手を突きだし、魔力をチャージする。

「覚ましやがれ!!」

至近距離での砲撃魔法。それなりに魔力が籠められた一撃を受けた響は吹き飛ばされるが、すぐに体勢を立て直した。

「まだ終わらねえぞ!!」

《短距離瞬間移動》で響の懐に入り込み、魔力を乗せた拳を叩き込む。

くガシツく

常人では反応さえできるかどうか分からない程度の素早い追撃。それを響は反応するだけでなく、防いでみせた。

「捕らえた」

響は斬艦刀を高く振り上げて杏子に向かって一直線に振り下ろした。杏子は右手に持っていたグーグンニルで響の斬艦刀を受け止めた。

「ていつ!!」

両手が塞がった状態で杏子は響の横腹に鋭い蹴りを入れた。

体勢が崩れたことで両手の拘束が外れて自由になる。

その刹那……

くザシュ!!く

杏子の背中から鮮やかな鮮血が噴水のように噴き出した。杏子の背後に居たのは……“もう1人”の響だった。

「ぐっ………でやっ!!」

杏子は背後の響を蹴り飛ばす。すると、背後から襲い掛かってきた響は白い煙となって霧散した。

（有幻覚!? 面倒な魔法………というか、確立されてない魔法だろ!!）

有幻覚というのは、実体を持つ幻影のことである。幻影魔法系統の究極技法と言われているが、未だにそこに到達した者は居ないとされている。

それどころか、今では机上の空論として扱われている。

「……………」

響は1人ではなく、3人に分身する。杏子は背中の傷を氷で応急手当を施すと再びグーグンニルを構えた。

4人は動き出したのは、ほとんど同時だった。しかし、杏子の狙いは響の本体。《短距離瞬間移動》を使用して一番奥の響に肉薄する。

くボフンツく

「なっ!？」

杏子が肉薄した響は偽者の有幻覚だった。しかも、ただただ消滅するだけに終わらず立ち上った白い煙が杏子の視界を奪った。

くドスツ　ドスツ　ドスツく

「えっ……………?」

杏子の腹部から三本の刀が突き出ていた。顔だけを後ろに向けると響が作り出した有幻覚の3人が杏子の腹部に斬艦刀を突き刺していた。

「っ！！コキキュートスバースト！！」

背中に浮かぶ六枚の氷の羽根の内一枚を氷の礫に変えて撃ち出す。氷の礫を至近距離で浴びた“響たち”は白い煙を上げて消滅した。どうやら全員、有幻覚だったようだ。

「私の勝ちです。」

響は感情を感じさせない淡々とした口調で勝利を口にした。本物の響がガジェットの侵入を阻んでいた氷の壁の前にいた。

くピシッく

杏子が作った氷の壁に罅が入り、がらがらと崩れ落ちた。進行を阻んでいたモノがなくなったので、ガジェットの大軍が雪崩のように押し寄せてきた。

杏子の身体はもうボロボロだ。グーゲンニルを支えにして立っているのがやっとの状態だ。

ソウルアクセサリーを使えば、この傷もあつという間に癒えるが、響を助け出す算段がついていないこの状況で使うのははばかれる。

（くそっ……………響が苦しんでるのに、アタシは何もできないのかよ……………）

「…………殺せ」

響は涙を流しながらガジェットに命令する。命令を受けたガジェットは言われた通りに命令を遂行しようとする。

その刹那……………

「ロビンさん特製爆弾！！ロビンボム！！」

上空から液体が入った試験管が降ってきた。試験管と試験管がぶつかり、液体が混じり合った瞬間に爆発を起こした。

「天才科学者ロビンフット、此処にさんじょうう！！」

杏子の危機に颯爽と現れたのは、空を駆けるライドボードに乗ったクラスメイトのロビンフット。ヴィルヘルムだった。

「ロビン！？お前、どうして此処に居る！？」

「キョウコの危機を感じたから脱け出して来た」

現在、クラナガン全域に避難警報が発令されており、ザンクト・ヒルデ魔法学院でも最大警戒態勢を敷いているはずだ。いくら鬼のシスター・シャツハが居ないと言ってもその警戒態勢を潜り抜けて戦場に来るのは至難のワザだ。

「それに脱け出して来たのは私だけじゃないよ？」

「は？」

くドゴーンッ！ー！

奥に控えていたガジェットを押し潰すように巨大な氷塊が飛来した。

「私も居ます」

「アテナまで！ー！」

「さあて……キョウコに嬉しい知らせだよ。あの娘を操ってる正体がわかったよ。」

「っ！ー！本当か！？あぐっ……………」

身体を起こそうとするが、身体に激痛が走り、逆に倒れそうになる。そんな杏子をアテナが支えた。

「無茶しないの。」

「大丈夫だ。」

杏子が傷を負った部分に円環式魔法の魔法陣が浮かび上がり、ソウ

ルアクセサリーの濁りと引き替えに傷を瞬時に治していく。
見たことのない魔法にアテナは驚き、ロビンフットは好奇心に目を輝かせた。

「ふう〜。それで響の奴を操ってるのは何処のどいつだ？」

「あの娘が付けてる金色のサークレット。あれが脳からの電気信号を書き換えてる。」

「そう言うことが……。感謝するぜ、ロビン！！」

杏子はグーグンニルの柄の方で地面を叩いた。すると四方から鎖型のバインドが飛び出し、響の四肢を拘束する。杏子は待っている間に何もしなかったわけではない。

響を操っている根源でわかった瞬間、行動に移れるように設置型のバインドを4か所に設置していたのだ。

「ガジェットは私たちに任せて！！」

「ああ！！」

地面を蹴り、杏子は響の元に疾走する。立ちはだかるガジェットはロビンフットとアテナが破壊し、杏子のための道を作る。

そして、杏子は爪楊枝のように細く長い氷のレイピアを作り出す。響はバインドを必死に破壊しようとするが、四つのバインドはそれぞれ術式を僅かに変えてあるので破壊するのにそれなりの時間を要する。

「ジェイル!! スカリエッティ!! 響は返して貰うぜ!!」

そのまま真つ直ぐに杏子は響の頭に装着されたサークレットを氷のレイピアで突き刺した。
響の頭を一ミリも傷つけないように。レイピアが刺さった場所からサークレットが凍りつく。

くピシッ ピシピシ!!!

くパキーン!!!

金色のサークレットは甲高い音を鳴らして弾け飛んだ。すると、響の瞳に感情の色が戻ってきた。
一瞬惚けたような表情を浮かべたが……

「響………だよな？」

「……他に誰か居る？」

響は笑みを浮かべながら杏子にそう言った。
その言葉を聞いた杏子の目尻から涙が溢れだし、響の身体を杏子は強く強く抱き締めた。

「まさか……もう一度会えるなんて思ってたかった」

「私も。」

「あの……お二人さん？今の状況、忘れてませんか？」

アテナにそう言われて杏子はようやく正気に戻った。響を取り戻しても大元であるスカリエッティが残っている限りガジェットが行動を停止することはない。

杏子は響を拘束していたバインドを解除するとグーグンニルを掴み、構える。

「お姉ちゃん、服持っていない？さすがにこの服は……」

どうやらスカリエッティのセンスは響には共感されなかったらしい。

「そう言われてもな……」

シャルロットたちに使っていた衣服を形成する宝石は持っていない。

「ちょっと失礼」

ロビンフットは響が持っていた斬艦刀にペタペタと触る。すると、ロビンフットはニヤリと笑った。

「主の名の元に命じる。戒めを解き放ち、主の権限を献上」

ロビンフットがそう唱えると響の持っていた斬艦刀が姿を変えた。

柄は槍のように長くなり、鈍い鉄の刀身は蒼と白の西洋大剣（両刃大剣）に変わり、逆方向には同じ色の短剣が付いている。

「その剣ね、少し改良は加えられてるけど私が作ったモノなの。私自身が使えなかったから、捨てたけど。」

「せっかく作ったデバイスを棄てるなよ!!」

「はいはい。アームドデバイスだから、騎士甲冑生成機能はちゃんとあるよ。ちなみに、名前は“ヴァイスリッター”」

「う、うん。」

響は“ヴァイスリッター”を掲げて騎士甲冑を纏う。

杏子の騎士甲冑を白色に変えた衣装、両腕には青い指先が出るタイプのロンググローブ。足には茶色のブーツ。

「わあー イメージ通り」

「感激は後にしな。」

「うん!!」

杏子、響、アテナ、ロビンフットはガジェットの大軍に突っ込んで行った。

ちなみに、この二人が一緒に闘う姿を見ていた誰かが彼女らを髪の色から「紅の姉妹」と呼ぶようになったのは完全な余談である。

第29話（後書き）

JS事件編も佳境に突入して来たぜ！！
杏子のコキユートスフォームは東方のチルノを見て思いついたネタ
です。

第30話

第30話 「戦場に舞い降りる聖王」

休むことなく続くスカリエツティとの総力戦。杏子は響を取り戻し、管理局側は戦力が1人だけ増えたことになる。しかし、敵は疲労を知らない機械兵。しかも、その数は無限に近い。防衛線を敷いている管理局側も疲労困憊状態だ。

「喰らえ、天狼!!」

霊力で造り出した狼がガジェットを喰らっていく。総力戦が開始してから五時間以上経過しているが、奈々夜に疲労の色は全く見えない。玉藻前を取り込んだことで人間から妖怪（神）にシフトチェンジした奈々夜に疲労という概念は無いに等しい。

「面倒だな。」

ガジェットは途切れることなく押し寄せてくる。薙ぎ払うことは容易いが、焼け石に水。ほとんど意味は為さないだろう。

「まあ、文句を言われるだろうが……勘弁して貰おう!!」

奈々夜は渾身の力を込めて踏んだ。すると、ハイウェイに亀裂が入り、ハイウェイを見事に寸断した。ガジェットは知能を持たない機械兵だ。馬鹿正直にハイウェイの亀裂を辿って登って来るだろう。

「繋がれ」

奈々夜は天に手を掲げて“空間を繋げる程度の能力”を発動させる。すると、ハイウェイの寸断箇所 ちょうど崖のようになっていた所の真上にポツカリと穴が空いた。その穴から落ちてきたのは、大量の海水だった。奈々夜は海と空間を繋げて海水を召喚したのだ。そして、海水は這い上がっている最中のガジェットをすべて押し潰した。

「今度はもっと広範囲にしようかな?」

《止めてください。自然が壊れます》

「わかってるよ。」

次に奈々夜は黒い月が描かれた白地の札を取り出した。これは幻想郷から帰還した奈々夜が造り出した完全オリジナルのスペルカードだ。

「郷符『白き世界』」

奈々夜がスペルカード『白き世界』を発動すると範囲内に入ったガジェットは地面から生えた白い刃で貫かれた。

『白き世界』というスペルカードはトラップ型のスペルカードであり、一定の範囲内に入った対象を容赦なく破壊するのだ。

「これでこのルートを使ってクラナガンに侵入することはできなくなった。」

《マスター、廃棄都市区画の方で強大な召喚反応です。》

奈々夜はその場から機動六課が戦闘機人組と死闘を繰り広げているであろう廃棄都市区画の方角を見た。

そして、奈々夜の視界に映ったのはビルの高さをゆうに越える大きさの黒いドラゴンと白い巨人が闘っている光景だった。

「何処の大怪獣バトルなんだろうね。」

奈々夜は苦笑いを浮かべた。

「……………空の方にも増援が来たらしいね。」

奈々夜の視界はクラナガンに向けて飛来するガジェットの大軍を捉えた。

「緊急事態発生！！緊急事態発生！！地下水路を通ってガジェットが市街地に侵入！！繰り返」

通信は途中で途切れた。恐らく通信拠点が破壊されたため、全体通信が使えなくなったのだろう。

しかし、奈々夜はまったく焦りの色を見せない。敵の奇襲など幻想郷に居た時は普通に行われていた。奇襲にいちいち驚いていたら身が持たない。それに、今回の奇襲は十分予想できた。

『リーファイア、聞こえるか？』

この緊急事態に対して奈々夜はとうとう切り札ジョーカーを切ることを決めた。

『はい。』

『状況はこちらが不利。リーフィアは市街地に侵入したガジェット
の殲滅をお願い。』

『わかりました。』

「さあ、私たちは此処から援護しようか？」

《はい。》

一方、リーフィアはアースラの転送ポートに向かっていた。

「待つて、フィアお姉ちゃん!!」

「ヴィヴィオ……」

リーフィアの前に現れたのはヴィヴィオだった。部屋から急いで追いついて来たのか、いつも抱いているウサギのぬいぐるみも持っていない。

「ヴィヴィオも連れて行って!!」

「駄目です」

ヴィヴィオの懇願を一刀両断。それでも、ヴィヴィオは諦めない。

「私もなのはママを助けたいの!!」

「それでも駄目。大体、闘う力を持ってないヴィヴィオに何ができるの?」

「……………闘う力があれば、いいんだよね?」

「は?」

ヴィヴィオはポケットの中をこそごとと漁り、あるモノを取り出した。ヴィヴィオが取り出したモノを見てリーフィアも吃驚仰天。

何故なら、ヴィヴィオが取り出したモノはリーフィアがなのはより受け取った“聖王の指輪”だった。

「ゆまちゃんに手伝って貰ってフィアお姉ちゃんのポケットから盗んだの。」

（あのいたずらっ子が！！）

ヴィヴィオはそのまま自分の指に“聖王の指輪”嵌めた。すると、ヴィヴィオの身体に流れる聖王の血に反応して“聖王の指輪”が光り輝いた。

埋め込まれたレリックから膨大な魔力が溢れだし、ヴィヴィオの身体に吸い込まれていく。膨大な魔力はヴィヴィオの幼い四肢を急激に成長させる。

リーフィアの前に立っていたのは、15歳ぐらいの姿に変貌したヴィヴィオだった。

腰には黒いパレオのような腰巻きで下半身を覆い隠し、黒いボディースーツの上に腹部には薄いパープル色の装甲を装備し、白いジャケットを羽織り、首元に鮮やかな赤色のマフラーを巻いた騎士甲冑姿。

「これで文句ないでしょ？」

「はあ……私から離れてたら駄目ですよ？」

「わかったー！」

リーフィアとヴィヴィオがアースラの転送ポートを使ってクラナガンにたどり着いた時は酷い有り様だった。

ビルの窓ガラスは割れ、あちこちから火の手が上がっている。幸いなことにクラナガンの住民は地上本部の方に避難しているため、一般市民に被害はない。

「ヴィヴィオ、私たちの目的はこの市街地に居るガジェットの掃討。無理はしないように。」

「わかってるよ、フィアお姉ちゃん」

二人は同時に駆け出した。

ガジェットたちは隊列を組みながら地上本部に向けて進軍しており、進軍しながら建物を破壊して回っている。

リーフィアは腰に携えられた双剣型ストレージデバイス《カトラス》を抜刀するとガジェットの軍団に突っ込んで行った。

「緋王絶園翔！！」

全身に炎を纏い、ガジェットたちに突っ込んで行く。すると、リーフィアが通った跡に炎が立ち上り、ガジェットは残らない。

「右手に雷、左手に業火！！」

右手の剣にバチバチと雷鳴が、左手の剣に業火が纏う。そして、異なる2つの属性を混ぜ合わせて放った。

「ツインキャリバー！！」

炎の渦がガジェットを呑み込み、破壊する。雷撃がガジェットを内部から破壊する。僅か数秒でリーフィアが破壊したガジェットの数は50機に達した。

「はあああ！！！」

赤いマフラーをたなびかせながら、ヴィヴィオは虹色の魔力を纏わせてガジェットの装甲を打ち抜く。

「デインバスター！！！」

虹色の砲撃を放ち、ガジェットを撃ち抜く。
しかし、背後に回った四機のガジェットに囲まれる。

くドスッ ドスッ

ヴィヴィオの首に巻かれたマフラーが鋭い刃となってガジェットを貫く。

「えいつー！！！」

身体を回して貫かれたままのガジェットを他のガジェットにぶつける。

（とても初めての実戦とは思えない。これがヴィヴィオの特殊スキル“高速学習能力”の力……………）

ガジェットを駆逐しながらリーフィアはそんなことを思った。

聖王の血筋が持つ特殊スキル「高速学習能力」は初実戦のヴィヴィオを急激に成長させる。このスキルは見た魔法もコピーできるので自分の資質と適合すれば、すぐに使える。

ヴィヴィオは特務零課で行われる模擬戦の様子をいつも見ていた。ゆえに、シャルロッテたちと似通った動きが特徴的だ。

「それにしても……………数が多すぎる。ヴィヴィオと二人がかりでも魔力が持たない。」

もう百機を越えるぐらいのガジェットを撃破したが、ガジェットは無限に湧いてくる。

「集え、虹色の静光……！」

ヴィヴィオは右手を天に向けて掲げる。すると、虹色の魔力がその右手に集まっていく。

純粋な虹色ではなく、その球体にはリーフィアの魔力光である色も含まれていた。

ヴィヴィオの高速学習能力が造り出したオリジナルスペル。「画面越しに見た奈々夜の集束砲を元に生み出した魔法。」

「セイクリッドキャリバーアア!!!!!!」

右手をガジェットの軍団に向けて集束された魔力を解放した。解放された魔力は虹色の閃光となり、ガジェットの軍団を蹂躪した。

「ヴィヴィオ。この先には正面防衛線が張られてるんだけど？」

リーフィアは苦笑いを浮かべながらヴィヴィオにそう囁いた。それを聞いたヴィヴィオは固まった。

「フィアお姉ちゃん!!そうことは先に言ってよ!!」

両手をぶんぶんとするヴィヴィオ。身体は大きくなっても精神は子供のままだ。

「こちらヴェロッサアコース査察官。スカリエッティのアジトよりガジェットの発生源である魔法具を回収。」

突然戦線に参加する全メンバーに宛てられた通信。それは疲労困憊な戦線メンバーを活気付けるモノだった。

第30話（後書き）

ヴィヴィオ、初の実戦。ヴィヴィオの高速学習能力は杏子たちが使うSランクスルまでコピーすることはできません。

第31話

首都クラナガン周辺で行われている超大規模な防衛戦。疲弊している味方、無限に湧き出てくる雑魚兵。

その最中、希望をもたらす一つの報せが舞い降りた。査察官ヴェロツサ・アコースがガジェットの発生源である増殖鏡《ブリードミラ―》を見つけたこと。

そして、そのすぐ後、また味方の士気を上げる報せが入ってきた。

「こちら機動六課ロングアーチ。機動六課ライトニング01がスカリエッティのアジトに侵入!!」

その報せは疲弊していく味方を盛り返すには十分な報せだった。

「シャルロッテ、聞いたか？」

「聞いたよ」

「あと数分………持ちこたえれば、こっちの勝ち!!」

「という訳でコイツの出番だ!!」

トリシューラはエクスマキナに量子変換されていた丸薬を取り出して、口の中に放り込む。

すると、空っぽに近かった魔力が十分な量だけ回復した。

なのは（奈々夜）はこの防衛戦がかなりの長期戦になることを予想して特務零課のメンバーに自身の魔力を凝縮した丸薬を渡しておいたのだ。

「さあ、ガジェットども。覚悟しろよ？」

トリシューラはニヤリと笑みを浮かべ、エクスマキナを構えた。

トリシューラは視認できる範囲に沿って無数の魔法陣を展開する。

ガシュンッ!! ガシュンッ!!

撃鉄が下ろされ、二発がロードされる。（実質は四発ロード）

「これが…私の最強広域殲滅型魔法!! 《アブソリュートバスター・フランクスシフト》!!」

周囲に展開された魔法陣一枚一枚から一発ずつ《アブソリュート・バスター》が発射される。

一発一発がガジェットを凍り付かせて殲滅していく。一回の魔法でトリシューラが視認できる範囲のガジェットは居なくなった。

「後輩にばかり任せて居られません!!」

ブリューナクの左手に大きな水の槍が形成される。そして、ブリューナクはその大槍をガジェットの一団に向けて投擲した。

「ティロ・ファイナーレ」

パチンツという指を弾く音と同時に投擲された水の大槍は周囲の熱を奪い、水蒸気爆発を起こした。

「私も行くよ」

シャルロットは戦斧形態のグランベールを握り締めたままガジェットの一団に飛び込む。ガジェットからの集中砲火を受けるのは当然。しかし、シャルロットはそれを逆手に取った。

「リフレクシオン」

シャルロッテに向かって放たれたビームは寸分変わらず砲撃主に返って行った。

シャルロッテの新魔法リフレクションは砲撃系統の魔法をそのまま反射する魔法である。普通の魔導師なら、2回で魔力を使いきるような魔法だが、高度な魔力運用が持ち味なシャルロッテは何回でも使える。

閑話休題

「ブリューナクがぶちまけた水。利用させてもらうよ!!」

周囲に冷気が立ち込めて気温が急激に下がる。すると、ブリューナクの魔法で散らばった水蒸気が霧に変わり、ガジェットの世界を奪う。

「凍てつけ　氷雪の大地!!其は荒ぶる大地の叫び!!」

トリシューラとブリューナクが同時に地面に両手をつき、魔法を発動させる。

ブリューナクが術式を構築し、トリシューラが膨大な魔力を流し込

むことで完成する魔法。

「『雪の女王の理想郷』！！」

霧のせいで前が見えないガジェットを凍った地面から無造作に生える氷の刃が貫いた。

ミッドチルダ 上空

航空機型ガジェットの襲撃を受けているミッドチルダ上空。その防衛に当たっていた3人は煌夜を守るに展開していた。

「はああ！！！」

くザシュッ！！ ドカーンッ！！く

「轟天！！」

煌夜の詠唱の時間を稼ぐため、2人が奮闘する。時折、謎の砲撃が2人の手助けをしてくれる。

「さっきからガジェットを撃墜してる砲撃……一体誰が撃ってるんだろ？」

「取り敢えず敵ではないことは確かでしょう」

「2人とも、ご苦労様。詠唱完了。」

パラパラとネクロミコンのページが捲られる。

「灰白き氷雪の雲　　今こそ眼下の敵を凍結せよ。」

明るかった空が急に曇り、季節外れの雪がちらつく。その雪がガジェットに当たると雪は一瞬で氷となり、ガジェットに張り付いた。氷が張り付いたことでバランスを失ったガジェットは地上に真逆

さま。次々と進軍してくるガジェットは海に落下していく。
とは言うものの、この魔法はずっと維持できる訳ではない。いくら
ネクロミコンの概念効果で消費魔力を減らしても煌夜の魔力量では、
5分前後が限界だ。

（この5分の間に決着がつけば、いいけど……………）

煌夜は曇天の空を見上げながらそう願った。

「こつちに増援は来ない見てえだな。」

杏子はガジェットの残骸を蹴りながら呟いた。杏子たちが担当して
いた防衛線は完全にガジェットが殲滅された。

響のIS―《幻影舞踏》は、実体を持つ幻覚を造り出す能力で攻撃
を受けない限り消滅しない。4人ぐらいの有幻覚を造り出してガジ
エットを倒していった。

「アタシらは市街地に行くぞ。ヴィヴィオの奴とリーフィアが先行してるが、そんなに持たないだろ。」

「『わかった。』」

4人は市街地で戦闘しているヴィヴィオとリーフィアの救援に向かった。

「居た!!」

杏子たちがたどり着いた時にはヴィヴィオとリーフィアはかなり押されていた。

何より闘いに不慣れなヴィヴィオをサポートを行いながら戦闘しているため、リーフィアの負担が大きい。

「はあああつ、天翔煌牙斬!!」

真つ先に突っ込んで行つたのは、響だった。ヴァイスリッターを振るい、その衝撃波を魔力で強化して飛ばす。衝撃波と建物にプレスされたガジェットは無残に散った。

「コキュートス・バースト!!!!!!」

コキュートスフォームの残った五枚の氷の翼を全て使った《コキュートス・バースト》。フル威力まで行かないが、残りの五枚の翼を使った《コキュートス・バースト》の威力は絶大で周囲のガジェットを凍り付かせる。

しかし、氷の翼を全ての使いきったためにコキュートスフォームが強制的に解除される。

「よお、リーフィアにヴィヴィオ。大丈夫だったか？」

「できればもう少し早く助けに来て欲しかったです。」

「それでも急いで駆け付けたんだ。勘弁してくれ。それとヴィヴィオ。アタシは何も言わねえけど、母さんからのお叱りぐらいは覚悟しておけよ？」

杏子はニヤリと笑みを浮かべながらヴィヴィオにそう言った。ヴィヴィオもなのはのお叱りは覚悟していたのか、乾いた笑みを浮かべた。

「響!!」「うんっ!!」

前に出てガジェットを倒していた響は杏子の横まで後退する。そして、2人は頷き合うと右手と左手を翳した。

戦闘中にロビンが発見したのだが、杏子と響の魔力は魔力量こそ違うが、かなり似通った性質を持っていることが判明した。

百分率で表すと99.9%。クローンでもここまで奇跡的な数値は出せないらしい。

そして、ロビンは机上の空論になっていたある理論を2人に試して貰った。それは“ツインマギリンクドライブ”と呼ばれる理論で2人の魔力を共鳴・干渉させることで爆発的なパワーを生み出すことができる。

《即興で組み上げた魔法ですが、十分使えると思います。》

「ありがとよ、グーグンニル。」

2人の手から魔力が放出し、それが共鳴・干渉して“ツインマギリンクドライブ”が発動する!!

「天より来るは全てを切り裂く断罪の剣」

「2つの力を束ね　　這いずり回る亡者に裁きを」

「「今こそ　　断罪と裁きの剣が振り下ろされん」」

杏子と響は手と手を組み合わせてそのまま天に向けて掲げるように上に上げる。2人の魔力が共鳴し、巨大な西洋大剣を形成する。

「「ツイン・ジャッジメント裁きと断罪！！！！」」

10階建てビルと同じぐらいの大きさの剣をガジェットに向けて一直線に振り下ろした。

くゴコンッ！！！！

まるで地震が襲ってきたような揺れがクラナガン全域を揺らした。煙が晴れるとガジェットは殲滅されていたが、地面は深く抉れ、周

囲の建物もいくつか倒壊していた。

（やべえ……母さんに怒られるかも）

現在のクラナガンの惨状を目の当たりにして杏子は少し反省した。

この後、ジェイルⅡスカリエツィを機動六課のフェイトⅡTⅡハラウンが確保したという通信が入り、壮大な総力戦は終わりを迎えた。

しかし、この防衛戦の最中に地上本部のレジアスⅡゲイズ中將が死亡。さらに最高評議会も消滅。クラナガンも酷いダメージを受けてしまった。

第31話（後書き）

ようやくJS事件が終了。そして、東方パートに進めるぜ!!
といっても私は原作をまったく知らないんですよね。ニコニコの
動画や二次創作で見た知識しかありません。

第32話

『ジェイルⅡスカリエッティ事件』

稀代の天才科学者、ジェイルⅡスカリエッティが引き起こしたミッドチルダ最大規模の事件。

それにも関わらずこの事件における死亡者及び行方不明者は百人にも満たない。

しかしながら、この事件の最中、地上本部のレジアスⅡゲイズ中将与最高評議会が殺害されて現在、トップが居なくなった地上本部は混乱状態に陥っている。

S I D E N A N O H A

「今回の事件でクラナガンに結構な被害が出たね。」

「ああ。地上本部の実質トップが居なくなっただけで混乱中だから、復興には暫く時間が掛かるだろう。」

今回の事件で人的被害はなかったものの建物等が破壊された。しかも、クロノくんが言った通り地上部隊は混乱の真っ只中。クラナガン復興には時間が掛かるだろうな。

「そこで君に昇進の話が「御断りです」……最後まで言っていないんだが？」

最後まで言わなくてもわかるし。大方、ゲイズ中将の後釜になって欲しいとかそんな内容なのは目に見えてる。

なのはの人気は陸海問わず絶大なモノだ。そんなのはが地上本部のトップになれば、誰でもなのはに従うだろう。しかし、なのははこれまでも昇進の話を幾度となく断っている。

「大体、私はいくつも役職を兼用してるだけで異例なんだから。仕事を増やさないで。」

「ははは……手厳しいな。」

「それに、後釜ならゲイズ中將の娘が居たはずだから、その子に任せればいいでしょ？」

「それもそうだが……」

まあ、レジアス中将の娘 確かオーリスIIゲイズだったかな？ は魔導師じゃないから、魔法至上主義の人間が従わない可能性があるのはわかるけどね。でも、それを言ったらレジアス中将も非魔導師でも地上を統治してたんだから大丈夫でしょ。

まったく……魔法至上主義なんて百害あって一利なしなのに老害どもは。

というか、そろそろ自分の仕事に戻らせてくれないかな？この後、響とヴィヴィオの様子も見に行かないといけないんだから。あと、響の養子縁組に係る書類も。

「仕方ない。僕も仕事に戻るよ。実際、君が地上のトップになって欲しいという声が多いっていうのも忘れないでくれよ？」

そう言い残してクロノくんは去っていきました。誰が何と言っても昇進する気はないです。

私はもう人ではなく、妖怪の類い。人の政治に関わる訳にはいかない。

「ほとぼりが冷めるまで“幻想郷”で身を隠そうかな……………」

響やヴィヴィオと親睦を深めるのにはちょうどいいかも。貯まりに貯まった有給を全部使えば、2年ぐらいはゆつくりできるだろうし。その間の特務零課の指揮はジャンヌに任せればいいでしょ。

「これは名案」と言わんばかりになのはは人事部に2年ぐらいの有給を申請する。

有給を取ってくれと人事部は嘆いていたので、却下されることは絶対にあり得ない。

「でも、幻想郷に行くってことは…………… “あの子”にも会わないといけないのか。」

なのはは少し悲しそうな表情を浮かべた。なのは（奈々夜）にとって、“幻想郷”はもう1つの故郷だ。しかし、同時に大切な親友を失った場所でもある。

「元気にしてるかな……………、“霊夢”」

なのはの呟きを聞いている者は誰も居なかった。

???

第1世界ミッドチルダからそれなりに離れた次元世界の第97管理外世界には、管理局すら見つけれなかった幻の楽園が存在する。そんな楽園の少し小高い山の中腹に建設された立派な神社。

「はあ。今日もお賽銭は無しか。」

奇抜な赤と白の巫女服を着た少女は神社の賽銭箱の中身を見て、肩を落とした。

お賽銭はゼロ。つまりは、参拝客が全く来ていないことを表している。先代の時はたくさん参拝客が訪れてくれたが、ある日を境にその数はめっきり少なくなった。

「……………本当なら、この横には“あの人”が居るはずなのよね。」

境内の階段に腰掛けながら、少女は虚しくなった隙間をいとおしそくに撫でた。

彼女は巫女。なら、仕える神様が必ず居る。しかし、この神社に居るのは彼女だけ。

彼女は仕えるべき神様を否定しまった。

だから、この神社に神様は居ない。

「アタシって………本当に馬鹿ね。母さんが死んだのは、“あの人のせいじゃない。”」

少女は膝を抱えて蹲った。

ここは“博麗神社”。この神社と巫女は心の底でずっと守り神の帰還を待ち望んでいる。

書類仕事を終えた後、なのはは響とヴィヴィオの様子を確認するた

めに本局の廊下を歩いていた。

「 ツー!!!」

とある部屋の前を通り掛かる時、怒鳴り声が聞こえてきた。この声は……シスター・シャツハ？

つてことは怒られてるのは、杏子のクラスメイトか。助けて上げた方がいいかもしれないけど、学院を勝手に抜け出したのは事実。だから、口は出さないでおこう。

なのははそのままお説教部屋を通り過ぎた。

「ママ」

本局の休憩スペースにたどり着くや否や子供形態のヴィヴィオが突っ込んで来た。なのははヴィヴィオを優しく抱き止めた。

「2人とも検査は終わったの？」

「はい。」

「そっか」

ちなみに、勝手に戦場に出たヴィヴィオには、たっぷりお説教しておきました。どうやらヴィヴィオは私とリーフィアの会話を聞いてしまったようです。初めは驚いていたようですが、ヴィヴィオの親友であるユマが励ましたようです。

「じゃあ、私達の家に戻ろうか？」

S I D E H I B I K I

「此所が私達の家だよ」

「広っ!!」

えっと……養子縁組が正式に“高町”の姓を貰った私、高町 響ですが、なのは……お母さんが所有する一戸建ての家はかなり大きかったです。元の世界でもこんな大きな家に住んでる人なんてそうそ居ませんよ？

「響は二階の杏子の隣の部屋を使って。まあ、ずっと物置部屋になってた先に掃除しておくよ。」

「えっ！掃除ぐらい自分でしますよー！！」

「ふふ 気にしないでいいよ。家族なんだから。それよりも、響は杏子やヴィヴィオと一緒に服を買ってきて。いつまでも騎士甲冑なものも疲れるでしょ？」

ううっ……そう言われると反論できません。私の荷物は当然元の世界に残されたまま お姉ちゃんが残してるかどうか怪しいけど……
持っている服があのかのセンスがないボディースーツだけ。
今はヴァイスリッターの騎士甲冑生成機能で衣服を作っています。
元になったお姉ちゃんの騎士甲冑が普通の服でも十分通用するレベルだったので。

「でも、先日の戦闘で店とかも機能してないのでは………」

「中央通りの被害が酷いだけで裏通りとかの被害は少ないから大丈夫だよ」

そう言ってお母さんから渡されたのは、一枚のメモ。お母さんがよく行くお店までの地図のようです。その証拠に目的地は大きく印を点けられてとてもわかりやすくされています。

「というわけで行ってらっしゃい」

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「え〜と……………此処だ。」

お母さんから渡された地図に従ってやって来たのは、裏通りにあるお店。見た目はかなり古いけど、お店の中に売られている服はかなりレベルが高いことが一目でわかる。

まあ、ここにたどり着くまでに倒壊した建物の瓦礫が通路を塞いだり、ガジェットの動かなくなった残党が変な場所で詰まっていたり大変でしたが………

「あら、よくこのお店の場所がわかったわね。ここは知る人ぞ知る名店なのに。」

お店の奥から出てきたのは、モデル体型の妙齡の女性。かなり羨ましい。

響は自分の断崖絶壁に近い胸を見た。そして、目の前の妙齡の女性と比べてため息が零れてしまう。

「ちなみに、私はこのお店の店長。服も全部私の手作りよ？」

「「手作りなの（かよ）！！」」

「私は裁縫が大好きだからね。それよりも、貴女。ちょっと来てくれる？」

「？」

店長は響を招く。響は何の疑問も抱かずにお店の中に入る。その刹那、店長は響の腕をガシッと掴み、そのまま奥に連れ込んだ。

「杏子お姉ちゃん、助けなくていいの？」

「下手に助けたら、アタシが着せ替え人形になるからな。」

「？杏子お姉ちゃんは店長さんと知り合いなの？」

ヴィヴィオが小首を可愛らしく傾げて尋ねる。

「ああ。店の場所が変わってて気付かなかったが、店長とは一度会ってるよ。」

あの人はとにかく可愛いモノが大好きで最初はアタシも着せ替え人形にされた。」

杏子は少し昔（厳密には、杏子がなのはに拾われた直後）思い出すように空を仰ぎながら語った。

そして、着せ替え人形にされた響が出てきたのは、そのすぐだった。

「よく似合ってるわ」

「は、恥ずかしい」

カーテンの中から出てきた響は黒いゴシック調でフリルをあちこちにあしらった衣装を着ていた。

その姿を見たら、10人中10人が人形みたいという感想を漏らすくらいに似合っていた。響の肌は素体が太陽の下にほとんど出ない状態で生み出されたせいかわいなので、それが人形っぽさをより一層際立たせている。

「さあさあ、着て貰いたい服はまだまだあるんだから」

「い、いやです〜!!」

「よいではないか、よいではないか」

一枚の写真を撮った後、響は再び奥の試着室に連れ込まれた。響は散々着せ替え人形にされて解放されたのは、30分後だった。

ちなみに、響という犠牲によってヴィヴィオと杏子は巻き込まれなかったそうだ。

第32話（後書き）

次回からようやく東方Project編だ！！ 時間軸は赤い霧の
異変の終了の少し後。

しかし、幻想郷に渡る前にヴィヴィオの身体にある異変が・・・・・・
・！！

第33話

ジェイル「スカリエツィ事件終結から半年後。大被害を被った首都クラナガンも復興の兆しを見せて街は徐々に活気を取り戻しつつあった。復興には特務零課のメンバーや機動六課のメンバーが駆り出され、忙しい日々を毎日送っていた。

そして、この日はある2つの出来事が起こることになる。

S I D E N A N O H A

「ごめんね、リーフィア。荷造りを手伝わせて」

「構いませんよ。なのはさんたちが旅行に出掛けている間、下宿場所として使わせて貰えるのですから。」

私たち高町家一同は地上のほとぼりが冷めるまで“幻想郷”に暮らすことになりました。ちなみに、皆には何処で暮らすのか言っていないだよね。ちなみに、幻想郷の存在を知っているのは私とレイジングハートだけ。

「それよりも、機動六課の解散式に行かなくていいんですか？なのはさん、一応機動六課の教導官だったんでしょ？」

そう。機動六課は今日で解散。ティアナはフェイトちゃんの執務官補佐に、スバルは憧れの湾岸警備隊に、キャロとエリオはキャロの古巣である自然観察隊に、それぞれ旅立った。

特務零課が正式稼働してからはフォワードのことはクロノくん任せつきり。元々、はやてちゃんとは特務零課が正式稼働するまでという約束だったし。

「良いの。」

「まあ、私かとにかく言えることじゃないので何も言いませんが……」

「教導期間が長かったクロノくんの方が適任なの。さて、これで準備は完了。」

大して物は要らないため、なのはの手荷物は小型のポシェットだ。最もそのポシェットの中身は異次元空間になっているため、見た目以上に色々入っている。

「じゃあ、私はアースラに戻ります。」

「うん。特務零課のことはジャンヌと煌夜に任せてあるけど、リーファイも手伝ってあげてね？」

「はい。」

リーファイは丁寧にお辞儀すると高町家に備え付けられたアースラ直通のトランスポートに入り、アースラに戻った。
ちなみに、杏子とリーファイは数日前にザンクト・ヒルデ魔法学院を卒業した。リーファイは高等部に進学したが、杏子は進学しなかった。副隊長として仕事や研究に専念したいそうだった。

「さてと……響たちが帰ってきたら、出発だね。」

響と杏子はヴィヴィオを連れてロビンフットやアテナに会いに行っている。そろそろ帰ってくると思うんだけど……

ドタドタドタッ！！

パンツ!!

「母さん!!」「お母さん!!」

かなり慌てた様子で杏子たちが戻ってきた。

「ヴィヴィオが!!ヴィヴィオが!!」

「祠に触ったら、えっと」

2人ともかなりテンパってるね。これじゃあ、落ち着いて話もできないから……

なのはは腰に付けた異次元ポシェットから水色の瓶を取り出した。そして、瓶の蓋を外すとミントのような香りが周囲に広がっていく。すると、さっきまでテンパっていた2人が急に落ち着きを取り戻した。

「落ち着いた？」

「「ああ。(うん。)」」

「それでヴィヴィオに何かあったの？」

「多分見た方が早いと思います」

杏子の背中からヴィヴィオが顔を覗かせた。そんなヴィヴィオの頭には先端が黒くなったハニーブロンド色の猫耳を生やしたヴィヴィオが居た。

回想（三人称）

ロビンフットやアテナにしばらくミッドを離れる旨を伝えた後の帰り道。3人はクラナガンの中央通りを歩いていた。

中央通りも復興作業に取り掛かる作業員で一杯だった。

「ここも随分と復興が進んだな。」

「そうなの？」

「ああ。まあ、半年前と比べてっていう話だな。」

「ふん。」

その時、くいくいと響の服の裾をヴィヴィオが引っ張った。

「響お姉ちゃん、あれ何？」

ヴィヴィオが指差したのは、建物と建物の間にぽつりと置かれた祠だった。だが、瓦礫に押し潰されて半壊していた。外見だけをなんとか保っている状態で少しでも衝撃を与えれば、崩れ落ちそうだ。

「あれは祠だね。この世界にもあるんだ。」

「ほくら？」

「神様を奉る社のことだよ。たまに封印の基点として使われることもあるけどな。」

「へえ」

ヴィヴィオはトタトタと半壊した祠に近付く。祠の中には手鏡サイズの銅鏡が置かれており、その蝶は両端に猫のような像が置かれていた。鏡は瓦礫のせいで罅が入っていたが、目の前のヴィヴィオの姿をきちんと映し出している。そして、なんとなくヴィヴィオはその祠の鏡に触れた。

すると、祠の中に安置されていた銅鏡は眩い光を放った。

ごめんね、貴女の身体に入らせて貰うよ

ヴィヴィオの脳裏に直接語りかけるような優しそうな声が聞こえたような気がした。

その刹那、ヴィヴィオの身体が傾いて倒れそうになるが、響と杏子がヴィヴィオを支えた。

「立ち眩みか？」

「うん。でも、もう大丈夫だよ。」

「そう。良かった？」

「?どうしたの？」

響は無言で手鏡を取り出すとヴィヴィオに渡した。ヴィヴィオは少し不思議に思いながら、手鏡を覗いた。

「な、な、な………にゃあああああつ!!?」

ヴィヴィオの驚きの叫び声がクラナガンの街に木霊した。

回想終了

「なるほどね……………“妖猫”に憑かれた訳か」

杏子や響の話を聞いてすぐになのはは理解した。

「多分祠を寄り代にしてた妖猫が自分を生き永らえさせるためにヴィイオに憑いたんだよ。」

「妖猫って…本当に居るんですね。」

まあ、ほとんどの妖怪や神様は幻想郷に居るしね。それにしても、何でミッドチルダに妖猫の祠があるんだろ？

「ねえ、ママ。これ、何とかならないの？」

「妖猫の取り憑く力は凄いからね。引き剥がすのは無理だけど、元の姿を維持することはできるよ。」

「良かった」

ヴィイオは安心したように胸を撫で下ろした。

「詳しいな、母さん。」

「まあね。私が似たような存在だし。」

「「「?!」「」」」

私の言葉の意味を理解した杏子たちは予想通りの反応を浮かべてくれました。

まあ、ちょうどいい機会だし、杏子たちには見せておこうかな？管理局に見つかりと面倒なことになるから、結界を展開して……
・・よし。

杏子たちにも気付かれないように隠ぺい用の家の周囲に張るとなのは妖力を開放した。

髪の毛は緋色に変わり、尾てい骨から九本の尻尾が顔をのぞかせる。衣装も尻尾が出しやすいように専用の衣装に変わった。（戦闘時ではないので、巫女服を少し改造した動きやすそうな巫女服）

「これが、九尾の妖狐玉藻前を吸収した私の本当の姿。」

「「「「……」」」」

三人は開いた口が塞がらなかった。

「驚いた？でも、他の人には内緒だよ？」

なのはの言葉に三人はコクリと頷いた。それを確認するとなのはは立ち上がり、“空間を繋げる程度の能力”を発動。目の前にゲートを開いた。

ガシッ！！

「……へ？」

九本の内三本の尻尾がヴィヴィオたちに巻き付き、有無を言わせずゲートに先に連れ込んだ。

ゲートを使ってやって来たのは、第97管理外の日本大陸に存在するとある山奥の神社。

人気のない山奥に建てられたその神社は赤と白を基調としており、九尾の狐の像が飾られている。

この何の変哲もないように見える神社こそが幻想郷への入り口なの

だ。

「この神社には少し特殊な結界が張られてるの。管理局局員が束になっても破れない結界がね。」

「その結界の先が目的地なのか？」

「そうだよ。」

幻想郷と外界を隔てる最強の砦“博麗大結界”。この結界を行き来できるのは、幻想郷の創始者であるスキマ妖怪と私だけ。普通の人には外界の博麗神社にしかたどり着けない。

「“博麗の守り神”の名の下に幻想への扉を開け！！」

幻想郷に行くための呪文。それを唱えた瞬間、私たちは幻想郷に移動した。

真昼間から夜に変わり、夜空に浮かぶ満月と神社から漏れる光が真つ暗な周囲を薄暗く照らし出している。

「此处は……………」

「ようこそ、忘れられし者たちが集う理想郷へ。」

私が幻想郷を出て数年。幻想郷はまったく変わらない。
もしかしたら、新しい妖怪が増えてるかもしれないけど……

「幻想郷？」

「そうだよ。この幻想郷は外界と完全に隔離され、妖怪と人間が共存している。」

でも、たまに人を襲う妖怪も居るから気をつけるように。妖怪には絶対に勝てないから」

特にルーミアとかに出くわしたら、危険だね。あの子、いまいち会話が成立しないし。

「まあ、私が居る限り襲ってくる妖怪なんてそうそう居ないけどね。」

「お母さんって……何者？」

「……………」

響の質問になのはは黙り込んだ。

「私はこの博麗神社の元守り神。」

「「「！」「」」

「さあ、この博麗神社の主に会いに行くよ」

第33話（後書き）

東方Project編突入。

第34話 修正版

博麗大結界の要である博麗神社。その神社の居住スペースでは、毎年夏になると騒ぎ好きの妖怪たちが集まって大宴会を催すことになっていた。

そして、今年も夏の大宴会で盛り上がっていた。

「毎年毎年騒ぐのが好きね、妖怪たちは。準備をすることちの身にもなって欲しいわ。」

この大宴会の主催者である現・博麗の巫女、博麗 霊夢はドンチャン騒ぎする妖怪たち 一部、蓬莱人や半人半獣が交じっているがを眺めながら愚痴っていた。

「楽しいならいいじゃねえか。」

「魔理沙？パチュリーから逃げてたんじゃないの？」

「これのおかげだぜ。」

如何にも魔法使いばい服装を着た少女、霧雨 魔理沙が手に取ったのは青色の小瓶だ。そして、その小瓶は霊夢には見覚えがあった。

「まったく、パチュリーもしつこいぜ。」

「魔理沙が本を盗むからでしょ。」

「人聞き悪いこと言うなよ。私は借りてるだけだぜ？私が死ぬまで」

「それを世間では窃盗っていうのよ。そして、私の薬棚から持ち出したモノを返しなさい」

霊夢は手を出してそう言った。魔理沙が霊夢の部屋から勝手に拝借した薬品は「幻惑の香水」と呼ばれる香水でその香りを嗅いだ者は嗅がされた者の姿を認識できなくなる効果になる。効き目は10分。

「あら、懐かしい薬を持っているのね。」

「紫……貴女が宴会に参加するなんて珍しいわね。」

霊夢の斜め後ろに幾つもの目玉がじろじろと覗く黒い穴スキマが開き、その縁に傘を差して不思議な服を来た妙齡の女性が座っていた。女性の名前は八雲 紫。幻想郷にたった1人しか居ない種族の妖怪。幻想郷の創始者であり、“境界を操る程度の能力”を持っている。

「ついさっき、懐かしい友人が来たようだから顔を合わせに来たのよ。」

「懐かしい友人？あんたに友人なんか居たの？」

「ええ。貴女もよく知ってる……ね。っと、来たようね。」

さっきまでドンチャン騒ぎしていた妖怪たちは扉の向こうから感じられる巨大な妖気に警戒レベルを一気に引き上げた。

そして、神社の扉が静かに開かれた。入って来たのは、正装を着た高町 奈々夜だった。

「いきなり敵と判断するのは止めて欲しいな。」

宴会の最中にやって来た人物に全員が驚いた。この宴会の場に居るほとんどの妖怪が彼女のことを知っている。

知らないのは、最近宴会に参加させるようになった紅魔館の住人たちだろう。

「元“博麗の守り神”高町奈々夜、幻想郷に一時帰還しました。」

奈々夜はニッコリと笑みを浮かべながら、そう言った。

「なあ、靈夢。アイツ、“博麗の守り神”って言ってたぜ？」

「正真正銘此処、博麗神社の神様よ。私が拒絶してしまった…ね。」

靈夢は少し悲しそうに言った。しかし、誰にもわからないように靈夢は心の中で嬉しがっていた。

「奈々夜！！お前、今まで何処に行ってたんだ！？」

「ちょっと外界に里帰りしてた。」

奈々夜の登場に真っ先に反応した白髪にもんべを履いた少女、藤原妹紅は奈々夜に真っ先に突っ掛かってきた。

「お前が居ないせいで私はアイツの所に何回も行く羽目になったんだぞ！？」

「落ち着きなさい、妹紅。宴会の席で問題を起こさないでください。」

今にも奈々夜に飛び掛かりそんな妹紅を銀色に近い髪を持つ女性に羽交い締めされて動きを封じた。

「久しぶり、慧音。」

「お久しぶりです、奈々夜。」

「傷心旅行にしては長かったですね。」

上白沢慧音。奈々夜とは古い友人であり、九尾の狐になった直後で心を閉ざしかけていた奈々夜の心を再び開かせた人物でもある。また、人が好きな半人半獣で人里で寺子屋を営んでいる。

「まあ、外界で色々あったからね。おかげで幻想郷に戻るのに6年近く掛かったよ」

奈々夜は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「奈々夜、久しぶりに酒飲もうよ」

「ごめん、萃香。私、ちょっと用事があるの。」

「む」

萃香と呼ばれた幼い おそらく、この宴会の参加者の中で外見的に最も若い少女は不満を表すように頬を膨らませた。

「しばらく幻想郷に居るから、酒盛りはまた今度ね。」

「その用事と言うのは、貴女の後ろに隠れてる女の子のことかしら？」

霊夢たちの方に居た紫はスキマを通って奈々夜の方に移動していた。そして、少し鋭い視線を話の輪に入りかねている杏子たちに向けた。杏子たちは本能的に何かを感じたのか、ヴィヴィオを護るように得物を構えた。

「そんなに怖い顔しないで欲しいわ。別に取って食べるつもりなんて無いわよ。」

紫はクスクスと笑った。

「紫、あんまり私の娘たちをからかわないでくれる？」

「あら、ごめんなさい。」

奈々夜は「まったく変わってないね、紫」と心の中で呟いた。

「ここはおかえりなさい、って言うべきなのかしら？」

「靈夢……………」

紫に続いて靈夢が少しはにかんだような笑みを浮かべながら奈々夜に歩み寄って来た。奈々夜が幻想郷を出た時はまだ幼かった靈夢に懐かしみを覚えたのか奈々夜は靈夢の頭を優しく撫でた。

「大きくなったね、靈夢。それに、靈菜に良く似てる。まるで靈菜と再会したような気分だよ。」

「……………」

靈夢はいきなり奈々夜に抱き着いた。突然のことにテンパる奈々夜を意に介さず公衆の面前で抱き付いた。

そして、普段の靈夢を知っている白黒魔法使いや七色の人形使いは言葉が出ないほど驚いた

霊夢にとって奈々夜はもう1人の母親だ。霊夢の母親、霊菜が忙しい時は必ず奈々夜が小さな小さな霊夢の世話をしていた。しかし、霊夢はそんな奈々夜を拒絶してしまった。

「…………ごめんなさい。ずっと謝りたかった。あの時…………お母さんが死んじゃった時に奈々夜様に酷いことを言ったことを。」

霊夢は宴会に参加している誰にも聞こえないような小さな声で奈々夜に懺悔した。そんな霊夢を奈々夜は両手で抱き締めた。

「杏子、響、ヴィヴィオ、貴女たちもそんな所に居ないで入って来なさい。」

3人はおずおずとした様子で人外魔境に飛び込んだ。

「紫、私たちはしばらく幻想郷に居座るから。私の家は…………そのまま残ってるよね？」

「当然よ。誰も神様の屋敷を取り壊すなんて恐れ多いことはしないわ。」

「わかった。それと藍に頼み事があるの。」

「大方、見当は付くわ。その子でしょ？」

紫はヴィヴィオに視線を向けた。

「高町 ヴィヴィオ。私の娘の1人で妖猫に取り憑かれたの。まあ、どっちかと言うと同化の方が近いかも知れない。藍は教えるのが上手いから最適でしょ？」

紫と奈々夜の会話に出てくる“藍”という人物は奈々夜に妖力の扱い方を教えた人物で紫の式神。フルネームは八雲 藍。奈々夜と同じく九尾の狐だ。

「わかったわ。貴女のお願ひなら、藍も断らないだろうし。」

「ありがと。それと霊夢。いつまで泣いてるの？」

「な、泣いてないかないわ!!」

霊夢は声を上げて否定するが、霊夢の顔は少し赤く腫れていた。泣いていたのは丸分かりだ。

「ふふ まあ、そういうことにしておくよ。この宴会が終わったら、私の屋敷まで来て。」

「？」

最後の方は霊夢以外に聞こえないように囁いた。その刹那、奈々夜は自分の屋敷に繋がるゲートを開いた。

「奈々夜」

「？」

ゲートを潜り抜けようとしていた奈々夜を慧音が呼び止めた。

「治療用の薬草がなくなりそうなので、近々採りに行きます。」

「わかったよ。ちゃんと準備しておくよ」

慧音にそう返答すると奈々夜は杏子たちを連れて奈々夜の屋敷に続くゲートを潜った。

「さて、理由を聞こうか？」

何の問題もなく奈々夜の屋敷にたどり着いたが、たどり着いた後に問題が生じた。

仁王立ちする杏子とその前に何故か居る鹿目 まどかと美樹 さやかと巴 マミ、暁美 ほむらの4人。

「って言われても、私たちが付いたらこの世界に居たんだよ。いつも通りこの4人でつるんで……」

「鹿目さんが不思議な猫を見付けて……」

「その猫を追い掛けるまどかを私たちも追い掛ける内に……」

「この世界に漂着してた……か？」

4人はコクコクと頷いた。

（また紫だね。）

杏子の隣で話を聞いていた奈々夜はまどかたちを幻想郷に連れてきた犯人に心当たりがあった。

幻想郷と外界を自由に行き来できるスキマ妖怪、紫は外界から時折人を拐ってくる。現実世界で“神隠し”と呼ばれている現象はほとんどの確率で紫が主犯だ。

「はあ……。」

奈々夜は溜め息を吐いた

第34話 修正版（後書き）

幻想郷陣の登場です。この内何人が頻繁に登場するのだろうか？
それと見滝原魔法少女陣も再登場。特に理由はありません。

とある人よりでこの段階で諏訪子たちが居ると矛盾が生じるとの報告を受けましたので修正しました。

追伸 かなり昔の作品を少しずつ改訂（というより書き直しに近い）
することにしました。暇な時にしかないので全話改訂にはかなりの
時間がかかります。大学受験が終われば・・・・・・・・

第35話（前書き）

超短いです。

第35話

S I D E R E I M U

毎年恒例の大宴会が終わった後、私は奈々夜様に言われた通りに博麗神社の裏手の山にある屋敷を目指していた。屋敷と神社は大して離れてはない。

でも、私にとってこの屋敷に向かうための石段がとても高く思えた。一度拒絶して酷いことを言ったにも関わらず奈々夜様は私を受け入れてくれた。

それでも……私は“博麗の巫女”であってもいいのか疑問に思ってしまう。

「はあ……憂鬱だわ。」

本当に憂鬱。だけど、引き返そうなんて思わないのは何でだろ？

「貴女が心の奥で彼女のことを本当に慕っているからでしょ？」

「きゃっ!!」

急に声を掛けられて霊夢は思わず飛び上がった。

いつの間にか霊夢の背後にスキマが開き、そのスキマから紫から上半身と顔だけを出していた。

「霊夢も女の子なのね」 “きゃっ!!” なんて可愛らしい悲鳴が貴女の口から聞けるなんて思わなかったわ」

紫に指摘されて霊夢の顔が急激に真っ赤になり、トマトのように真っ赤になった。

「こ、この性悪スキマ妖怪!!今ここで討滅してやるわ!!」

「あら、私に勝てると思ってるの?」

お被い棒と呪符を構えてあの性悪スキマ妖怪を睨み付ける。先代や先々代はこの妖怪と結構仲良くやってたらしいけど、私には受け入れられない。

ぐいっ!!

「えっ？」

スキマ妖怪に接近しようとした瞬間、服の襟首が誰かに掴まれるような感触がした。スキマ妖怪の方も虚空から生えた腕によって服の裾を掴まれていた。

そして、そのまま空間の穴に引きずり込まれた。しばらく見てないから忘れてたけど、あの隙間って確か奈々夜様が移動に使うゲート・
・・・・。

「むぎゅっ！ー！」

「きゃっ！ー！」

ゲートから引きずり出されると紫の上に霊夢が乗り掛かる形で着地した。霊夢と紫が引きずり込まれた空間の穴の先は博麗神社の裏手の山の中にある奈々夜の屋敷（通称：博麗楼）の縁側だった。そして、その屋敷の縁側で九本の緋色の尻尾をゆらゆらと揺らしながら頬杖をついた状態でこの博麗楼の主、高町 奈々夜が座っていた。

「あのね、人の敷地で騒ぐのは止めてくれないかな？」

「す、すみません」

明らかに怒ってる奈々夜様を前に私もスキマ妖怪も素直に謝るしかない。

奈々夜様を知ってる奴らに幻想郷で一番怖いのは誰かと尋ねたら、全員口を揃えて奈々夜様を指名する。

奈々夜様を怒らせた妖怪たちが物理的にお仕置きされたのは、幻想郷の間でかなり有名。

つまり、今の幻想郷で一番怖いのは目の前に居る奈々夜様だ！

「もう怒ってないよ。ところで霊夢は招待したけど、紫は招待した覚えはないけど？」

「藍からの返答よ。“玉藻前様の頼みなら、断るわけがない”とのことよ。」

「了解。明日連れてくよ。」

「伝えたいことは伝えたから、私は帰るわ。」

それだけ言い残すと紫はスキマの中に消えていった。奈々夜は霊夢を呼んで隣に座らせた。

「どうして急に呼び出しんですか？」

「霊夢にどうしても渡しておかないといけないモノがあつたの。」

奈々夜が取り出したのは、刀身に特殊な文字が刻まれた日本刀。飾り気はなく、何とも簡素な作りになっている。しかし、その日本刀の刀身からは目に見えるほど濃い霊力が滲み出ている。

「はくれいがたな
“博麗刀”？」

「そうだよ。博麗の巫女が代々受け継いで来た刀。霊夢が博麗の巫女を継ぐなんて思わなかったから、渡さなかったけど……」

奈々夜様から博麗刀を受け取ると刀身に刻まれた紋章が輝き始めた。

「刀も霊夢を博麗の巫女だと認めたみたいだね。」

「でも……………私は奈々夜様を拒絶して……………」

「気にしないでいいよ。霊菜を助けられなかったのは、私が自分の能力を過信したのが原因だし、目の前で母親を殺されたら、誰だってそうなるよ。」

「……………」

今になって思うとあの時の私もどうにかしてたわ。

お母さんが殺されたのは、いつも通り奈々夜様と一緒に異変を解決した直後だった。

異変を起こした張本人がまだ幼かった私を人質に奈々夜様を殺そうとした。奈々夜様は不老不死だから、普通に殺されることはない。でも、そいつは“不死殺し”の概念武器を持っていた。そして、奈々夜様を庇ったのがお母さん。犯人はすぐに奈々夜様が討滅したけど、お母さんはそのまま死んでしまった。

「幻想郷を出た後、私はいろんな術を産み出した。霊菜の時のような悲劇を繰り返さないために。」

「どうして急に幻想郷へ？」

私がそう尋ねると奈々夜様は苦笑いを浮かべながらこう答えた。

「外の世界で色々あってね。そのほとぼりが冷めるまで幻想郷で身を隠そうと思ってね。」

「じゃあ、そのほとぼりが冷めたら幻想郷から出ていっちゃうの？」

「そうなるね。」

「行かないで！！」

私は思わず大声で言ってしまった。私の言葉が意外だったのか奈々夜様も目を丸くしている。

「貴女は“博麗の守り神”なの！？そんなに簡単に居なくなるとか言わないでよ！！」

「霊夢、私は“博麗の守り神”じゃないよ。」

「じゃあ、戻ってよ！！博麗の守り神に！！」

霊夢は目から大粒な涙を流しながら懇願した。すると、奈々夜は霊夢の頭を優しく撫でた。

まるで泣きじゃくる赤ん坊をあやす母親のように。

SIDE NANA YA

“博麗の守り神に戻ってよ！！”か……。この子の口からそんな言葉が出てくるなんて思ってもなかったよ。

でも、私は心の何処かで霊夢にそう言われるのを望んでたかもしれ

ないね。だから、神通力の封印解錠を拒んだのかもしれない。

「霊夢、私は“博麗の守り神”に戻ってもいいのかな？」

「ぐすっ……うん。」

散々泣きじゃくった霊夢の頬は赤く腫れ上がっていたが、しっかりと首を縦に振った。

「巫女が求めてるんだから、神様が応えないわけにはいかないね。」

幾重に掛けられた封印を1つずつ解錠してずっと封印していた神としての力 神通力を解き放つ。

私の身体から放出される神通力によって、博麗楼の周りの植物が元気になったような気がする。

そう言えば、この周囲に植えてある植物は私の神通力を浴びながら育ったんだっけ。

「博麗の守り神、高町 奈々夜。再び降臨ってね。」

奈々夜はクスッと笑みを浮かべた。

「博麗の守り神が戻ってきたみたいね。」

幻想郷のどこかに存在する武家屋敷のような趣の八雲邸。その縁側に開かれたスキマの縁に腰かける紫は博麗屋敷から放たれた神通力を鋭敏に感じ取っていた。

「人と妖あやかの調律師”高町 奈々夜。この私が成し遂げられなかった人と妖の共存を真に成立させた神。まさかここまで大きな存在になるなんて思わなかったわ。」

紫が奈々夜を幻想郷に誘ったのは、単なる気まぐれ。いつも通り外界を放浪していた時にたまたま玉藻前と融合した奈々夜を見付けただけ。その時の奈々夜は非常に荒れており、突然現れた紫に容赦な

く襲いかかるほどだった。

しかし、幻想郷を一人で守ることができるような力を持つ妖怪の賢者はそんな状態の奈々夜を倒した。そして、紫の提案で奈々夜は幻想郷にやって来たのだ。

「でも、奈々夜が連れてきた妖猫憑きの子供……霊力は微塵も感じられなかったけど、どうして妖猫に憑かれたのかしら？」

紫の呟きは誰にも聞こえなかった。

「まあいいわ。幻想郷はすべてを受け入れる。」

紫はクスクスと笑いながら屋敷の中に消えていった。

第35話（後書き）

東方Project編ではなのはを奈々夜と表記します。

ちなみに、奈々夜の幻想郷での実力は紫の次ぐらい。二つ名は「妖と人の調律師」、「博麗の守り神」等々。

第36話

S I D E N A N O H A

奈々夜が“博麗の守り神”に戻った一夜が明け、杏子たちは幻想郷で初めての朝を迎えた。

そして、日が昇り始めた直後だというのにも関わらず奈々夜は屋敷の庭に出て、鼻歌交じりに植物に水を与えていた。

「
　　」

奈々夜たちが住む博麗楼の庭はかなり広く、山の川を利用した灌漑システムを使用してまるで高級旅館のような趣がある。そんな庭で群生する植物は奈々夜が作る秘薬の原料となる。

群生している薬草はすべて奈々夜が物質改変で遺伝子改変したこの博麗楼以外には生えていない薬草なのだ。効果は抜群なので人里の人間が時折薬を貰いに来る。

「さすがは幻想郷の植物。6年近く手付かずだったのにまったく枯れてないや」

それとも霊夢が定期的に水遣りやっておいてくれたのかな？まあ、

聞くような野暮なことはしないけど。

そう言えば、紫に連れてこられたあの子たち……………どうするのかな？ 帰りたいなら、すぐにでも帰すけど。

「水遣り完了。」

ふう。いくら能力を使って楽しんでるからといってこの広さに均等に水遣りするのは骨が折れるな。

さて、次は……………この周囲に結界を張っておかないと。私や響は大丈夫だけど、杏子は魂が肉体から離れてるから、霊に憑依される可能性があるし。

幻想郷にも、悪霊や地縛霊は居る。杏子やさやかたち魔法少女は魂と肉体が分離してしまってるため、悪霊や地縛霊に憑依される可能性が極めて高い。

奈々夜は腰に取り付けた術符収納ホルダーから四枚の術符を取り出し、東西南北の虚空に配置する。それぞれの術符には、玄武・青龍・朱雀・白虎の絵が描かれている。

「北の玄武、東の青龍、南の朱雀、西の白虎。四天の聖獣の下に守りの壁を展開せん！！」

四枚の術符を起点として博麗楼の周囲に悪霊や地縛霊の侵入を退ける結界を展開した。

「よし。これで悪霊や地縛霊はこの博麗楼には入ってくることはできない。」

朝の内にやっておかないといけないことは終わったし……………神社の方に顔を出そうかな？」

ヴィヴィオたちが起きるまでまだ時間があるから、ちょうど良いかも。

奈々夜は朝日が登ったばかりの空に上がり、博麗楼の麓にある博麗神社に向かった。

奈々夜がちょうど博麗神社に向かった頃、あてがわれた寝室でヴィヴィオ・杏子の2人と一緒に寝ていた響が目を覚ました。

「うー、もう朝か……………」

ぐぐつと身体を伸ばして身体の凝りをほぐす響。響は高町家の中で

奈々夜の次に起きるのが早い。

「はあゝ……昨日は色々あつて疲れたな」

響はヴィヴィオと杏子を起こさないように寝室を出て、奈々夜が手入れしていた中庭に出た。

すると、中庭に咲く薬草の不思議な薫りが響の鼻孔をくすぶった。その心地好い薫りが疲労のたまった響を癒していった。

（なんだろう………また眠気が………）

薬草の薫りのせいか覚醒したはずの意識が再び朦朧として来て、響の意識は再び眠りについた。

一方、博麗神社に向かった奈々夜は……………

カキンッ カキンッ カキンッ カキンッ

霊夢に剣の稽古をつけていた。奈々夜が使っているのは、魔力・霊力・妖力・神通力の四力すべてに対応した奈々夜の自信作 神剣パラディオン。霊夢の刀は“博麗の巫女”の証 博麗刀。

「ふっ!!」

カキンッ!!

一際甲高い金属音を立てて博麗刀が霊夢の手から弾き飛ばされた。

「ん。最初に比べたらだいぶマシになった。」

「ぜえ……ぜえ……つ、疲れた」

おかしい。少しバテるのが早すぎるような気がする。普通に修行してたなら、息1つ乱れないはずなんだけど……

「ねえ、霊夢。巫女の修行、ちゃんとしてる？」

あつ！！目逸らした！！でも、紫が言うには霊夢は何個か異変を解決してるらしいから、一通りは終わらしたのかな？

「霊夢、力の過信は己だけじゃなく周りの人も滅ぼすよ。」

「私のように、ね。」と奈々夜は自虐的なセリフを呟いた。苦笑いを浮かべながらそんなセリフを呟く奈々夜は、未だに霊菜のことを引き摺っているようだ。

「そう言えば、霊夢にまだお礼言ってなかったね。」

「？」

「スペルカードルールを完成してくれて、ありがとう。」

「あ……………」

奈々夜は右手で霊夢の頭を優しく撫でた。

スペルカードルールは傷付け合う妖怪たちを見るのがいたたまれなく先代“博麗の巫女”博麗 霊菜が作り出したシステムだ。しかし、相手に傷を負わずに闘うのが大好きな妖怪たちを満足させることは困難だった。スペルカードルールが完成する要因となったのが、奈々夜が外界より持ち込んだ『非殺傷設定システム』だ。だが、スペルカードルール完成間近な時に主導者である霊菜が死亡し、奈々夜も幻想郷から去ってしまった。それゆえに、スペルカードは完成しなかったのだ。

閑話休題

「私は何もしてませんよ。基本理論はお母さんと奈々夜様がもう組

み上げてあつたし。」

「謙遜しないでいいよ。過程はどうであれ、霊夢がスペルカードル
ールを完成させて普及させたのは事実なんだから。」

「こんにちは」

剣の稽古を一時中断していると博麗神社に1人の来訪者が現れた。
メイド服を着た銀髪の女性だ。

「吸血鬼の所のメイドじゃない。どうしたのよ？」

“吸血鬼”っていうと……紅魔館かな？別に人に危害を加えること
もなかったから、放置してたけど。

「パチュリー様のお薬を貰いに来ました。」

「あ……ごめん。いつもの薬はもう無いのよ。」

「そう……ですか……」

紅魔館のメイドはしゅんと頂垂れた。

しかし、忘れていないだろうか？博麗神社に置いてある薬は博麗楼で採取された植物を奈々夜が調合したことを。

「霊夢、いつも渡してた薬って？」

「喘息を止めて和らげる薬。」

「……霊夢、今日の稽古は中止。ちょっと薬を調合するよ。」

「はい。」

奈々夜はパラディオンを腰に差して、霊夢は博麗刀を鞘に戻した。
奈々夜は博麗楼の中庭にゲートを繋げて、目的の薬草を摘み取った。

数分後

「はい、薬」

「あ、ありがとうございます。」

調合から僅か数分で喘息用の薬は完成した。

「では、私はこれで。」

奈々夜から喘息用の薬を受け取ると博麗神社をあとにした。

それにしても、普通の人間が紅魔館のメイドねえ。私が居ない間に幻想郷も変わったものだね。

普通、人間は人里で集住している。妖怪が住む山や森に近付く命知らずは居ない。例外としてこの博麗神社があるけど、私は妖怪というより神様として認識されているので除外。

「じゃあ、霊夢。続きでしょうか？」

「はい。」

く紅魔館 地下く

湖の畔に立つ立派なお屋敷 紅魔館。レミリア「スカーレットという幼い容姿の吸血鬼がその屋敷の主であり、奈々夜が幻想郷に戻ってくる少し前に起こった“異変”の中心でもある。

その屋敷の地下に“大図書館”と呼ばれる幻想郷で最大の蔵書量を誇る図書館が存在する。この図書館には、魔理沙も度々訪れて本を強奪していく。

「パチュリー様、いつものお薬をお持ちしました。」

「ごほっ…ごほっ…悪いわね、咲夜。」

この大図書館の主、パチュリー「ノーレッジはこの屋敷唯一の人間であり、メイド長の十六夜 咲夜から薬を受け取ると一気に飲み干

した。

「はぁ……はぁ……まったく嫌になるわ、このか弱い身体が。」

パチュリーは1人愚痴った。パチュリーは身体が弱いため、あまり動き回ることができない。

「でも、そんな身体ともお別れだわ。」

「治療法が見つかったのですか？」

「ええ。つい最近幻想郷に帰ってきた博麗の守り神の力を使えば……
……ね。」

「？博麗の守り神の能力は空間関係だと仰ってませんでしたか？」

「妖怪の中には2つの能力が発現する者も居るわ。そのもう1つの力を使って貰えば、全て解決するわ。」

というわけで、咲夜。博麗の守り神を紅魔館に連れてきてちょうだい。」

「わかりました。」

第36話（後書き）

Wikiとか東方の二次創作とか見ると諏訪子たちが幻想郷にやって来たのは、春雪異変の終了前後になってますが、実際のところどうなんでしょうか？

もし、諏訪子たちが最初から幻想郷に居ないなら、色々書き直さないといけないのですが………

追伸。とある人が指摘してくれたので、修正しました。

第37話

V I V I O S I D E

奈々夜が幻想郷に娘たちを連れて帰還した翌日の午後。霊夢との剣の稽古を終えた奈々夜はヴィヴィオを連れてスキマ妖怪…もとい、八雲 紫の屋敷を訪れていた。

「さあ、ヴィヴィオ。此処がヴィヴィオに力の使い方を教えてくれる先生が居る屋敷だよ」

「お、おおきい」

何故かようびょうに取り憑かれたちゃったわたくし、高町 ヴィヴィオはなのはママに連れられて大きなお屋敷にやって来ました。なのはママのお屋敷も大きかったけど、同じくらい大きい。

「らっくん、居る？」

奈々夜が呼ぶと屋敷の中から中国風の衣服を着た女性が出てきた。帽子のような物で耳を隠しているが、背中に生えている狐色の尻尾

は堂々と見せているその女性の名前は八雲 藍。奈々夜と同じ九尾の狐であり、紫の式。

「御待ちしておりました、玉藻前様。」

「藍、いい加減様付けは止めて。むずかゆくて仕方ないの。」

「妖狐の王が何を仰るのですか。それで……………そちらの少女は件の妖猫ですか？」

なのはママが藍と呼んだ女の人が私を見詰めてくる。でも、藍さんの瞳はとっても優しそうだっただ。

「初めまして。貴女の教師役になる八雲 藍です。」

「た、高町 ヴィヴィオです!!」

間近で見るとなのはママと同じくらい綺麗な人……………。

「では、部屋に案内しましょう。」

奈々夜とヴィヴィオは藍の案内で八雲邸の中に入っていた。

NANAYA SIDE

奈々夜とヴィヴィオが藍に案内されたのは、八雲邸の縁側に面した少し広めの畳張りの和室だった。ヴィヴィオは知らないが、その部屋はかつて奈々夜が藍から力の使い方を教わった場所である。

「では、授業を始めましょう」

藍は下縁のメガネを装着する。私の時もだけど、藍は誰かにモノを教える時は必ずメガネを装着する。似合ってるから、本当の先生のように見える。

「ヴィヴィオは四力を知っていますか？」

「えっと……妖力・霊力・神通力・魔力の4つの力です。」

「その通りです。私たち妖怪が使う妖力、巫女のような人間が使う霊力、魔法使いが使う魔力、人々から信仰を集めた神が使う神通力。貴女のその姿は急に追加された妖力をちゃんとコントロールできてないからなの。」

正確に言えば、霊力と妖力の釣り合いが崩れてるのが原因なんだけどね。

霊力は人間なら、大なり小なり持っている。ただ普通の人は量がとて少ない。だけど、突然変異で霊力が多い人間が生まれてくる。そういう人が巫女になる。

私は突然変異で保有する霊力が多く、ヴィヴィオは一般人と同じレベル。だから、かなり妖力を抑え込む必要がある。

「まずは妖力を知覚しないといけないから………」

藍はヴィヴィオの肩に手を置いて少しずつ妖力を注いでいく。

「貴女の身体の中に注ぎ込まれているのが、妖怪の力の源です。自分の中から同じ力を探し出してください。」

ヴィヴィオは素直に頷くと目を閉じて、意識を自分の内側に集中させた。

「あっ……………」

どうやらヴィヴィオも妖力の源を見つけたみたいだね。後は源から放出される妖力をコントロールするだけなんだけど……………これが難しいんだよね。

「妖力は全身に張り巡らされてます。人の姿を保つには、妖力を自在に出し入れできるようにならないといけません。」

「妖力を収納、妖力を収納……………」

ヴィヴィオは頑張って妖力を収納しようとするが、妖力は一向に源に収納できない。

妖力は魔力のよりも扱いが難しい。そう簡単に妖力の出し入れができるわけがない。ちなみに、奈々夜は妖力の扱いを完全マスターするのに1年ほど掛かった。

「藍、ヴィヴィオは任せていいかな？」

「はい。」

さて、私が居ても邪魔なだけだし……人里の様子でも見に行こうかな？

奈々夜は能力でゲートを作り出してゲートの中に飛び込んだ。

K Y O U K O S I D E

その頃、博麗楼では……

「お前ら、これからどうするんだ？母さんに言えば、すぐにも元の世界に帰れると思うが」

つか、何でコイツらは此处に連れてこられたんだ？母さんが言うには、外界と幻想郷を行き来できるのは母さんと八雲 紫っていう妖怪だけらしいし。

「アタシはすぐにも戻りたい。」

「私も。お母さんやお父さんが心配してるだろうし。」

「まどかが戻るなら、私も戻るわ。」

インキュベーターが居なくなってもほむらは相も変わらずまどか依存症（アタシ命名）か。

お前、下手をすれば変態扱いされるぞ？

「私はもう少し残っていたいかな」

「えええええっ！！！！」

この面子の中で一番歳上であるママから意外な答えが返ってきた。そして、帰ることを決めていたさやかとまどかは声を上げて驚いた。ほむらはまどか以外に興味はないので無関心。

「だって、この世界って伝承で伝わるような人物が一杯居るのよ？」

……マミの奴、もしかして神話マニアか？

「架空の存在の鬼も居るし、有名な玉藻前も居たし、こんな理想郷なんて他に無いわ！！！！」

目をキラキラと輝かせて語るマミ。どうやら杏子の予想通り神話マニアだったようだ。

「それにしても暇だな。響、少し運動しようぜ……って、アレ？」

アレ？響が居ねえ。さっきトイレに行ったり戻って来てねえのか？

ドカーンッ！！

その刹那、博麗楼で大きな爆音が轟いた。

「な、なに！？」

「ば、爆発！？」

爆音を聞いて真っ先に動いたのは、杏子だった。すぐに障子を開けて外庭に出ると妹紅と響が札のような物を持って対峙していた。

「舞符『踊る妖精』！！」

「効かねえ！！」

響は無数の魔力弾を妹紅に向けて放つが、妹紅の炎が不規則に動く魔力弾を焼き尽くす。

「それなら、舞符『狂乱の宴』！！」

響の周囲に魔法陣が浮かび上がり、その魔法陣から一斉に砲撃が放たれた。

「奈々夜と似たようなスペルカードを使いやるな。」

流石に極太な砲撃型のスペルカードを焼き尽くすことは出来ないの
で、妹紅もスペルカードを取り出した。

蓬萊「凱風快晴　・フジヤマヴォルケイノ」！！！！

妹紅が使用したスペルカードは響の弾幕をすべて焼き尽くした。

「残念だったな」

「何やってんだ、お前ら。」

「ん？『弾幕ごっこ』」

『弾幕ごっこ』とは、スペルカードを用いた決闘のことである。
使用するスペルカードを宣言し、力尽きるか宣言したスペルカード
を全て破られたら、敗北という幻想郷特有の決闘だ。

「お母さんの書斎で偶々余ってるスペルカードがあったから、妹紅
さんに作り方を教えてもらって実際に作ってみたの。」

「勝手に使っているのかよ」

「大丈夫だ。奈々夜は自分の書斎に腐るほどスペルカードを溜め込

「んでるから。」

結果的には許してくれると思うが、それでも笑みを浮かべながら少しお説教されると思うのはアタシだけか？

一方、人里に降りた奈々夜はというと……九尾の特徴であり、妖怪の証拠である耳と尻尾を隠すことなく、人里を徘徊していた。

「ふふ 六年前とまったく変わらないみたいで安心した。」

六年間、人と妖怪の調律師である奈々夜が不在だったのにも関わらず人里の市場にちらほらと妖怪の姿が見える。

奈々夜が人里に降りたのは、自分が不在していた間の人里がどうなっているのか確認するためだが、奈々夜の心配は杞憂に終わったようだ。

《マスターが幻想郷を去って六年も経ってますが、人里は変わりませんね》

「そうだね。あれ？あの家の周りが騒がしいね。」

《行ってみますか？》

「当然。人里の異変を解決するのも私の役目だから」

そう言うや否や奈々夜は人混みができている一軒の家に向かった。

「一体何があったの？」

「この子供が不治の病に掛かってな。永琳さんでも、治せないらしい。」

「ふん……」

それを聞いた奈々夜は人混みを掻き分けて奥に進んでいく。
奈々夜に気付いた人間が「な、奈々夜様！？」と驚いていたが、気にすることなく家に入る。

「な、奈々夜様！？お帰りになられてたのですか！？」

「少し前に、な。それより、不治の病に掛かったという子供はこの子か？」

「はい」

布団の上に寝かされている少女。髪は黒で呼吸が荒く、とても苦しそうだ。

「魔眼、発動」

魔眼の封印を解除して少女の病態を確認する。

（これは……肺がんか。他の場所に転移してる可能性もあるから、ほとんどの細胞を改変しないと駄目か）

奈々夜は苦しそうに呼吸している少女の額に手を付ける。

（物質改変、発動！！）

奈々夜は少女の細胞全てを普通の状態に“改変”していく。非常に単純な作業だったので治療はほんの数分で終了した。

「治療終了。元凶を消滅させたから、大丈夫だよ。万が一、何かあったら博麗神社まで来て」

それだけ言い残すと奈々夜はすぐさま人混みを抜け出してその場からそそくさと立ち去った。

「ふう。」

《お疲れ様でした。》

奈々夜は木製のベンチに腰掛けて一息ついた。

「精密な作業じゃなかったから、少しマシだけど、一人一人の身体全てを改変するのは少し疲れるや。」

《一人一人を改変するなんて滅多にしませんからね》

「私を含めて2人目だよ。それと……いつまで隠れてるつもり？」

奈々夜は斜め後ろに立っている太い樹の後ろに隠れている人物に声を掛けた。

妖怪の特性ゆえに奈々夜は人の気配や魔の気配には敏感だ。完全に気配を消さないと奈々夜をストーキングすることはできない。

「……………」

「あら？貴女は今朝の」

「はい。その節はお世話になりました。」

「また薬でも貰いに来たの？」

「いえ。実はパチュリー様より貴女を紅魔館に連れてくるように頼まれました。少しだけ……時間を貰えないでしょうか？」

第37話（後書き）

更新が遅れてすいません。矛盾を解消するためにストックの書き直しついでにプロットも考え直していたら遅くなっちゃいました。

第38話

N A N A Y A S I D E

人里で肺がんを患っていた少女を治療した奈々夜は人里より離れた「妖怪の山」の麓にある「妖精の泉」の畔を咲夜に連れられて歩いていた。

「それで。しがない神様を連れて一体何をさせようと言っの？」

「詳しいことは私も知りません。ただ、私はパチュリー様に貴女を連れて来るように頼まれただけなので……………」

「ふん……………」

私をわざわざ連れて来させる理由なんて『物質改変能力』しか思い付かない。

「あーっ!?!」

「妖精の泉」を抜けて紅魔館に向かおうとしていた奈々夜と咲夜の前に立ちはだかったのは、背中に六枚の氷の羽根を生やした青い髪の若い少女だった。

「面倒なのが来た……………」

奈々夜は深い深いため息を吐いた。

「何だよ！！あたいは最強なんだぞ！！」

「いい加減自分の力量を考慮。自称最強バカ」

「バ、バカじゃないもん！！こうなったら、あたいが最強だって証明してやる！！」

奈々夜の前に立ちはだかったのは、チルノ。妖精には珍しく知性と強い力を持った氷の妖精。何度も人里に迷惑をかけていたのでその度に奈々夜にお仕置きされていた。

それでも懲りずに博麗神社に襲撃を仕掛けては奈々夜か博麗の巫女に撃退されたという過去を持っている。基本的にバカだが、その力は先代“博麗の巫女”博麗霊菜も舌を巻くほどだ。

閑話休題

チルノが取り出したのは青色を基調にしたスペルカードだ。奈々夜も渋々と札型のスペルカードを取り出した。

「面倒だから、使用するスペルカードは三枚。精々、頑張つて避けなさい」

「むつ。バカにするなー！！今日こそ、お前を倒してやるんだからなー！！」

「はいはい。」

突っ掛かってくるチルノを適当にあしらう奈々夜。

氷符『アイスガトリング』！！

チルノがスペルカードを発動させると氷の刃が弾幕になって奈々夜に襲い掛かってきた。

「斬符『凶戦士の猛攻』」

奈々夜はパラディオンを抜き放ち、チルノの弾幕を相殺するために無数の斬撃を飛ばした。

「結界『空間隔離』」

奈々夜は新しいスペルカードを発動させた。しかし、何の変化もない。

「？何も起こらないじゃん。」

「霊符『夢想封印・黒』！！」

黒い弾幕が形成される。霊夢が使う『夢想封印』より弾幕は薄いが一つ一つの黒い球体が大きく、一撃の威力が高くなっている。

「そんな薄い弾幕があたいに効くと思ってるの？」

「じゃあ、避けてみれば？」

「言われなくてもそうする……………へっ？」

チルノが右に行こうとしても左に行こうとしても何故か元の場所に強制的に戻される。上下も同じだ。

「それが結界『空間隔離』の効果だよ」

先程奈々夜が使った“結界『空間隔離』”は対象者の周囲の空間を元の場所に繋げて一定範囲外には出れないようにするスペルカードだ。“空間を繋げる程度能力”を持つ奈々夜だからこそできる技だ。

一見、何も起こっていないように見えるので回避するのは非常に困難だ。

「これで終わりだね」

黒い弾幕が一斉に消滅したかと思うとすべての弾幕がチルノの周囲に展開されていた。

「発射」

奈々夜がそう呟くと黒い弾幕がチルノに襲い掛かった。そして、チルノの閉じ込められた空間に美しい黒色の花火が打ち上げられた。

「はい、終わり。」

「お見事です。」

チルノに少し足止めされたものの奈々夜と咲夜は再び紅魔館に向かって歩き始めた。

「zzz……」

チルノの妨害の後には特に何事もなく紅魔館にたどり着いた。
しかし、紅魔館の門で一つ問題が起こった。緑色のチャイナ服ばい

衣装の門番らしき女性（但し、昼寝中）とそのだらけている門番に
怒り浸透な紅魔館メイド長の十六夜 咲夜。

「すみません。少しお時間を頂けるでしょうか？」

「ええ。」

奈々夜の了承を得ると咲夜は門番を引き摺って紅魔館の中に入って
いった。
その後、女性の叫び声と必死に許しを乞う声が聞こえたのは言うま
でもない。

道順に色々トラブルがあったが、奈々夜はようやくパチュリーの
根城である紅魔館地下 大図書館にたどり着いた。

ここが大図書館か……。霊菜から何度か話は聞いたけど、実際に

足を運ぶのは今日が初めてなんだよね。
大図書館って呼ばれるのも納得できる。蔵書量が半端じゃない。

「パチュリー様、博麗の守り神をお連れしました。」

「ありがとう、咲夜。」

咲夜が白い衣装を着た女性に話し掛けると「パチュリー」と呼ばれたその女性はパタンと読んでいた本を閉じた。

「初めまして、博麗の守り神。私はパチュリー・ノーリッジ。生まれながらの魔法使いよ。」

「博麗の守り神。名前は高町 奈々夜。それでわざわざ私に何の用？」

「貴女のあらゆる病気を治す能力があると聞いたわ。」

あゝ……要件が完全に理解できた。病気を治しているのは、病に犯された細胞を物質改変能力で元に戻してるだけなんだけど、何故かみんな勘違いして私の能力が「病を治す力」だと思ってるんだよね。

「病を治す力はないけど、病を治すことはできるよ。」

「?どういうこと?」

「私の能力は“空間を繋げる能力”と“意のままに物質を改変できる能力”の2つ。病気が治ってるのは、私がそういう能力の使い方をしてるだけ。」

よく勘違いされるんだよ。」

「ふん……。ねえ、物質を意のままに改変できるってことは弱い身体を強くしたりできるの?」

「肉体も物質であることには変わらないからね。」

さて、この子の病は一体何かな?

そう思つて、奈々夜は魔眼『全てを見透す瞳』を発動させる。

この魔眼は物質の解析だけではなく、病人が患っている病気やその病気の根源を見ることがもできる。奈々夜が病を治療する時は頻繁に使用する。

アトピー型の喘息か……。となると、この子の場合は身体をアレ

ルギーの無い身体にすればいいのか。
まあ、さつきよりは楽かな？

「珍しいわね。魔眼　しかも、戦闘タイプじゃなくて研究タイプの。
確か、“全てを見透す瞳”だったかしら？」

「知ってたんだね。これも能力で自分の目を改変したんだよ。」

「貴女、自分の身体を改造の？」

パチュリーは呆れたような口調で言った。

「まあ、ね。」

奈々夜は自分の肉体を不老不死に変えた時のことを大して覚えていない。

自分の死を本能的に悟り、「死にたくない」という一心で自分の身体を改変した。

魔眼を自分に施したのは、その後のことでそれはそれは大層な激痛を伴う大仕事だった。

その時のことを思い出して奈々夜は遠い目をした。

「まあ、私には関係ないのだけど。それで、何とかできそう？」

パチュリーの質問に奈々夜はコクリと頷いた。そして、パチュリーの額に指先を当てて物質改變能力を發動させた。ちなみに、地肌に直接触れるのはそうしないと物質改變能力が上手く使えないからだ。

ううっ……面倒なことになった。細胞一つ一つに特殊な魔法が掛かっている。

奈々夜は幻想郷の魔法にそれほど精通しているわけではないので、その魔法の正体は分からなかったが、パチュリーの細胞一つ一つに施された魔法は“捨食の魔法”と“捨虫の魔法”だ。魔法使いは、この魔法を習得することで一人前の魔法使いとなる。効果は食事を摂らなくてもよくなり、寿命という概念が無くなる。簡潔に言えば、不老不死になる魔法だ。

仕方ない。思考を2つに分割して魔法の保護をしつつ、細胞の改變。
マルチタスク並列思考を使いながらの物質改變は初めてだけど、やるしかない！！

奈々夜は並列思考マルチタスクを使って、器用に2つの作業を同時に進行させる。物質改變能力で重要なのは、改變後のイメージなので大した苦痛にはならないが、邪念の一切を切り捨てて集中しないといけないため、根気の要る作業だった。

数分後……………

「身体がとても軽い」

「上手くいった……良かったね」

「ぜえ、ぜえ……………さすがに並列思考を使いながらの物質改変は堪えるよ。」

「今度から絶対に並列思考しながらの物質改変は絶対にしないようにしよう。」

「奈々夜は心の中で誓った。」

「貴女のおかげで面倒な病から解放されたわ。ありがとう」

「どう致しまして。代わりにこの大図書館を自由に使ってもいいかな？」

「別に構わないわ。貴女、アイツと違ってちゃんと本を返してくれ

「そうだし。」

「アイツ？」

「この大図書館に度々訪れて貴重な本を盗んでいく不届き者が居るのよ。」

本人曰く、“私が死ぬまで借りるだけだ”らしいわ。」

パチュリーは深い溜め息を吐いた。一般人が聞けば、パチュリーの言う“アイツ”は間違いなく盗人だと思っだろう。

「それなら、ちょうどいい魔法を知ってるよ？」

「ほんと!？」

「うん。あのね……………」

この後、少し話し込み、奈々夜は大図書館から五冊だけ本を借りて幻想郷の北東の端の八雲邸までヴィヴィオを迎えに行った。

ちなみに、この後、パチュリーが管理する大図書館に無断で本を持ちだそうとした白黒の盗人がトラップに引っかったのは余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7114t/>

魔法少女と魔導師

2011年10月5日21時36分発行